

教育は いま

第8号

- ◆総合的な学習の時間の推進に関する研究（第3年次）
- ◆「仙台市の子どもー2000」－児童生徒実態調査－
- ◆情報教育の推進に関する研究

仙台市教育センター

は　じ　め　に

いよいよ新世紀の幕開けです。社会が大きく変貌する中で、21世紀を展望しつつ新しい時代を切り開き、「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむことを提言した新しい教育が展開されています。

今年度は、新幼稚園教育要領によりスタートしたのをはじめ、小・中学校は、平成14年度から全面実施される新教育課程の編成に向けた移行措置に入った年でした。各学校においては、分かる授業、楽しい学校の実現や自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動する力を育成するため、特色ある教育課程の編成やその実施に全力を傾注されていることと思います。

こうした中で、研究・研修機関としての本センターの果たす役割は極めて大きく、その期待にこたえるべく教職員の研修、調査研究、情報教育の推進や教育情報ネットワーク拠点整備・拡充に努めてまいりました。

さて、所員と委嘱研究員とが共同して進める調査研究においては、教科・領域等に関する専門研究分野として1編、今日的課題に関する研究として2編、計3編を平成12年度の調査研究紀要『教育はいま』としてまとめ、ここに発刊する運びとなりました。

専門研究分野の「総合的な学習の時間の推進に関する研究」は、3年継続研究の最終年次として、新教育課程移行措置期間に入ったことを踏まえ、新しい学校づくりの視点から、総合的な学習の時間のカリキュラム作成の在り方を考察しております。

課題研究分野の一つ「児童生徒実態調査」は、仙台市内の小・中学生907名の生活の実態や意識を探り、そのデータを提供することによって、本市教育行政の推進に資することを目的として行いました。

また、「情報教育に関する研究」については、文部省の「ミレニアム・プロジェクト」を受け、新規の事業を立ち上げ、それぞれの事業の連携を図りながら課題に取り組んでまいりました。ここに、その実践を通しての課題を明確にし、情報教育に取り組む方向性の提言や、小・中・高等学校において、コンピュータやインターネットを効果的に活用しながら、児童生徒の情報活用能力を育成するための方策について考察しています。

いずれの研究も、今日的かつ緊要な課題解決のための手掛かりを探ろうとするものです。紙幅の関係で意を尽くしきれなかったところもありますが、積極的にご活用いただき、各学校における教育研究や教育実践の改善、充実の一助となりますことを願っております。

今年度も昨年度に引き続き、研究発表を当教育センターから全国の都道府県及び政令指定都市の教育研究所等に衛星通信（エルネット）によって配信するとともに、岡山県、福岡県の教育センターとの間で双方向放送により、リアルタイムで質疑・応答を行うなど新たな研究発表の在り方を試みることができました。これを機に、更なる研究の充実を図っていきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の調査研究を推進するに当たり、適切なご指導ご助言や多大なご協力を賜りました学識経験者の先生方、委嘱研究員の先生方、その他関係の皆様に心から厚く感謝申し上げます。

平成13年3月

仙台市教育センター
所長 早坂 祥

総　　目　　次

■総合的な学習の時間の推進に関する研究（第3年次）	5
－小・中学校のカリキュラム作成の事例を通して－	
■「仙台市の子ども－2000」	53
－児童生徒実態調査－	
■情報教育の推進に関する研究	77
－ミレニアム・プロジェクトを受けて－	

総合的な学習の時間の推進に関する研究（第3年次）

—小・中学校のカリキュラム作成の事例を通して—

■ 要 約

本研究は、総合的な学習の時間を推進するために3年間の継続研究として取り組んできた第3年次のものである。新教育課程移行期間を踏まえ、小・中学校における総合的な学習の時間のカリキュラム作成の在り方を、カリキュラムの開発や教育課程における位置付けの視点から検討し、カリキュラム作成上の課題解決のための具体的な方策を提言するとともに、小・中学校12校の実践事例を紹介した。

■ キーワード

- 総合的な学習の時間
- カリキュラム作成
- カリキュラムの開発
- 教育課程への位置付け
- カリキュラム作成の方策
- 実践事例

目 次

I	はじめに	
1	第2年次までの研究経過	7
2	今年度の研究課題	7
3	仙台市における取組の実態	7
4	研究のねらい	8
II	総合的な学習の時間のカリキュラム作成の考え方	
1	総合的な学習の時間のカリキュラム作成	
(1)	総合的な学習の時間のカリキュラムのとらえ方	8
(2)	カリキュラムの開発の在り方	9
(3)	カリキュラムの評価	10
2	教育課程への位置付け	
(1)	各教科・領域との関連	11
(2)	授業時数	13
III	総合的な学習の時間のカリキュラム作成の進め方	
1	共通理解	
(1)	総合的な学習の時間の趣旨、ねらいの理解	14
(2)	総合的な学習の時間のカリキュラムの理解	14
2	基本方針の明確化	
(1)	実態把握	15
(2)	目指す児童生徒像の検討	15
(3)	これまでの教育活動の見直し	15
(4)	推進組織の検討	15
3	活動計画の作成	
(1)	単元の開発	17
(2)	年間活動計画の作成	17
4	活動計画の評価、修正	
(1)	授業実践の評価	18
(2)	年間活動計画の評価、修正	18
5	学習環境の整備	18
IV	小学校の検討課題と方策	
1	課題と課題解決の方策	
(1)	テーマ設定の進め方の課題	19
(2)	総合的な学習の時間の系統性の課題	20
(3)	特別活動との関連についての課題	21
2	小学校におけるカリキュラム作成の事例	
(1)	共通理解や実態把握に基づいたカリキュラムの開発の事例	22
(2)	評価をカリキュラムの改善に生かした事例	24
(3)	児童会活動との関連を図ったカリキュラムの開発の事例	26
(4)	弾力的な時間の活用の事例	27
(5)	カリキュラム作成の進め方の事例	28
(6)	学年の重点を踏まえたカリキュラム作成の事例	32
V	中学校の検討課題と方策	
1	課題と課題解決の方策	
(1)	教科や特別活動との関連について	36
(2)	学習課題の設定について	37
(3)	学習環境の整備について	38
2	中学校におけるカリキュラム作成の事例	
(1)	カリキュラムの開発のための共通理解と校内組織の事例	39
(2)	進路学習と関連を図ったカリキュラム作成の事例	40
(3)	学校行事との関連を図ったカリキュラム作成の事例	43
(4)	特色ある教育活動を生かしたカリキュラムの開発の事例	47
(5)	生徒の興味・関心を生かした学習課題の設定の事例	48
(6)	調べ学習や発表活動を充実させる学習環境整備の事例	50
VI	おわりに	
1	研究のまとめ	51
2	今後の課題	51

I はじめに

■ 1 第2年次までの研究経過

本研究は、総合的な学習の時間を推進するための方策を探求する3年間の継続研究である。

第1年次は、仙台市立の全小・中学校を対象に総合的な学習の時間に関する実態調査及び意識調査を実施し、総合的な学習の時間の取組の実態や各学校が抱える実践上の諸課題を明らかにした。

第2年次は、1年次で明らかになった課題を受けながら、新教育課程全面実施へ向けた総合的な学習の時間の実践上の課題を以下の3段階に設定し、検討することとした。¹⁾

- 第1段階「総合的な学習の時間の創設の趣旨の共通理解及び実態把握」の段階
- 第2段階「試行・実践」の段階
- 第3段階「カリキュラム作成」の段階

この3段階の想定は、本市における総合的な学習の時間は、その趣旨の理解にとどまらず、すでに第2段階の試行・実践の段階に入ったとの認識に基づいていた。2年次研究では、第2段階までの実践上の課題における具体的な方策を提言するとともに、それらの実践事例を紹介した。

■ 2 今年度の研究課題

今年度は第3年次に入り、新教育課程の移行期間にも当たり、取組が本格化する年である。前年度までの2段階の上に立ち、各学校の実状を踏まえ、総合的な学習の時間を教育課程に位置付けながら実施する段階になる。新教育課程の全面実施に備え、「魅力ある学習内容の開発」や「活動計画の作成」などの検討とともに、新しい学校づくりの視点から「学校の財産としてのカリキュラム作成」が求められる。²⁾

そこで、平成14年度に向けた第3段階の実践課題を、「総合的な学習の時間のカリキュラム作成」の段階と設定し、研究を進めることとした。

具体的には、2年次研究を継承しながら、総合的な学習の時間の「カリキュラムの開発の検討」及び「教育課程における位置付けの検討」の新たな視点から、「総合的な学習の時間のカリキュラム作成の在り方」を探求することにした。

1), 2)については、本調査研究委員会委嘱研究委員宮城教育大学相澤秀夫教授の提言による。

■ 3 仙台市における取組の実態

仙台市立小・中学校の総合的な学習の時間の取組の実態を、年度当初の全市186校の学校経営要録及び当センター主催の「総合的な学習の時間研修会」における小・中学校120校のレポートからまとめたところ、以下のとおりであった。

(1) 小学校

平成12年度には、122校の全校が総合的な学習の時間の実践に取り組んでいる。そのうち、取り組み始めて2年目以上になる学校が、全体の約8割である。

授業時数は、学年間などで幅があるが、平均すると約60時間であり、取り上げる課題は、「環境」「福祉」「情報」「国際理解」が多かった。

(2) 中学校

平成12年度には、小学校と同様に64校の全校が総合的な学習の時間の実践に取り組んでいる。

平成11年度には、第1段階の「共通理解・実態把握」に取り組み、今年度から、第2段階の「試行・実践」をほとんどの学校が開始している。

授業時数は1学年が最も多く、学年が進むにつたがい少くなり、全学年の平均は30時間あまりである。「学校行事」や「進路学習」など、これまでの自校の特色ある活動を見直しながらカリキュラム開発を進める学校が多く、取り上げる課題は、「生き方」「環境」が多かった。

以上の結果から、小学校では、多くの学校がすでに第2段階の「試行・実践」に入り、第3段階の「カリキュラム作成」へ進みつつある。一方、中学校は、第1段階の「共通理解・実態把握」を

経て、第2段階の「試行・実践」が始まったところである。

このように、各校種及び児童生徒の実態が違うため、小・中学校間では取組の姿勢や取り組む課題の違いがみられる。そこで、総合的な学習の時間のカリキュラム作成の検討においては、小・中学校がそれぞれに抱える検討課題の違いに応じたカリキュラム作成の在り方を検討する必要があると考える。

■4 研究のねらい

小・中学校における総合的な学習の時間のカリキュラム作成の課題を整理しながら検討し、解決のための具体的な方策を提言するとともに、小・中学校の実践事例を紹介する。

II 総合的な学習の時間のカリキュラム作成の考え方

■1 総合的な学習の時間のカリキュラム作成

カリキュラムの作成は、学校の教育目標を達成するために教育計画の全体を編成する作業である。その際に、総合的な学習の時間のカリキュラムをどのようにとらえ、指導内容の構成や評価はどうあればよいかについて述べる。

(1) 総合的な学習の時間のカリキュラムのとらえ方

総合的な学習の時間のカリキュラムは、従来の教科の学習におけるカリキュラムと同様のとらえ方でよいのか、その意味を再度検討してみる必要がある。

我が国では、これまでカリキュラムというと学習指導要領に基づいて作成された「教育課程」の意味や「年間教育計画」など、教育活動に先立って作成される「計画」の意味でとらえられてきた。また、それらに基づき、あらかじめ規定された教

育内容を児童生徒に伝授していく過程であるととらえられてきた。

教科の学習は、系統的な学びを大事にすることから、年間カリキュラムをこのように規定することができた。

一方、現実の生活から学ぶことが多い総合的な学習の時間では、系統的な学習よりも実践・応用が大事になる。児童生徒の学習経験そのものを、「学びの事実」として問い合わせ直す必要がある。

カリキュラムという英語には、「履歴書」という意味があり、「学びの過程を記録し、物語るもの」というとらえ方ができる。したがって、「カリキュラムづくり」とは、「目標」や「指導項目」の一覧をつくることだけではなく、実際に「学びの展開の過程」を創造することでもある。「カリキュラムは教室で日々創造されるものであり、カリキュラムは、年度や学期の『前』に準備されたとしても、本質的には、実践の『後』に『学びの過程の記録』としてつくられる」と理解でき、児童生徒と教師がともにカリキュラムを創り出していくという姿勢が求められる。

このように考えてみると、総合的な学習の時間のカリキュラムは、次の二つの視点からのとらえ方ができる。一つは事前につくる「計画としてのカリキュラム」である。これはあくまでも当初の予定であり、児童生徒の課題追究の過程に寄り添い、柔軟に修正や変更をすることを前提とする仮のカリキュラムである。このカリキュラムは、途中での柔軟な修正・変更ができるようゆとりのある計画とすることが望まれる。

もう一つは、事後にできるカリキュラムである。当初の全体の枠組みは変えないが、詳細は柔軟に変更していく。その変わった内容をきちんと記録しておくことが、次年度の計画を立てるときの参考になる。はじめから完成度の高いカリキュラムを望まずに、この過程を繰り返すことにより、学校の財産としてのカリキュラムに発展させていくことができる。

(2) カリキュラムの開発の在り方

① 基本的な開発の進め方

カリキュラムの開発を進めるに当たっては、以下のように考慮したい。

ア 学校経営の視点から

まず、学校経営全体を視野に入れて総合的な学習の時間をおさえることから始めたい。

「生きる力をはぐくむ」という視点や「特色ある学校づくり」という視点から学校経営の見直しが行われ、新たな経営の方針、学校教育目標及びその具現化への重点事項が設定されることと思われる。それらの見直しの結果を踏まえて、総合的な学習の時間でどのような学習をするかを、学校教育目標の具現化を図る方向で検討する。

イ 自校の総合的な学習のねらいから

総合的な学習の時間創設の趣旨をふまえ、自校の総合的な学習の時間のねらいや目指す児童生徒像を明らかにする。さらに、それらの具現化に向けて、総合的な学習の時間で育てたい力を明らかにする。

ウ 開発しうる課題の検討

自校でどのような課題が総合的な学習の時間のテーマとなりうるか検討する。(②で詳しく述べる)

エ カリキュラム編成上の検討

ウで検討した課題のどれを全校または各学年の取組として開発するかを検討する。その際、どのように編成することが、総合的な学習の時間で育てたい力や目指す児童生徒像につながるのかという視点を持って検討する。

② 課題の内容による開発の在り方

総合的な学習の時間の課題を以下のように分類し、開発の在り方を考える。

ア 現代的課題

国際理解、情報、環境、福祉・健康などの課題は、現代社会が要請する課題であり、どの学校でもテーマにしうるものである。ただし、開発に当たっては、地域に根ざした課題追究が可能なものを選択したい。これらの課題を一般論として考え

るだけでなく、学校・地域の実態や児童生徒自身の生活とのかかわりから考えたときに課題追究が深まることが、実践校から報告されているからである。

上述した課題のほかにも、小学校における英会話のように、今後新たに検討を求められる課題もある。

イ 地域素材や学校の特色を生かした課題

地域素材としては、地域の産業、文化、伝統、芸能、自然、歴史などが考えられる。すでにそれらを生かし、全校での野鳥観察、伝統文化継承活動等を行ってきた学校や、特色ある教育活動として飼育栽培活動の取組をしてきた学校がある。そういう取組を基盤とした開発が考えられる。

新たに開発するときには、地域の実態把握を基に、その特性を生かした課題を明らかにすることが大切になる。児童生徒、教職員、保護者・地域の方の総合的な学習の時間に対する思いや期待を踏まえ、目指す児童生徒像の具現化に向けて開発を進めることも大切である。(P22事例1、P28事例5、P47事例10参照)

ウ 児童生徒の興味・関心に基づく課題

児童生徒が生活や学習の中から興味・関心をもつたことを基にテーマを設定するものである。

学級でテーマを設定する場合、児童生徒の思いや願いを一つにまとめ、主体的に取り組めるようになることが大切だという実践報告がある。日ごろから児童生徒がどのようなことに興味・関心をもっているかを教師が把握とともに、児童生徒が自由に自分の考えを出し合える学級づくりをすることが基本となる。

個人ごとに課題を設定して追究する場合には、児童生徒の学習経験や発達段階を考慮するとともに課題解決等の能力差も考慮する必要がある。また、課題の設定、追究、解決、まとめという一連の学習の進め方について、児童生徒自身が見通しをもち、できる限り自分の力で進められるように配慮したい。全体に対する指導を計画的に行うと

とともに、必要に応じて個別に相談に乗ったり支援したりすることが求められる。(P49事例11参照)

各学年・学級のテーマのもとに課題追究した後に、個人の興味・関心に基づく課題追究を行う事例がある。この場合、児童生徒の負担にならない進め方を工夫することが望まれる。(P29事例5参照)

③ テーマ設定の進め方

テーマ設定の進め方を以下のように分類し、どのようなねらいに重点を置くかによって適切な進め方を考えたい。

ア 学校として全学年のテーマを設定

学校としての全体計画に基づいて、各学年のテーマを設定する。学校の教育目標や総合的な学習の時間のねらい、児童生徒の実態、教科・道徳・特別活動との関連を踏まえつつ、発達段階に応じた一貫性のあるカリキュラムを作成する上で、この進め方は適している。学習内容の重複を避ける上でも利点がある。(P33事例6:表2参照)

イ 学年でテーマを設定

各学年ごとに、担当の教師の判断でテーマを設定する。年度初めに、前年度までに作成したカリキュラムを基に修正して実践するか、新たなテーマのもとで計画するかを判断する。児童生徒の思いや指導に当たる教師の考えを反映させたい場合に、この進め方は適している。

学年でテーマを設定する場合には、学級の区分を取り扱い、年間を通して学年担当で計画し、指導の役割を分担して進める実践が多く見られる。

また、学年共通のテーマを設定し、各学級でそれに基づいた小テーマを設定するという方法もある。小テーマについての学習を進める単位は学級であり、基本的には各学級担任が学級としてのカリキュラムを作成していく。

リ 学級でテーマを設定

学級担任が児童生徒の思いや願いを基にテーマを設定する。学級の実態や教師、児童生徒の思いをそのままテーマに反映して学習を進める上で、適した方法だと考えられる。学習の進行状況に柔

軟に対応して進めやすいという利点もある。

エ ア～ウを組み合わせた進め方

上述のア～ウを組み合わせて全体計画を作成し、それぞれに設定された時間の中で学習を進める事例もある。総合的な学習の時間のねらいや目指す児童生徒像の達成に向けて、ア～ウそれぞれの長所を生かし、きめ細やかに計画を作成し実践することがねらいである。(P28事例5、P35事例6:表5参照)

(3) カリキュラムの評価

① 基本的な在り方

総合的な学習の時間では、カリキュラムを作成してもそれは出発点にすぎない。前述したように、「計画としてのカリキュラム」をもとに修正や変更を加えながら実践を進め、変更した内容を記録しておくことが、カリキュラムを改善するために大変である。(P8参照)その際、指導計画や児童生徒の学習活動を検討・吟味し次の活動につなげていく、本来的な形成的評価が大切になる。

カリキュラムを評価するときには以下のことを踏まえ、「事後にできるカリキュラム」(P8参照)がよりよいものになるよう、各学校で評価の計画をつくって実践していくことが望まれる。

ア その都度評価すること

イ 評価を日常化できる方法を工夫すること

ウ 教師自身が評価すること

エ 児童生徒に評価させること

ア、イについては、気付いたことを書き込むなど、実践する上でできる限り負担の少ない方法を工夫し、継続することが大切である。

ウについては、次のような視点をもつことが大切だと考える。

○ 教師の指導についての評価

- ゆとりある学習活動のための時間の保障
- 学習活動を支える指導・支援の在り方や支援体制
- 学習環境の整備

○ 児童生徒の学習に対する評価

- ・ 学校で設定したねらい達成の度合い
- ・ 育てたい資質や能力
- ・ 学びの過程

② 具体的な評価の在り方

以下に述べるように評価することが、①で述べたカリキュラムの評価を支えるものと考える。

ア 児童生徒の学習に対する評価

総合的な学習の時間における評価では、児童生徒の学び方のよさや向上、成長の様子を認め励ますとともに、次の段階の学習の方向性を明らかにすることが大きなねらいとなる。

そのためには、「児童生徒をよく見ること」、「重点的に評価すること」、「個人内評価をメモすること」の3点が必要になる。例えば、児童生徒の意識、願い、問題等気付いたことをその都度座席表などにメモし、できれば学習の各段階ごとに整理する。実践上無理のない、日常化できる評価の方法を工夫することが求められる。(P24事例2参照)

イ 児童生徒の自己評価・相互評価

児童生徒が主体的に考え進んで学習を進めるためには、「意欲付け」、「自尊感情を持たせること」が重要である。また、自らの学習を第三者の目で見る力を育てることが大切になると考える。そこで以下のようないかん視点から、自己評価・相互評価の場と方法を工夫したい。(P24事例2参照)

- 児童生徒自身が自分の学習のよさをとらえて、自信をもって学習を進めることができるよう配慮する。
- 自分の課題を認識し、次の学習への見通しをもち、意欲的に考えていくように配慮する。
- 相互評価については、互いの学びの交流を通して、自分自身では気付かないよさに対して評価されて励まされたり、新たな課題を見つけて更なる意欲をもったりすることができるよう工夫する。

ウ 児童生徒と教師の共同の評価

総合的な学習の時間では、自らの学習全体を過

程としてとらえ、学習の在り方や方向性を考える力を育てることが大切になる。学年が上がるとともに、児童生徒と教師が共に学習を振り返り、学習の進め方を判断することが望ましくなる。

その方法の一つが、ポートフォリオ評価である。そこで大切なのは、場面や時間を設定し、学習のとりまとめに必要な素材をそろえるといった条件設定をすることである。また、児童生徒の実態や学校の総合的な学習の時間への取組状況に合わせて方法を工夫することが大切である。(P24事例2、P42事例8参照)

■ 2 教育課程への位置付け

(1) 各教科・領域との関連

① 教科との関連

ア 基本的なおさえ方

総合的な学習の時間で子供が課題設定し、追究、解決するためには、教科で学ぶ基礎的な知識・技能の習得が基盤となる。また、教科で学んだことを基にして課題が設定され、総合的な学習の時間で深く追究するという展開も考えられる。一方、総合的な学習の時間で自らの課題を設定し解決することを通して学び方を身に付けることは、教科の学習でも発揮され、より主体的な学習が展開されると期待できる。

イ カリキュラム作成に当たって

教科の学習内容を把握し、各学校が総合的な学習の時間で追究しようとする内容との関係を整理したい。各学年の教科の年間計画を基に、関連性を洗い出す。その上で、どの学年がどのような内容で学習を進めれば学校として目指すねらいが達成されるかを検討し、カリキュラムを作成する。

② 特別活動との関連

ア 基本的なおさえ方

特別活動と総合的な学習の時間では、そのねらいや目標・内容が異なっている。(P12表1参照)

特別活動と総合的な学習の時間の関連について考えるとき、二つの方向性がある。一つは、それ

ぞれのねらいを踏まえながら、相互の関連を図って計画するものである。もう一つは、特別活動として行ってきた活動を見直し、総合的な学習の時間として再構成するものである。

特別活動として行ってきた学習活動を、総合的な学習の時間のねらいを考慮せずにそのまま安易に置き換えることはあってはならない。

表1 特別活動と総合的な学習とのかかわり

	特別活動	総合的な学習の時間
共通点	<ul style="list-style-type: none"> ・両者共通に総合的な性格をもつ ・体験的な活動を重視する ・問題解決的な学習活動が中心となる 	
相違点	<ul style="list-style-type: none"> ・集団活動を通して児童生徒の個性を伸長するとともに、集団の一員としての自覚を深めるなど豊かな人間性や社会性の育成を図る。 ・生活上の課題－よりよい学級・学校生活を目指す。 ・実践知－なすことによって学ぶ。 ・集団での活動を基本とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒自身による主体的な課題追究の学習を重視し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断することのできる問題解決能力の育成を図る。 ・社会的課題－課題解決の活動を通して、自己の生き方を考える。 ・方法知－知の総合化学び方を学ぶ。 ・一人一人の課題追究を基本とし、多様な学習形態で学ぶ。

イ 学校経営の視点から

上述した二つの方向性のどちらをとるか判断する場合、総合的な学習の時間のねらいと育てたい力を明確にし、学校行事等のねらいと内容を学校経営全体の中で見直す必要がある。すなわち、総合的な学習の時間をどのようにつくるかという視点から考えるだけでなく、これまで特別活動の果たしてきた「集団活動を通して育てる児童生徒の資質や能力の育成」をどこで図るのかという視点からも考える必要がある。

その上で、学校としての方針に沿う学習の在り方を工夫し、年間計画全体に位置付けていくことが望まれる。

ウ 「関連を図って」計画する場合

関連を図る場合には、全体計画を作成し、学習活動の位置付けや関連の図り方を明確にする必要がある。それぞれのねらいを達成するよう関連を図ること、またそれぞれの活動がより一層効果的に行われるよう工夫することが肝心である。(P26事例3、P41事例8参照)

○ 関連を図った「修学旅行」の一例

修学旅行の活動の一部に、総合的な学習の課題追究の場を取り入れたり、学年テーマに関連する内容を設定した例が見られる。特別活動のねらいに基づきながら、総合的な学習につながる学習も行おうとするものである。

エ 「再構成して」計画する場合

総合的な学習の時間の趣旨やねらいに沿った計画が作成され、質的にも総合的な学習の時間としてふさわしく再構成された学習展開にすることが求められる。

再構成については、前述のように異なるねらいがあるので、慎重に進める必要がある。行事等の内容や性質が総合的な学習の時間のねらいとは相容れないものについては、総合的な学習の時間と切り離して実施することが望ましい。

○ 再構成した「修学旅行」の一例

学年テーマに関連した小テーマ1・小テーマ2を設定し、修学旅行を小テーマ1の課題追究の場とする例がある。学校を離れた場所で課題追究を行う必要から再構成したものである。

③ 道徳との関連

児童生徒の道徳性がより発展的、調和的に育っていくよう、道徳の時間と総合的な学習の時間における道徳教育との関連を図ることが望まれている。総合的な学習の時間に、児童生徒が現代社会の課題や自分にとって大切な課題に取り組み学習することは、道徳教育の目指す自分の生き方を探求することにつながっている。

現実の社会で様々な課題に取り組み解決を目指しながら努力している人々に、児童生徒が直接出

会い学ぶことには、大きな意義がある。この出会いを通して、これから自らの生き方へのまなざしを持たせることが期待できる。また、社会の中での自分の生き方や在り方、他の人々とのかかわり方について考えさせる絶好の機会にもなる。

同学年や異学年との学びの交流の場も、生き方や在り方を実感をもってとらえる機会として期待される。

体験的な活動の中で偶発的に生じた切実感のある課題を臨機応変に取り上げるとともに、総合的な学習の時間の内容に応じて意図的・計画的に道徳教育との連携を図っていくことが必要だと考える。

④ 情報教育との関連

小・中学校、高等学校の段階において育成すべき「情報活用能力」は、次の三つの要素からなる。「情報活用の実践力」、「情報の科学的な理解」、そして「情報社会に参画する態度」である。

小・中・高等学校の各段階において、系統的、体系的な指導計画を編成し、上記の能力や態度をバランスよく育成していくことが、情報教育の目標とされる。

小学校では、各教科・領域で学習内容に応じた指導をするとともに、総合的な学習の時間で「情報活用の実践力」を育成するための意図的、計画的な指導が望まれる。

中学校では、技術科「情報とコンピュータ」等、高等学校では教科「情報」等における学習成果を生かし、総合的な学習の時間において「情報活用の実践力」を育成するための主体的な学習活動を開拓することが望まれる。

本年度、仙台市立小・中学校においては、インターネットを活用した総合的な学習の時間の学習が行われている。今後は、将来を見通し、情報モラルの育成を視野に入れた実践が重要になる。

(2) 授業時数

① 弾力的な授業時数の確保

総合的な学習の時間の年間計画を作成するとき

には、学習の内容や構想をもとに、年間の見通しをもって時間を設定する。学習状況に応じた変更が可能なように、学習の段階ごとに余裕時数を配当するなど、計画にゆとりをもたせる工夫を行いたい。児童生徒が試行錯誤しながら学習を進めることで予定以上に時間を要した場合にも、ゆとりと安心感をもって対処できるようにしたい。

なお、全教科・領域の年間学習計画を作成し、各教科・領域の学習に支障をきたさないように、十分な見通しをもって時間の配当を行いたい。

② 弹力的な時間の運用

ア 学習内容に応じた時間の活用

学習内容に応じた適切な時間を保障するために、「学習時間のモジュール化」と「学習内容のモジュール化」をする考え方がある。1単位時間を45分に固定するこれまでの時間運用を見直し、1単位時間を15分にした時間のモジュール化を行った事例がある。また、時間に応じた効果的な学習を進めるための学習内容のモジュール化についても、検討が進められている。

モジュール化に伴い、学年・学級によって授業時間の終了に時間差が生じることもあるので、ノーチャイム制を導入する必要性も指摘されている。

(P27事例4参照)

イ 時間割・日課表の工夫

週時間割編成を考える際には、従来のような固定的な時間割にとらわれず、弾力的で運用がしやすいように工夫することが大切になってくる。工夫の例を以下にあげる。

- 活動内容によって季節や行事に対応させ、特定の時期に時間を集中的にとることができるようにする。
- 教科担任制となる中学校では、時間割を柔軟に変更することが困難である。長期的な計画を立てて時間設定するために、「巻紙方式」のように学習計画に応じた学期単位の時間割設定等を工夫する。(P44事例9参照)
- 短期集中型の活動と、年間を通した課題追

究的な学習の組み合わせを工夫する。(P40事例8参照)

小学校は学級担任制のため、時間割の変更が比較的容易であるが、次のような配慮・工夫をすることが大切である。

- 保護者と児童が総合的な学習の時間の見通しをもてるよう、年度または学期の初めに学習内容・計画などの構想を知らせておく。
- 保護者と児童に対して、変更の理由（学習の内容や学習状況）、変更に伴う教科学習の進度などを、事前に説明して理解を得る。

III 総合的な学習の時間 カリキュラム作成の進め方

総合的な学習の時間のカリキュラム作成に当たっては、目指す児童生徒像、活動計画作成、学習環境など学校教育全般から見通し、検討する必要がある。総合的な学習の時間のカリキュラム作成の過程は、おおむね以下のようにとらえられる。

1 共通理解

- (1) 総合的な学習の時間の趣旨、ねらいの理解
- (2) 総合的な学習の時間のカリキュラムの理解

2 基本方針の明確化

- (1) 実態把握
- (2) 目指す児童生徒像の検討
- (3) これまでの教育活動の見直し
- (4) カリキュラム作成の推進組織の検討

3 活動計画の作成

- (1) 単元の開発
- (2) 年間活動計画の作成

4 評価・修正

- (1) 授業実践の評価
- (2) 年間活動計画の評価・修正

以下、上の表のカリキュラム作成の過程に沿ってポイントとなることを述べる。

■1 共通理解

(1) 総合的な学習の時間の趣旨、ねらいの理解

総合的な学習の時間のカリキュラム作成に当たっては、校長、教頭がリーダーシップを發揮し、明確な経営方針を示すとともに、研修会等を通して、教師間で総合的な学習の時間の共通のイメージをもてるよう十分に共通理解を図りたい。

総合的な学習の時間では、学習活動で取り上げる課題についての知識を身に付けることや、課題解決自体が主たる目的ではない。総合的な学習の時間の様々な活動を通して、学び方や考え方を身に付けるとともに、問題解決の力を培ったり、人間らしい生き方や社会参加の在り方などを考えていくようにすることがねらいである。

このことの共通理解が不十分であると、総合的な学習の時間が、教科・領域との区別がつかなくなったり、単なる体験活動に終始する恐れがある。

(2) 総合的な学習の時間のカリキュラムの理解

総合的な学習の時間のカリキュラムには、二つの側面があることは、すでに述べた通りである。

このことを基本として考えると、総合的な学習の時間のカリキュラム作成においては、柔軟な修正、変更ができるようにゆとりのある計画とすること。また、はじめから完成度の高いものを求めず、計画に基づく実践を通して、修正、改善することを作成の過程に位置付けておき、よりよい計画を作成していくことが大切である。

総合的な学習の時間においては、各教科などのように目標や指導の内容が示されていないことから、各学校が創意工夫し、特色ある教育活動を推進するためのカリキュラムを作成することが求められる。また、学習活動は、校内にとどまらず地域を舞台にすることも多く、多様な展開が期待できる。こうしたことから、カリキュラム作成に当たっては、学習活動の内容や方法を見直すことはもちろんであるが、活動の場や時間、時期など教育活動全体からの見直しが必要になる。そこで、教員においては、学校教育全体からみわたし、

経営参画意識をもって、総合的な学習の時間のカリキュラム作成に臨むことが求められることも共通理解したい。

■2 基本方針の明確化

総合的な学習の時間の趣旨やねらいの理解を図るとともに、目指す児童像や教育課題などとの関連から、総合的な学習をどのように実施していくか、その基本方針を明確にすることが大切である。

(1) 実態把握

自校の教育課題を明らかにし、目指す児童生徒像を導き出したり、指導法の改善を図る視点を探ったりするため、実態把握が必要である。

① 児童生徒の実態把握

児童生徒及び教職員を対象にして、学校生活や授業についての実態や意識を探る調査の実施が考えられる。その調査のねらいは、学習活動においてはぐくみみたい学習習慣や学び方（学習スキル）の定着の度合いや学習の理解、習熟の程度、学校生活への満足度等を把握すること。また、どんな学習活動や指導・支援を望んでいるかなどを探ることにある。（P43事例9参照）また、総合的な学習の時間でどんな力を身に付けさせたいかなど教職員の思いや願いを集約することも大切である。

（P22事例1、P28事例5参照）

多様な趣味や地域での子供会活動への取組など学校では見られない姿などから、児童生徒の興味・関心がどんなところにあるかを探るため、家庭生活や社会生活に関する実態や意識を調査することも考えられる。

② 学校の実態把握

総合的な学習の時間の学び方に対応するために、施設、設備など学習環境を整備する観点から実態を見直す必要がある。また、新たな特色ある教育活動として、教科の学習や学校行事を見直すための実態把握も必要である。

③ 地域の実態把握

地域の実態把握には、まず、地域の歴史や自然

などの学習の内容や活動の場を掘り起こすねらいがある。次に、総合的な学習の時間においては、学習活動の場が地域に広がることから、保護者、地域の人々の協力が不可欠になる。そこで、児童生徒に対する指導者としての地域人材や活動する場としての施設などを把握する意味がある。また、保護者や地域の方々の総合的な学習の時間への期待や願いを把握することも必要である。

(2) 目指す児童生徒像の検討

総合的な学習の時間で育てたい力については、児童生徒、学校、地域の調査などから浮かび上がってきた実態を資料として生かし、検討する。また、教師の思いや保護者の願いも反映させたい。

さらに、授業改善の視点から実態把握を生かし、楽しく分かりやすい授業づくりを検討したい。

(3) これまでの教育活動の見直し

上述のような実態把握から明らかになってきた自校の教育課題から、目指す児童生徒像を検討するとともに、学校教育全体から総合的な学習の時間のねらいに即して、これまでの教育活動の見直しを進める必要がある。その例として、本調査研究委員会委嘱研究員の所属校の実践を以下に示す。

- ① 評価の改善（P24事例2参照）
- ② 時程の工夫（P27事例4参照）
- ③ 学校行事、発表会などの見直し
(P26事例3、P44事例9参照)
- ④ これまでの特色ある教育活動の見直し
(P47事例10参照)
- ⑤ 学習環境の整備（P50事例12参照）
- ⑥ 地域との協力体制の見直し（P35事例6参照）

(4) 推進組織の検討

総合的な学習の時間の共通理解の段階では、研究を推進する委員会が、総合的な学習の時間の原案を作成したり、教職員の考えを集約、調整したりして、取組の方向性を示すなど総合的な学習の時間の推進役を果たしてきた。

一方、カリキュラム作成の段階においては、研

究を推進する委員会を中心としながらも、学年部や全校的な指導体制と関連させ、具体的な活動計画作成やそのための条件整備などを進める組織や体制づくりを検討する必要がある。(P28事例5, P40事例8参照)

この推進体制においては、外部情報や家庭・地域等との連携や学習環境の整備と関連する条件整備についての部署が重要である。それがこれまでの推進体制と異なるところである。

中学校においては、教科担任の専門性を生かしながらも、教科の枠を越えて全校的な推進体制を考えることが大切である。

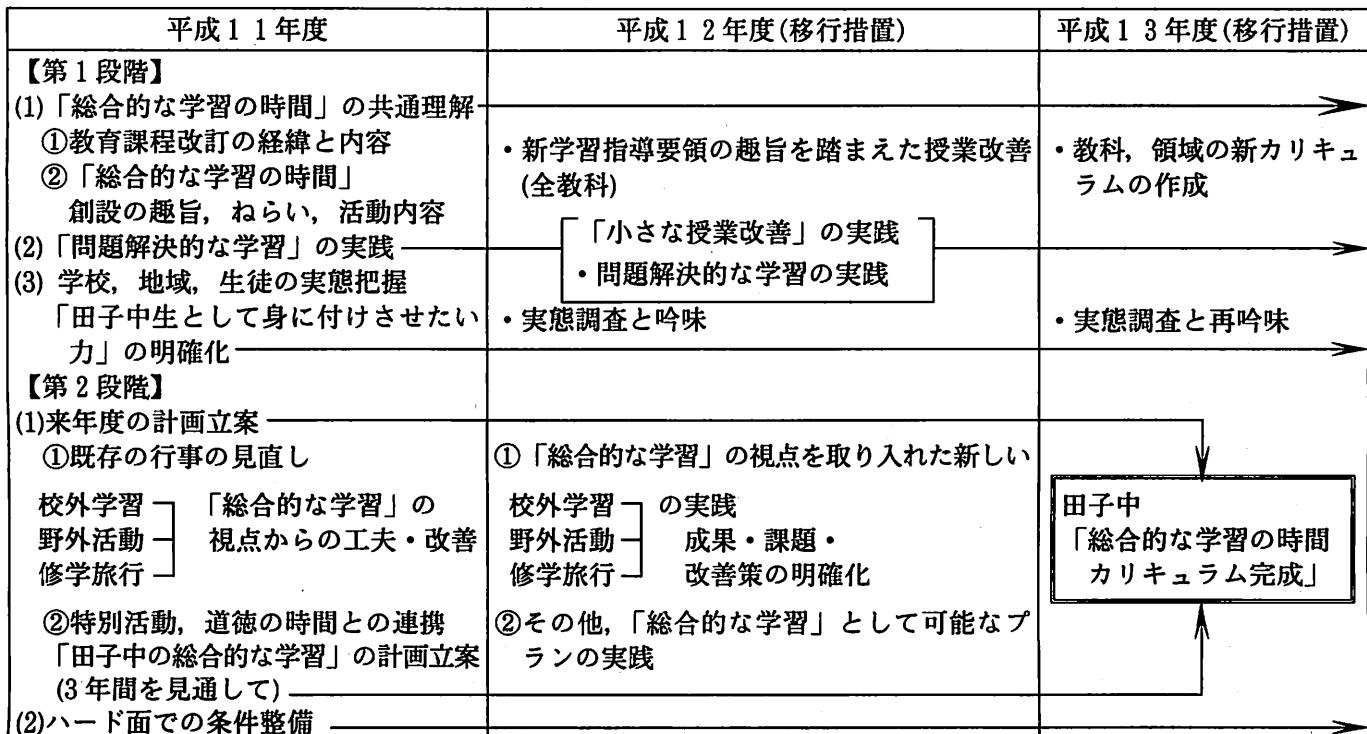
また、総合的な学習の時間のカリキュラムの開発や作成においては、全教職員が協力しながら取り組むことが不可欠である。カリキュラムの作成の過程においては、各担当がどのような役割で取り組めばよいかその見通しがもてるようにならう。そこで、カリキュラム作成の手順と推進する組織の関係を表2のように整理し、教師間の理解を促すことも一つの方法である。

表2 カリキュラム作成の手順と推進する組織の関係(例)

4月	児童生徒や地域の実態把握 総合的な学習の時間の基本方針の提案 各学年のテーマ設定 各学年の年間活動計画立案(計画としてのカリキュラム) 活動場所や時間配分の決定 時間割の作成	学年+研究推進委員会 研究推進委員会 学年部 学年主任と教務部 教務主任
	ガイダンスの計画と手引き書作成 実践	学年部 学年部
	実践後の活動計画(実施後のカリキュラム)の評価 次年度の年間指導活動案の作成 開発教材集の作成	学年部と 研究推進委員会 学年部 学年+研究推進委員会
	前年度の流れに戻る	
3月	実践後の活動計画(実施後のカリキュラム)の評価 次年度の年間指導活動案の作成 開発教材集の作成	学年部と 研究推進委員会 学年部 学年+研究推進委員会

さらに、平成14年度からの全面実施に向け、全教職員がカリキュラム作成への見通しをもつことができるようになることが望ましい。そのためには、移行期間中に準備することや解決していくなければならない課題などをスケジュールに組み、表3のような行動計画(活動プログラム)として示しながら共通理解を図りたい。

表3 総合的な学習の時間の実践に向けた活動プログラム(田子中学校の例)



■ 3 活動計画の作成

活動計画の作成においては、児童生徒にとって魅力ある単元の開発が必要になる。そこで開発された学習内容が集積されて年間の活動計画が出来上がる。

(1) 単元の開発

単元を開発する際の手順を整理すると以下のようにになる。

- ① 児童生徒の実態把握
- ② 育てたい資質や能力の検討
- ③ 学習課題・学習内容の検討
- ④ 目標の検討
- ⑤ 活動計画の検討
- ⑥ 指導・支援計画の検討
- ⑦ 評価計画

②の育てたい資質や能力の検討については、自校の総合的な学習の時間の基本方針との関連から、その学習活動全体で身に付けさせたい力を考える。また、各教科、道徳、特別活動との関連からも考えるとともに、学年や発達段階との関連からの検討も必要である。

③の学習課題・学習内容の検討については、児童生徒の発達段階や各学校の実態に即して、現代的課題や児童生徒の興味・関心、学校や地域の特色に応じた課題などから選択することになる。その際に、「何を」「どのようにして」学ぶのか、「どこで」学んだら効果的なのかなどを念頭に構想を練ることになる。

また、総合的な学習のねらいに即して、以下のような要件に合っているかを検討する必要がある。

- 総合的な学習の時間の趣旨やねらいに合致しているか。
- 目指す児童生徒像の実現に向けた学習が期待できるか。
- 児童生徒の追究意欲を高めることができるか。
- 活動の広がりや深まりが期待できるか。

また、⑤の活動計画の検討においては、次の3点に配慮したい。

- 「学習課題を発見する」ことから「表現・発表」までの総合的な学習の時間の学び方の一連の流れを意識して、学習活動の配列を構想する。
- 児童生徒が学習課題を自分のものとして、意欲的、主体的に課題を追究していくために課題設定の場面の充実を図る。(P49事例11参照)
- 児童生徒が自力で解決しながら、意味ある活動、価値ある活動や体験となるように、以下のようないくつかの問題解決の場面を工夫していく。
 - ・ どのような内容を調べていくか
 - ・ どのようにして調べていくか
 - ・ どのようにまとめていくか
 - ・ どのようにして連絡をとったり、聞いたりしたらよいか

⑥の指導・支援計画の検討の段階では、指導・支援の方針や学習形態の検討、評価計画の検討も必要である。具体的には、指導・支援の際に、児童生徒に任せられる部分と教師が指導すべき内容とを明確にしておく必要がある。

⑦の評価計画では、学習活動の目標が達成できたか、評価の内容や方法について計画することも重要である。

(2) 年間活動計画の作成

総合的な学習の時間の年間活動計画は、一つないし複数の単元から構成される。発達段階や学校全体のテーマ設定などにより、1年間を通して一つの学習内容で通すこともあり得る。

総合的な学習の時間には、各教科などのように目標や指導内容が示されていないとはいっても、意図的、計画的に年間活動計画を作成しなければならない。

例えば、年度当初に学校としての大枠の様式を示し、それに基づき、各学年が1年間の見通しの基に活動計画を作成していく方法がある。各学年の活動計画案を研究推進委員会などで集約する。

そこで、総合的な学習の時間で育てたい力など自校の基本方針との関連から、以下のような観点で検討を加える。

- ・ 教育目標や育てたい力などからみて、学習活動全体の整合性があるか
- ・ 各学年の学習内容の配列やそのつながりに無理がないか
- ・ 学年間の学習内容や活動場所の重複がないか
- ・ 自然環境、季節などの条件が適切であるか
- ・ 地域の人材活用を含めた指導体制、安全管理などに無理がないか
- ・ 学習活動の展開や児童生徒の興味・関心の広がりや深まりによって柔軟に修正や変更ができるか
- ・ 学習配当時間について弾力的に運用できるか

このような吟味・検討により、年間活動計画を作成する。学習活動の展開により、活動計画を柔軟に修正や変更ができるようにするために、学期末ごとに学習配当時間等を再検討し、調整する必要がある。

■ 4 活動計画の評価、修正

(1) 授業実践の評価

各学年などにおいて開発された学習内容を蓄積しながら、各授業時間における評価を大切にする。そして、一つの単元が終わったら、これまでの児童生徒の評価とともに、学年の教師間の評価や可能であれば保護者などの意見も聞いて、学習活動の評価の記録を積み上げていく。

(2) 年間活動計画の評価、修正

年間活動計画に基づく授業実践により、学校教育目標や自校の総合的な学習の時間の基本方針との関連から評価を行う。

評価の目的は、児童生徒の学習活動とそれを支える年間活動計画から問題点を明らかにし、改善を図ることにある。先に述べたカリキュラム作成

の過程からフィードバックして考えると、その観点は以下のようになる。

- ・ 総合的な学習の時間で育てたい力が十分に身に付いたか
- ・ 各教科などの学習が有機的に関連し、生かされていたか
- ・ 学習活動の配列や時間数、時期などが適切であったか
- ・ 指導・支援は適切であったか
- ・ 推進組織が整備されていたか
- ・ 計画、実施、評価の過程が円滑であったか

これらの評価の際には、児童生徒や教師の評価だけでなく、授業に協力してもらった地域の方々や保護者などの意見も取り入れながら行いたい。

年間活動計画に基づく実践の中に、このような評価、見直しの機会を位置付け、修正しながら、よりよい活動計画へ改善したい。

このことは、自校の教育目標の実現に一層結びつく教育活動を目指すことであり、具体的な活動案の作成とその実施に終始することなく、教育活動の成果や課題を新たな構想に生かすようにすることである。

■ 5 学習環境の整備

総合的な学習の時間では、情報の集め方、調べ方、まとめ方、表現や発表の仕方、討論の仕方などの学び方やものの考え方などを身に付けることが重視されている。総合的な学習の時間のカリキュラム作成の過程（P14参照）において、カリキュラムの開発を進めるとともに、一人一人の児童生徒がそのような学び方やものの考え方方が十分にできるように、条件を整備する必要がある。

ここでは、校内と校外の人的・物的両面から学習環境の整備を考える。

校内における、多様な情報収集活動を実現するための環境整備として、以下のようなものが考えられる。

- ① 図書室（新聞、図書の検索システム、コ

ピー機の設置)

- ② コンピュータ室（インターネット、電子メール等の利用）
- ③ 特別教室（理科室、音楽室、図工、美術室、技術・家庭科室等の教材教具の利用）
- ④ 視聴覚室（放送視聴、ビデオ視聴）
- ⑤ 電話、ファックス等の機器の利用

また、ものづくりや話し合い、学習のまとめの場所として、多目的ホールや余裕教室の活用なども考えられる。

児童生徒の主体的な活動を生み出すためには、これらの施設・設備を再点検し、どのように活用できるかを検討し、整備しておくことが大切である。

学習のまとめや表現、発表を充実させるために、目的に応じたメディアが活用できるように、環境を整備することも移行期間の重要な課題である。

(P50 事例 12 参照)

また、学習活動が校外に多様に広がる可能性があるので、そのような活動に対応できるよう、図書館、博物館、県庁、市役所、市民センターなどの学校外の施設との連携も必要になる。その際に、どんな目的で何を利用したいのかを明確に説明し、理解が得られるように、対外的な調整や情報収集等を行うことも教師に課せられた重要な役目になる。(P42 事例 8 参照)

地域に根ざした学習活動の検討に当たっては、地域の教育力を活用するために、地域の方々の協力を得ることも必要になる。人材バンクの呼びかけや P T A、社会福祉協議会等の協力を得ながら、個人や地域のグループなどのボランティアを募り、多様な学習活動を展開できるようにする。その際には、目的やねらいを十分に検討して、どのような学習課題や学習内容で協力をいただくのかなど理解を得ることが大切である。

仙台市教育委員会では、学校の教育活動への協力が可能な地域の人材等のリスト作成を推進している。

IV 小学校の検討課題と方策

■ 1 課題と課題解決の方策

(1) テーマ設定の進め方の課題

II で述べたテーマ設定の進め方 (P10 参照) を以下の二つに整理し、小学校としての課題とそれに対応した方策を述べる。

① 学校としてテーマを設定する

学年の独自性が發揮しにくいことや、指導に当たる教師や児童の思いが反映されにくいといった問題点がある。そこで、設定されたテーマの中でできる限り幅広い課題設定と課題追究ができるよう、次のような配慮をする。

- テーマそのものを幅の広いものにする。または、テーマのとらえ方を柔軟にする。
- 課題設定における児童の自由な発想を大切にする。

② 学年・学級でテーマを設定する

学校としての一貫性や共通性がなくなったり、学習内容が複数学年で重複したりすることがある。また、計画が十分に練られていない場合には、学習が滞ることや総合的な学習の時間で目指すねらいの達成が困難になることが予想される。そこで、次のような工夫や配慮が大切になる。

○ ねらいを明確にする

テーマ設定は学年・学級担当の判断に任せても、学習を通して身に付けさせたい力や目指す児童像などのねらいを学校としておさえる。

○ 年間計画を立てる

年度初めに児童の実態把握や学習の展開にかかる下調べを十分に行い、基本となる年間計画を立ててから実践を開始する。計画立案に当たっては、各学校で前年度までに積み上げてきた実践事例をていねいに読みとる必要がある。

○ 学習の履歴を活用する

担当する児童が、どの学年でどのような学習をしてきたのかを把握した上で、計画を立てる必要がある。そのためには、学習の履歴を残して卒業

まで引き継ぐといった学校としての体制を整える必要がある。

移行期間のカリキュラム作成においては、学級でテーマを設定し単元を開発する例が見られる。その背景には、教師や児童の思いを反映させたいということのほかに、各学校にある素材を広く掘り起こすという意図もあるようである。一人一人の教師が主体的に実践するという意味からも、移行期間においては望ましい方法の一つである。

ただし、担任一人で計画・運営するが多くなる分、負担が増し、指導者としての経験・力量がより一層求められる。学年の学級数が多いほど調整も困難になることも踏まえる必要がある。

(2) 総合的な学習の時間の系統性の課題

総合的な学習の時間の全体計画を作成する場合や各学年のテーマを設定し調整を図る場合に、系統性はどうするかが課題となることがある。このことについては、これから実践によって明らかになる部分が大きいと思われるが、現段階での整理をしてみる。

① 教科学習との違い

まず、育てたい力、学び方、テーマや学ぶ内容等、何の系統性を問うかによって違いがあると思われるが、総合的な学習の時間においては、教科学習におけるような「系統性」を求めるとは適切ではないと考える。

現実の生活から学ぶことが多い総合的な学習の時間においては、児童が柔軟に課題追究し実践を通して生きた学習をすることが重要であり、教科学習のような順序立てた統一性のある計画にしたがって学習を進めることができないからである。育てたい力を計画的に育てることは大切だが、系統性をもたらすことが、児童の自由で柔軟な学習活動を展開する上での妨げになったり、カリキュラム作成の幅を狭めたりするなどの問題点も考えられる。

以上のことを見て、総合的な学習の時間における系統性を考えたい。

② 総合的な学習の時間の系統性を考える上での留意点

ア 育てたい力について

総合的な学習の時間で育てたい力として様々な資質、能力、態度が考えられるが、それらの「系統性」を明らかにすることは容易なことではない。育てたい力については、次のことを考慮して進めたい。

- 中学校までの見通しをもち、小学校で育てたい力について無理のない計画を検討する。
- 児童の実態や個人差にも配慮し、学年ごとに細分化しすぎないようにする。卒業までの長期的な視点をもち、複数学年を通して育てたい力を付けるなどの柔軟性を持って検討する。
- 検討に当たっては、全教職員がどのような力を育てたいと考えるのか意見を出し合い、資質や能力、態度の視点から大まかに整理する。(P22事例1, P32事例6参照)

イ 学び方、テーマ、学ぶ内容について

各学年ごとにテーマを設定して取り組む場合には、系統的に学習することは難しい。

一方、学校として各学年のテーマを設定する場合には、学び方に系統性をもたせ全体計画に位置付けることによる効果が期待される。また、教科学習との関連でカリキュラムを作成する場合や学校全体として共通のテーマに継続的に取り組む場合には、内容・テーマについて、ある程度の系統性をもたらすことが可能であると思われる。ただし、それらの場合でも、次のような配慮をする必要があると考える。

- 児童の課題追究・解決の状況に応じて、柔軟な対応に努める。
- 児童が興味・関心をもったことについて、のびのびと学習することができるよう、運用の仕方について共通理解を図る。
- 同一の学年が同じ内容の学習を繰り返すことを避けるために、学びの履歴を残し、それ

を参考にして学習内容を決定するなどの配慮をする。

(3) 特別活動との関連についての課題

学校行事や児童会行事を見直し、総合的な学習の時間との関連を図ったり、総合的な学習の時間に再構成を図ったりする事例が見られる。Ⅱで述べたことに加え、小学校では下記のような配慮をしたい。それが困難な場合には、関連の図り方や再構成の方向性を見直すことが望ましいと考える。

① 計画に当たって配慮すること

- 児童一人一人が、ゆとりをもち試行錯誤しながら課題追究できる時間と場を保障する。行事では、定められた日程に合わせて準備することが求められるが、児童には個人差があり、課題追究の進み方にはばらつきがあることを十分に踏まえる必要がある。
- 児童が自分の興味・関心に基づいて、自分なりの考えで課題追究し課題解決できるようにする。総合的な学習の時間では、児童が自分なりに表現を工夫することが大切である。学芸会などで、表現活動を総合的な学習の時間として行う場合には、個人の課題追究の高まりが表現の高まりにつながるように指導することが大切である。
- 行事の場合、「集団」として活動する中で、児童一人一人の考えが生かされるように配慮する必要がある。
- 人数調整等のために、児童の思いや願いが変更されてしまうことのないよう配慮する。

② 児童会活動の場合

見直しの理由として、行事が学校の特色の一つであること、児童が行事を楽しみにし意欲的に取り組んでいることがあげられている。また、関連を図ることによって活動にゆとりをもたせ、学習として一層高めていきたいという願いもあげられている。

関連を図る場合には、次の二点が大切になると思われる。

- 特別活動として大切にしてきた児童の自主的・自発的な活動を保障する。総合的な学習の時間のねらいである課題追究や課題解決を意識するあまり、教師が作成した計画にしたがって児童に活動させるのでは、関連を図る意味がなくなってしまう。
- 行事の活動が総合的な学習の課題設定、課題追究につながるような発展性や広がりを持ち、児童の行事への取組が一層意欲的になるように計画を工夫する。(P26事例3参照)

③ 学芸会（学習発表会）の場合

学芸会で、総合的な学習の時間の学習の成果を発表しようとする取組がある。その中で、総合的な学習の時間との関連を図りながら特別活動として実施する事例と再構成する事例がある。両者の違いを、事例を基にして述べる。

○ 関連を図りながら実施した一例

学芸会の発表内容の一つとして総合的な学習の時間の発表を加えた事例がある。総合的な学習の時間の取組内容から、学芸会が発表の場として適切な場合に発表している。

○ 総合的な学習の時間に再構成した一例

学芸会を「総合的な学習の時間の発表の場」として設定した事例がある。全学年が、総合的な学習の時間を通して得られたことを発表している。

各学校の総合的な学習の時間の内容によってどちらがよいか判断すべきではあるが、関連を図る方が柔軟な対応が可能である。

■2 小学校におけるカリキュラム作成の事例

以下に、これまで述べてきた小学校におけるカリキュラム作成の検討課題を踏まえ、実践してきた6校の事例を紹介する。

<事例1>共通理解や実態把握に基づいたカリキュラムの開発の事例

小松島小学校では、子供と教師の思いや願いを生かしたカリキュラムの開発を目指している。総合的な学習の時間を、子供にとっては試行錯誤的な活動の場として、教師にとっては教師集団の創意工夫を生かす場として考えた。そのために、実践の柱となる学年の活動を研究推進委員会が支える体制をつくり、カリキュラムの開発を行っている。

I 共通理解

1 研究推進委員会を母体とした共通理解を図る活動の流れ

総合的な学習の時間に関する共通理解を図る母体を研究推進委員会（教頭、教務主任、研究主任、各学年代表）とし、平成12年度は次のような活動を行い学年の活動を支援した。

月	共通理解の内容	場
4	・総合的な学習の時間のカリキュラムの性格とその開発に臨む姿勢の確認	研究推進委員会 職員会議
5	・「総合的な学習の時間への期待と不安」及び「総合的な学習の時間で育てたい力」に関するアンケート実施（教職員対象）	研究推進委員会
6 7	・上記アンケート調査結果の報告 ・5年「自然」の学習計画、実践経過について情報交換	研究推進委員会 職員会議
9	・「総合的な学習の時間」と「教科学習」の異同についての問題提起 ・「実践力につながる環境学習」について討議	研究推進委員会 6年授業研究
11	・「小学校における国際理解教育の在り方」について討議	3・4年授業研究
1	・「協力指導体制の在り方」と「評価」について討議	5年授業研究
3	・今年度の実施カリキュラムをもとにした次年度の大枠の計画カリキュラム作成	研究推進委員会

2 子供と教師の思いやりや願いを生かしたカリキュラムの開発に向けて

(1) 基本的姿勢の確認

4月の研究推進委員会及び職員会議において、カリキュラムの開発に臨む姿勢として、次の2点を確認した。

- 子供にとっても教師にとっても試行錯誤的な活動である総合的な学習の性格を考慮し、無理をせず、実践しながらつくっていく。
- 子供と教師が同じ立場で共に学び合い、教師集団の創意工夫を生かして取り組む。

(2) 思いや願いの把握

教職員対象のアンケート調査（自由記述）を実

施し、次のような思いや願いをもっていることが分かった。

① 総合的な学習の時間への期待

- 主体的、体験的、問題解決的、試行錯誤的、創造的、共感的な学びが生きる力につながる
- 教科・領域の枠を越えた学び（身近な生活や現代社会の課題を通して）
- 学校や地域の特色を生かした教育活動の推進
- 教師同士のチームワークの向上

② 総合的な学習の時間への不安

- 総合的な学習に対する理解や経験の不足
- 教師の力量、指導体制の問題
- 条件整備の不備、ゆとりの不足
- 子供の思いや願いと教師のそれとの重ね合わせの問題

③ 基礎学力の低下、学力二極化問題

④ 評価の問題

- 基礎学力の低下、学力二極化問題
- 評価の問題
- 総合的な学習の時間で育てたい力
- 問題意識をもち、課題を発見する力
- 課題解決の方法を知り、活用する力
- 表現力
- 他者とかかわり合い、認め合い、学び合う力
- 発展・深化・統合する力（知の総合化）
- 感性・人間性・自省する力

II 地域の特性及び既存の教育活動を生かしたカリキュラムの開発 -5学年「自然」-

1 願いに基づくテーマの設定

5学年担任教師の願いを出し合い、次の3点についての共通理解を得てテーマを設定した。

- 日常的な遊びや生活科の学習の場である「小松島公園」「ホタルの里」「梅田川」などの地域

の自然を素材とする学びを創造したい。

- ・既存の教育活動である「野外活動」を生かし、その舞台となる泉ヶ岳の自然と地域の自然との比較による気付きをきっかけに、個々の子供が課題を設定、追究する学びへと発展させたい。
- ・本テーマの学びを通して、「気付く（課題発見）の力」「自分なりの問題解決に取り組む経験」「自然・環境を大切にする心」を育てたい。

2 カリキュラム構想

(総合 15 時間+学校行事 9 時間)

長期にわたる問題解決学習の経験がない実態から、あらかじめテーマは示しておき、自然についての気付きをもとに、一人一人の子供が課題を決め、追究することにした。

(1) 課題発見

五感を使い、次の二つの体験活動による気付きをメモする。

- ・小松島公園、ホタルの里、梅田川における散策、観察、川・池・沼の水採取等の活動を通した気付き（学校周辺での発見）
- ・泉ヶ岳登山、“ネイチャーあそべっしゃー”等の活動過程での気付き（野外活動での発見）

(2) 学習課題の決定

- ・子供は学校周辺の自然と泉ヶ岳の自然における発見との比較から学習課題を決める。
- ・教師は、「時間をかけて追究する価値のある課題か」、「解決方法の見通しがある程度もてるか」等の観点から助言する。

(3) 学習計画の作成→学習課題の追究

夏休み前に学習計画を立て、夏休み中に追究活動をし、夏休み後に発表することにした。

- ・追究の仕方としては、現地に行って観察・実験・調査する方法や図書館、科学館、環境関連施設、インターネット等で調査する方法をとる。
- ・追究したものは、各自ノート、新聞、模造紙等の作品にまとめ、学級ごとに発表会を開く。
- ・個々の作品は、一定期間渡り廊下に展示し、同学年のみならず、他学年の子供、教師、保護

者にも見てもらう。

3 研究推進委員会からの学年部への提案

実践を進める途中で生じた課題については、研究推進委員会でも検討され、次のような考えが学年部に提案された。

- (1) 学習課題の設定に悩む子供に対して
 - ・個々の学習課題の設定・修正には、たっぷりと時間をかける必要があるのではないか。
 - ・学級担任だけでは十分な支援が困難である。協力指導体制をとることが有効ではないか。
- (2) 個々が追究したことを共有するために
 - ・全体での発表で終わりにするのではなく、展示了作品に感想を記入するなど、互いのよさを評価し合う工夫をするとよいのではないか。
 - ・個人ごとに追究活動をした後に、多くの子供が興味・関心をもった事柄を共通テーマとして学んでいく 2 サイクルの学習活動の構想が求められるのではないか。

本単元においては、これらの考えを取り入れるまでには至らなかったが、別の単元の実践や次年度の計画カリキュラムに生かそうとした。

III 実践の中から見たこと

- (1) 教職員の率直な思いや願いを確認し合うことが、共通理解を図る第一歩となった。
- (2) カリキュラムの開発においては、子供の思いや願いを生かすことに加え、どんな学習素材をもとにどんな力を育てたいのかという教師の思いや願いを生かすことが大切になると考える。
- (3) カリキュラムの開発やその改善は、各学年ごとの実践が柱となるが、研究推進委員会等のサポート体制が有効に働くことが分かった。
- (4) 個々の子供の多様な学習活動を支援するためには、協力指導体制が必要となるが、それをいかにして構築していくかが課題である。
- (5) 地域の学習素材や人材に関する情報収集や実践上の課題について、焦点化した話合いの場や時間の確保をいかに図るかが今後の課題である。

<事例2>評価をカリキュラムの改善に生かした事例

鹿野小学校では、児童一人一人が学習の主体者として学習を進めるため、第5学年においては自己評価・相互評価を通して自己理解を深め、新たな学習の目標を設定して学習を進めた。教師は、「個や集団の変容」「支援の在り方」「特色ある学校づくり」等の観点から、カリキュラムを評価する。その評価をもとに、カリキュラムを改善し児童によりよい支援を行うように努めた。

I 評価についての考え方

1 教師によるカリキュラムの評価

(1) 評価の観点

① 児童の評価

ア 育てたい能力や態度が身に付いているか

第5学年は、総合的な学習の時間の目標を「自主・共生・創造」とした。それを基に、育てたい資質や能力、態度を以下のようにとらえた。

●主体的に問題解決する力

- ・問題を見付け、追究し考察する力
- ・社会や自然の事象を観察、記録、分析する力
- ・調べる力、メディアリテラシー

●協調的に学び合う力

- ・コミュニケーション能力
- ・人の意見を尊重し自分の意見との共通点や相違点を見つけ、よりよい方向を探る力
- ・仕事を分担し、責任を持って取り組み、協力して進める力

●創造的に学ぶ態度

- ・よりよい自分、人間関係、環境を目指して、問題を様々な面から見つめ、考えようとする
- ・伝えたいことを効果的に表現しようとする
- ・見通しをもって学習を進める
- ・自らの学習をふりかえる
- ・新しいことに進んで取り組もうとする

イ 児童がどのように思考し、自己理解を深めているか、その過程

② 教師のかかわり方についての評価

ア 支援の在り方

児童の主体的な学びを支える支援の在り方

イ 教師のよさを生かしたチームワーク

ウ 客観的で多面的な評価を目指した情報交換と情報・評価の共有化

エ 各評価をカリキュラムの改善に生かす

③ 特色ある学校づくりの面から

- ア 地域素材の教材化と有効な展開の在り方
- イ カリキュラムや評価の特徴
- ウ 信頼性の高い評価方法の模索

④ 安全、費用、施設設備の面から

(2) 評価のための手立て

教師による観察、児童と教師とのコミュニケーション、ふりかえり票、ポートフォリオ、個人面談、アンケート等

2 児童の自己評価、相互評価

(1) 自己理解を深めること

自己評価、相互評価を自らの言葉で行い、反省を基に新たな目標を設定させる。

(2) ふりかえり票について

情報を多く得られる自由記述の形式とする。児童が自分の「よさ」を意識してふりかえりができるよう、「今日見つけた自分のよさ」を書かせる。「よさ」の観点は自分で考える。その内容を児童にフィードバックし、どんな価値に気付いているか意識させ、次の活動への意欲付けを図る。意識の高まりに応じて、相互評価を取り入れる。

(3) ポートフォリオ評価について

学習計画書、資料、レポート、ふりかえり票などをファイルして自分の学習過程を振り返り、見通しをもって学習が進められるようにする。

3 カリキュラムの改善について

以上の評価をカリキュラムの改善に生かすには、期間の短いものでは授業1時間毎あるいは一つの活動毎に評価を児童にフィードバックし、よりよい学びを支援したい。また、年度末には一年間を振り返り、次年度のカリキュラムの改善に生かす。

II 第5学年「鹿野探検」の活動の流れと主な評価

総時数 74 時間

月	活動	ねらい	評価の方法と受けとめ方	カリキュラムの改善の観点	
6	オリエンテーション 個別課題の検討・設定 課題別グループ編成 第1次学習計画作成・学習開始	・自分にとって追求する価値のある課題を設定する。	・課題と検討の様子 - 追求する価値のある課題を設定できたか。	・学習の動機付けのよりよい在り方 ・地域素材の見直し	
7	(11時間)	・調べる方法を考え、学習計画を立てて学習を開始する。	・学習計画を立てる話し合いの様子 ・学習の見通しを立てるのに必要な能力や態度の分析と定着度。	・学習計画を立てるための能力や態度の実態把握と育成	
9	調べ学習の中間の整理 第2次学習計画作成 校外体験学習計画 第3次調べ学習開始	・第一次学習をふりかえって学習内容を整理する。 ・調べ学習を進めるための第2次学習計画を作成し、開始する。	・ふりかえり票 児童が考えた「よさ」を分類し、それぞれの価値を互いに確認することで新たな学習への意欲付けを図る。 ・調べ学習の進め方 - ものの見方、調べ方、情報活用能力はどの程度身に付いているか。	・児童が取り上げた「よさ」の観点（問題解決方法、仲間との関係、マナー等）や取り上げられなかった観点からカリキュラムを見直す。	
10	校外体験学習（見学・調査・インタビュー等） 福祉体験学習 分科会別発表会 学年発表会 (分科会別代表グループ)	(20時間)	・課題の解決に効果的な体験学習を計画し、実施する。 ・分科会別発表会や、学年発表会で、共有化を図り高め合う。 ・発表に必要な表現力、目標に向かた話し合いを進める司会の仕方、発表の仕方、質問の仕方を身に付ける。	・体験学習の企画と実際の活動 目的に合った体験学習か。 ・発表の仕方 - 発表に必要な構成力・表現力の分析と定着度 ・発表会の進め方 ・話し合いによる高め合いの様子 ・社会的スキルの生かされ方	・体験学習のよりよい企画・展開の仕方 ・発表に必要な力の段階をふまえた指導・支援の在り方 ・発表会の運営能力や参加する能力や態度を段階的に育てる支援の在り方 ・社会的スキルと実際の適用場面の分析
11	「秋の発表会」の計画 練習開始 「秋の発表会」（鹿野ものかたり）	(25時間)	・総合的な学習のプレゼンテーションの場とする。 ・調べたことを基に伝えたい内容や思いを、表現方法を工夫して舞台で発表する。 ・様々な表現形態に親しむ。	・原稿や製作物 ・話し合い、高め合いの過程、様子 ・舞台発表の様子 ・見る人に伝えたい内容や思いを伝えることができたか。	・分科会での発表と舞台での発表に必要な態度や能力の違いについてとらえ、発達段階をふまえた発表の指導・支援の在り方を探る。 ・保護者や地域の方と学習したことや思いを共有化する場面設定
12	「秋の発表会」の反省 担当教師との個人面談 第3次調べ学習計画作成 第3次調べ学習開始 カリキュラムについての要望のアンケート	(5時間)	・これまでの学習を、自己評価・相互評価する。 ・反省を基に、個別課題の調べ学習をまとめるための学習計画を立てる。 ・個人面談を行い、これまでの学習の長期的なふりかえりを基に自己理解を深め、今後の目標や計画について話し合う。	・相互評価カード ・長期的な振り返りと今後の計画表 ・個人面談 ・ふりかえり票やポートフォリオを基に話し合い、児童がどのような思考過程や自己理解を深める過程を経てきたか探る。集団とのかかわり合いについての児童の受け止め方や、集団自体の成長について把握する。支援のふりかえり。 ・カリキュラムについての要望アンケート ・教師の支援の在り方や展開した活動の意義を児童がどうに受けとめたか振り返る。	・率直な相互評価をし合う関係作り ・個が生かされ、高め合える集団づくりのための支援の在り方 ・児童はどのような思考過程をたどり問題解決をしてきたのかの分析 ・それぞれの学習の段階でどのようなことをきっかけとして自己理解を深めてきたのか分析 ・主体的な学習を進める視点から教師の支援を見直し（評価し）、反省の基にし、その後の支援に当たる。 ・児童はどのような活動のどのような要素に満足を感じているかの分析
1	第3次調べ学習 個人レポートの作成 個人レポートの完成 最終発表会 最終個別面談	(13時間)	・調査が不足している点、新たに興味を持った点等の学習を深める。 ・1年間の学習の成果を認め合う。	・個別レポート ・発表会の運営と話し合いの様子 ・個人面談 ・1年間の成長をどのようにとらえ、満足しているか。自分のよさに自信を持つことができたか。	・個人差に対応した指導・支援の在り方 ・自分やお互いの成長を認め合う態度の喚起 ・カリキュラム全体の見直しと次年度のよりよいカリキュラムの検討

III 実践の中から見えてきたこと

(1) ふりかえり票で、自分や友達のよさや改善した方がよいところに気付き、自己理解を深め高め合おうとする姿勢が生まれた。

(2) 個人面談によって、児童の自己理解や教師による児童理解が深まった。また、教師の支援の態度やカリキュラムの展開について反省することができた。

(3) カリキュラムについてのアンケートから、教師の支援の態度が、児童の主体的に学習を進め意欲に深くかかわっていることが分かった。児

童に指摘された反省点については、改善することができた。また、児童が体験学習をとても意味のあることとしてとらえていることが分かった。そこでのつまずきの要因を解決するために支援することができた。

(4) カリキュラムの評価をその都度児童にフィードバックし、カリキュラムを改善するためには、教師が支援する際に求められる観察、思考、判断等の反省的思考力がキーポイントとなる。子供の探求活動、教師自らの支援を省察する態度及び能力を高めたい。

<事例3>児童会活動との関連を図ったカリキュラムの開発の事例

将監西小学校では、本校の特色の一つである「西小こどもまつり」（児童会活動）と総合的な学習の時間との関連を図ることにより、教育目標の「自ら学ぶ児童」を育てる指導の在り方を追究する試みを行っている。学びの意味や喜びを味わわせながら、より豊かな生活をつくろうとする意欲につなげたいと考え取り組んでいる。

I 西小こどもまつりと

総合的な学習の時間との関連

西小こどもまつりは、児童が最も興味・関心をもち、意欲的に取り組んでいる児童会活動である。

今年度は、まず「西小こどもまつりをより楽しいものにしよう」という児童の願いを全校テーマとし、「まつりを楽しくするための工夫」について話し合わせることから始めた。その結果、昨年にはなかった次のような工夫点が出された。

- ・地域の方々に呼びかけて、まつりに参加してもらう
- ・地域の福寿会の方々にもコーナーを出してもらい、交流する
- ・外国の方を招待し、言葉や文化を紹介してもらう
- ・将監中央小の児童にも参加してもらい、交流する
- ・教育長さんを招待し、自分たちの活動に参加してもらう

次にこの案をもとに、より楽しいまつりを目指すため、各学年ごとの活動重点ポイントを、代表委員会の話合いで決定した。（表1）

児童が考えた重点ポイントに取り組む時間を、総合的な学習の時間としてカリキュラムの中に位置付け（10時間）、自ら興味・関心をもった課題を追究する時間を保障するとともに、この総合的な学習の時間での学びをまつりに生かすことができるよう支援していくことが、「自ら学ぶ児童」の育成につながるのではないかと考え実践を行った。

表1 総合的な学習の時間の活動重点ポイント

	主な学年重点ポイント
3学年	地域の方々への参加の呼びかけ、まつりに関する新聞作成など
4学年	福寿会への呼びかけと交流の計画・準備など
5学年	転勤された先生方へのパソコンを利用しての呼びかけと交流の計画・準備、町内会長さんへの働きかけなど
6学年	外国の方々との交流の計画・準備、将監中央小との交流の計画・準備、教育長さんを招待するための計画・準備など

II 実践の経過

1 具体的な学習活動例

児童は、楽しいまつりを目指すというねらいをもって、学年重点ポイントをもとに主体的に自分の課題を設定し、総合的な学習の時間を展開して

いった。表2は6学年の主な学習活動である。

表2 6学年の主な学習活動と学習形態

主な学習活動	形態
外国の文化をパソコンや市立図書館などで調べるとともに、交流に向けて対応の仕方を学んだり、交流室の準備に取り組んだ。	グループ
教育長さんの仕事を学習しながらパソコンで招待状を作成する。教育委員会を訪問して教育長さんと打合せを行った。	グループ
中央小との交流に向けパソコンの操作方法を学び、中央小専用のコーナーマップや校舎内外の装飾品作りに取り組んだ。	グループ
地域の方々に参加を呼びかける手立てを考え、実践した。 (独自の宣伝ポスターを作成し、出展示場所を調査したり地図の方々を訪問したりしながら宣伝活動を行った。)	個人、グループ

2 総合的な学習の時間への取組を通して

全校テーマのもと、行事に児童全員で取り組むことを目指し、個々の課題を追究する総合的な学習の時間の活動を進めた。その学びを通して得た自信や喜びがより主体的な行事への取組につながった。昨年までは、学級のコーナーの準備にとどまっていた中学年の児童も、全員でまつりを盛り上げようという自覚を強め、当日は大変意欲的に活動を展開することができた。

まつり終了後も、世界の国々の文化についてパソコンで調べようとする児童の姿が見られるなど、問題意識が継続・発展している一面もうかがえた。

III 実践の中から見えてきたこと

(1) 児童会活動と総合的な学習の時間との相互環流的関連を図る試みの第一歩を踏み出し、その成果も得られた。

(2) 学年ごとのテーマを設定するまでには至らなかった。また10時間という少ない時数だったこともあり、総合的な学習の時間の学びとしての深まりという点においては課題が残った。今後さらに検討していきたい。

(3) 総合的な学習の時間と特別活動相互の中で培われた力を、より効果的に働き合わせる手だてや支援の在り方をさらに追究していきたい。

<事例4> 弾力的な時間の活用の事例

八乙女小学校では、総合的な学習の時間の時数確保と、新教育課程に対応した柔軟性のある時間割を編成するための在り方を検討してきた。ノーチャイム制とモジュラーシステムを取り入れ、学習内容に応じた弾力的な時間活用の工夫に取り組んでいる。

I 平成11年度までの弾力的な時間活用の工夫

時数の確保、指導法の工夫改善などの検討を行い、平成11年度から3・4校時目の部分的なノーチャイム制を導入した。さらに、平成12年度約70時間の総合的な学習の時間の枠を設けるため、時間割を検討した。教務主任を中心とした教務部で、「学期ごとの時間割」「学期末や年度末の時間の調整」「年間を通して同じ時間割」という三つの原案を提案した。全体で話し合い、次のことが共通理解された。

- ① 年間を通してほぼ同じ時間割にする。
- ② 時数調整が難しい場合は、学期ごとに時間割を変更する。
- ③ 総合的な学習の時間を時間割に1時間設定する。(3年生以上)
- ④ モジュラーシステムを導入する。
- ⑤ ノーチャイム制を拡大する。
- ⑥ 総合的な学習の時間など、時間割に変更がある場合は子供と家庭に速やかに連絡する。

II 平成12年度の弾力的な時間活用の工夫

1 時間割とノーチャイム制

◆3・4校時 10:50~12:25

[90分 15分(1モジュール)×6]

◆5・6校時 13:25~15:00

[90分 15分(1モジュール)×6]

2 学習時間のモジュール化

15分を1M(M:モジュール)として時数管理を行う。60分授業が適切な学習内容については、4Mで行う。このとき、30分は教科等の授業を2Mの内容で行い、合わせて6Mになるようとする。45分で授業を組み立てた方が適当な場合は、3Mとして時数をカウントする。

3 学習内容のモジュール化

学習のねらいと学習内容に応じた適切な時間を設定することが大切になる。学習を組み立てるときに15分なら15分の、75分なら75分の時間ごとのねらいを考える姿勢が大切になってくる。

本年度は、以下のような例が見られた。

(1) 4~6モジュールの学習の例

総合的な学習の時間：調べ学習、発表

理科：実験、課題別グループ学習

(2) 1~2モジュールの学習の例

算数：計算等の練習問題、国語：漢字練習、

音楽：器楽練習、合唱練習

4 実践上の配慮

遅くとも、1週間前には次週の計画を立てる必要がある。学習の結果、時間等が計画と違った場合には教育記録簿に記載し、次年度の年間指導計画に生かしていく。

III 実践の中から見えたこと

(1) モジュラーシステムを導入したことで、多様な学習計画が可能となり、学年TTを取り入れた指導法等、さまざまな工夫が行われた。指導体制の弾力化とその在り方を、さらに工夫したい。

(2) 学習内容をさらに考え、1モジュールごとのねらいを各教科の年間計画の中に取り入れることが重要な課題である。45分の授業についても適当と考えられる内容について吟味したい。

(3) さらに弾力的な時間活用を進めるためには、特別教室の割当てを検討し、各学年・学級の連絡調整を一層密に行う必要がある。

(4) 完全週5日制の時間割をどのようにすると効果的な学習が組み立てられるのか、次年度に明らかにしたい。

<事例5>カリキュラム作成の進め方の事例

折立小学校では、総合的な学習の時間で願う子供像を「自分を見つめ、仲間と共にたくましく生きていく子」とし、目指す力を「自ら判断し行動する力」「自分のよさを発見し認め自分を伸ばそうとする力」「他人を思いやり共に歩んでいく力」の三つの力に押さえた。この子供像と目指す力に迫っていきたいと考え、全学年で取り組む学校カリキュラムと学年・学級カリキュラムの2本柱でカリキュラムの開発に取り組んでいる。

I カリキュラム作成の基本的な考え方

1 教職員が願う子供像と目指す力

本校では、平成11年度より総合的な学習の時間を試行している。11年度は、地域の素晴らしさを子供たちに体全体で受けとめてほしいという教師の願いから、生活科を土台とした総合的な学習の時間への取組を全学年で展開した。

試行する中で、総合的な学習の時間でねらうことや、生きる力について、教職員自身がおさえる必要を感じた。そこでアンケート調査を実施した。教職員が描く「生きる力とは何か」「折立小の子供に身に付けさせたい力・伸ばしていきたい力とは何か」について自由に記述した。そこには、将来一人の人間として自分の考えをしっかりと持ち、多くの仲間と共に力強く歩んでいってほしいという思いや願いが多く綴られていた。また、「与えられた課題には真面目に取り組むが、自分から行動したり自分の考えを持つことが苦手」「自分に自信がなく、自分のよさがわからないで指示を待つ」「他の考えを聞かず、奉仕の精神に欠ける」といった子供の姿が浮き彫りにされた。

この調査結果を基に、本校が総合的な学習で目指す子供像と力について、その原案を「総合的な学習の時間対策担当」で作成した。(次ページ参照)

運営委員会で検討した後、12年度初めに全教職員で協議した。学校教育目標と大きなかかわりがあることを了解し合い、12年度は上記の子供像と三つの力で総合的な学習を進めることを共通理解した。また、これらが本当に折立小学校にとって適切であるのかどうかを明らかにしていくこと

を確認した。

2 2本柱のカリキュラム

(1) 学校カリキュラム「総合プラン1」

生活科を土台とし、全学年で取り組み継承発展させていくカリキュラムである。折立小の特色である蕃山という自然の素材を生かした学習が行われるように努める。

(2) 学年・学級カリキュラム「総合プラン2」

各学年の担任が、年度ごとに開発するカリキュラムである。学年の実態や特色を生かし、子供一人一人の多様な興味・関心や教師の持ち味を十分生かすように努める。

II カリキュラム作成

1 カリキュラム作成の進め方と組織

(1) 学校カリキュラム「総合プラン1」

学校の特色として次年度以降継承・発展させていくために校内研究として取り組み、発達段階における積み重ねを実践活動を通して明らかにしていった。

研究推進委員4名のメンバーがカリキュラム班と資料収集班に分かれ、各学年部と担任以外の教員も二つの班に分かれて全教職員でカリキュラム作成に当たった。カリキュラム班は、各学年部の取組を調整してカリキュラムの形式の改良を行った。資料収集班は、学校や地域の資料を収集整理し、各学年部へ資料の提供を行った。

研究は、各学年部で立てた柱を中心に協議を開いた。低学年部は「自然の豊かさに気付かせるための教師の意図する手だて」、中学年部は「課題を見付けていく目や力を育てる一つの試みとし

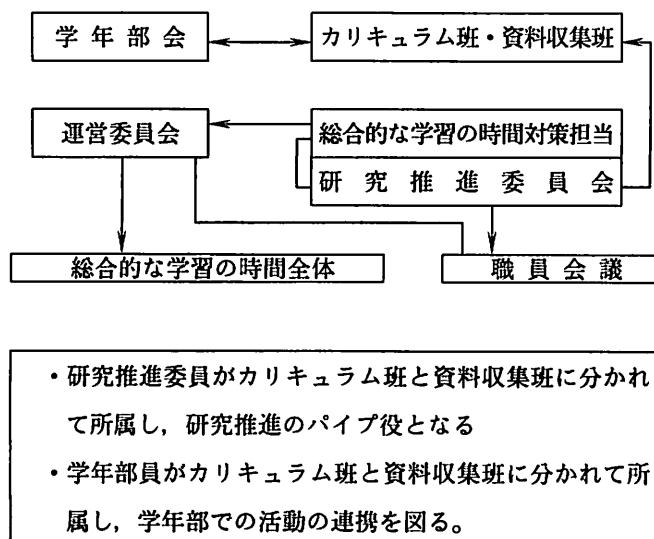
て子供個々が行うウェビングの在り方」、高学年部は「子供たちが生き生きと活動に取り組むための支援と評価の在り方」を中心の柱として活動紹介を行った。各学年部の接続や積み重ねについて協議し、確認や改善を図り、学校の財産としてのカリキュラム作成を行った。

(2) 学年・学級カリキュラム「総合プラン2」

学年が主体となり、子供の実態と教師の願いを基にしてカリキュラムの開発を行った。子供自身が課題を見つけて追究していくことを大切に考えた。子供個々の課題を大切にするとともに、人とのつながりを大切にし、活動そのものが必ず多くの人のとのコミュニケーションを土台にして展開されるように配慮した。

「総合プラン2」については、今年度初めての試みとなるために、会報や学年便り等を利用して取組の情報を紹介するとともに、授業参観をオープンにして進めた。学年主体のカリキュラムであるが、学年部での情報交換の場を設け、互いの取り組み方や進み方について検討協議して進めた。

【組織図】



2 カリキュラム作成を推進するための工夫

(1) 時間配当

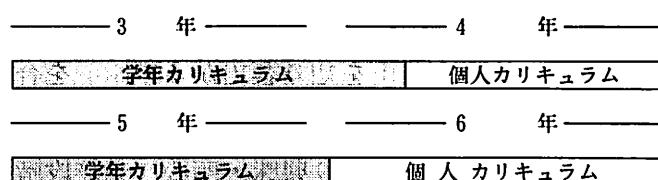
14年度からの完全実施を目指して、下記のような時間配当を計画する。めやすの時間としてとらえ学年の実態や子供と教師の願いを考慮して柔軟

に対応しカリキュラム作成に当たる。

(単位は時間)

プラン	カリキュラム	12年度	13年度
総合プラン1	学校カリキュラム	35	35
総合プラン2	学年・学級カリキュラム 個人カリキュラム	35 70~ 75	70~ 75

総合プラン2については、下図のような2年間のスパンでとらえて学習を進めていくことも考えられる。学年テーマを追究し終えた後に新たに別の課題が生まれ、個人カリキュラムとして発展していく可能性も考えられる。中学年は学年カリキュラムを追究する時間を長くとり、4学年後半から個人カリキュラムに入る。



(2) 時間割・日課表について

総合的な学習の時間を『わかばの時間』と称して、週2時間明示した。ただし、まとめて実施することもあるため、時間割の変更や活動内容についてあらかじめ学習予定を家庭に連絡する配慮をした。土曜日はノーチャイムを導入し、12年度3学期よりモジュラーシステムを導入して学習活動形態の工夫にも努めている。

(3) 学習環境整備について

教師自ら地域に飛び込んで資料を集め、地域の人材を発掘している。人材バンクとしての登録制を取らず、保護者や子供・教師間で情報を入手し情報交換を行っている。学校として資料収集班がまとめているが、学年・学年部で人材や資料を集めて全体へと波及させていく方法をとっている。

(4) 保護者・地域の理解を求めて

①情報発信…PTA総会や学校学年等の様々な便りを通して、本校の取組や考え方についての理解を図った。

②共通理解…保護者会や授業参観を利用して、「総合的な学習の時間とは」「活動の様子」「保護

者が望む子供の力」等の共通理解を図った。

③ 参加・協力…地域の方や保護者が講師となる活動、子供が講師となって共に学び会う活動、ポイント協力隊として活動する機会を設けた。

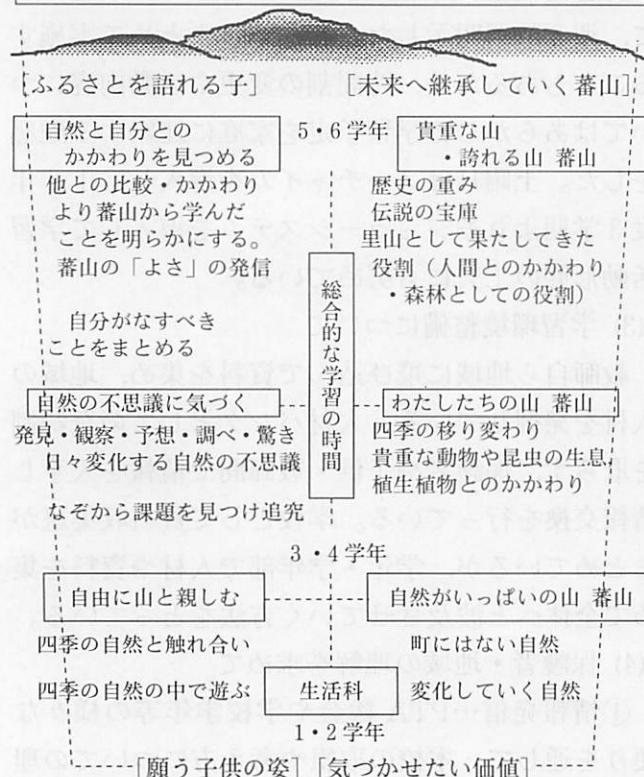
④ 学芸会を使って…総合的な学習の時間で学んでいく様子や生き生きと活動に励む子供の姿を表現し、理解を得る場にした。

3 学校カリキュラム「総合プラン1」の開発

生活科での遊びを主体とした自然体験活動から課題を広げ、自然に対する畏敬の念を抱き地域の文化や歴史などすべてを誇りとして、ふるさとを語れる子供を目指した。子供の興味・関心から課題が広げられ、子供の願いが地域へ発信されていく活動を目指している。

「蕃山に親しみ蕃山を知り蕃山から学ぶ」を合言葉に、下図のような〔願う子供の姿〕と〔気づかせたい価値〕の2点より興味・関心、発達段階を押さえて実践に取り組んだ。

学校カリキュラム「総合プラン1」全体構想図



実践をしていく中で、以下のことことが明らかになつた。体験の積み重ねの重要性、積み重ねのおさえ

方を明確にする必要性、子供個々の成長の過程や課題の累積の仕方と評価の在り方を研究していく必要性、様々な活動形態や方法の模索・実践・見直しを図っていく必要性。

12年度各学年部で取り組んだ活動を以下にまとめた。

- 低学年部…自然を使ったゲームを通して遊びながら四季の変化や豊かな自然にふれさせる活動
- 中学年部…自然とのかかわりの中から見つけた自分の疑問や課題を追究していく活動
- 高学年部…歴史・伝説・共生等の観点から見つめ、蕃山の後輩へ残して行きたい価値を表現していく活動

4 学年・学級カリキュラム「総合プラン2」の開発

願う子供像をもとにし、「自分」、自分を取り巻く「自然」、「社会」の3領域と目指す三つの力を組み合わせて「国際理解」「福祉」「環境」「命(生き方)」をテーマとして考えた。ただし、今年度と次年度は試行錯誤しながら実践を積み重ねていくものとし、テーマにとらわれずに、各学年の実態や特色を考慮してカリキュラムの開発に努めることを共通理解した。

6学年は、「豆とわたしたち」というテーマで、食料事情の問題を追究した。5学年は、「国際理解」というテーマで、留学生・帰国子女とのかかわりから世界に目を向ける学習を行った。4学年は「ギョウザから世界を見よう」というテーマで、日本と外国の文化・生活について追究した。

以下は、3学年の事例である。

児童の実態に基づいた教師の願いから、『生き方』に焦点を当て、「わたし発見の旅」というテーマを設定した。

総合的な学習の時間から特別活動へ活動の発展性をねらい、三つの力の中の「自分のよさを発見し認め自分を伸ばそうとする力」を中心の柱とした。表1のように年間の見通しをもち、表2に示したようにカリキュラムの開発を進めた。

表1

— 3学年総合的な学習の時間活動計画 —

	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
学校カリキュラム	「わくわく蕃山冒険隊」、「森の中はどうなっているのか?前とどう違うのか?」比較できる体験活動-----年40時間----- ・子供が行うウェビングで課題を作成・調べ方を知る活動・ポートフォリオの活用(体験活動は一年を通して6回)													
学年・学級カリキュラム							---「わたし発見の旅」-----30時間----- ・他とのかかわりより自分のよさを発見する ・自分のよさを認め今後の自分の生き方を見つめる ・自分らしさを素直に表現し自分の生き方を振り返る							

表2

— 学年カリキュラム「私発見の旅」 —

月	単元名・時間	ねらい	主な活動内容	関連等
10	わたし発見の旅(生き方) 「今のわたし」1時間 「友達ってなあに?」 「友達のすてき発見!」 2時間	今の自分を振り返り、わたし調べができる。 友達のよさに気付く。 友達のよさを発見し、その大切さをばらしさに気付く。	吹き出しを使って自由に「今のわたし」探しを行う。改めて自己紹介するとしたらどんな自分を紹介しようか、友達の一言が自分に何を与えるかを話し合う。友達のよさを見つけ、自分にどんな影響を与えてるかを見つめ直し、書きまとめる。	道徳で扱う
11	「わたしを見てちょうだい!」 20時間 「わたしへこんな子!」 「こんなわたしになりたい!」	多くの人に見守られている自分の存在に気付く。 わたしのよさを見つめる。	わたし探しのために聞く内容、聞く人、聞く方法を自分で決めて調査を行う。(友達、家族、祖父母、親戚、先生、近所の方、お世話になった方等) 再発見した自分の姿を思い思いの方法で表現する。	行きつ戻りつしながら、余裕をもたせて進める。学芸会発表
12	「わたしをPRしましょう!」 計画・振り返りで7時間	自分の生き方を見つける。	自分のよさを見つめ、未来に向かった自分の姿を描く。	
3	「わたしをPRしましょう!」 計画・振り返りで7時間	自分のよさを生かす方法を考え実践できる。	自分のよさを友達のために生かす計画を立てる。 自分のよさをPRする活動を展開する。 自分のよさ・友達のよさを振り返る。気付いたよさ・今後のあるべき自分の姿をまとめる。	実践は特別活動

開発したカリキュラムは、次年度以降の参考となるように、「活動計画案、実際の活動、子供の変容の姿、反省、改正案等」活動の足跡が分かるように資料を累積していくことにした。さらに、子供の成長した姿と残された課題、子供自身の課題をきちんとおさえて次年度に引き継いでいくことにした。

III 実践の中から見えてきたこと

(1) 学校カリキュラム「総合プラン1」は身近な自然を扱うため、学年が進むにしたがい課題や活動に広がりをもたせる上で、低学年での「自然と自由に戯れる活動」が大切であり有効であることが分かった。適切な支援によって活動に深まりが見られ、子供個々の課題の追究進度や成長過程を累積していくことの必要性が明らかになった。

そのための資料の累積、子供の課題を次年度へ引き継ぐ方法の改善を行っていきたい。

(2) 学年・学級カリキュラム「総合プラン2」では、各学年の子供や教師の持ち味を生かし、様々な取組が展開された。各学年の子供の変容と成果を学校全体でとらえるために、実践を十分参観し協議する場の必要性が明らかになった。

次年度、学年・学級カリキュラムの開発に力を注ぐとともに、よりオープンな授業紹介をしていきたい。

(3) 子供にとって魅力があり生きた力となる学校づくりのために、学校目標に照らして総合的な学習の時間で目指す力を再度見直し、教えるべきことと自ら学ぶべきことを明確にして、子供が伸び伸びと活動できるカリキュラムの開発に努めたい。

<事例6>学年の重点を踏まえたカリキュラム作成の事例

田子小学校では平成11年度から総合的な学習の時間に取り組み、13年度のカリキュラム完成を目指して全学年が授業実践を進めている。また、総合的な学習の時間の田子小総合テーマとして「共に生きる」を掲げ、人と人とのつながりを意識した学年テーマ設定し、学年の重点を踏まえながら学校カリキュラムの作成に取り組んでいる。

I カリキュラム作成までの主な取組

◆ 11、12年度の主な取組から

(1) プロジェクト委員会からの提案

- ・学校教育目標の検討と目指す児童像、重点目標の見直し
- ・職員が求める児童の姿、育てたい力の調査
- ・新教育課程推進の構想
- ・総合的な学習の時間のテーマ作成の手順
- ・13年度までの総合的な学習授業計画作成の手順

(2) 研究部からの提案と実践

- ・学校カリキュラムの提案 表2・表5
- ・学年テーマの作成
- ・学年目標（目指す児童像）の作成 表1
- ・カリキュラムの開発 表3
- ・開発教材集の作成 表4
- ・授業実践と授業紹介

II カリキュラム作成

1 学校カリキュラム

(1) カリキュラム作成にあたって

本校では、児童の実態から、総合的な学習の時間を進める際に欠かすことのできないものとして、「人と人のつながり」を考えた。そこで、総合的な学習の時間のテーマを「共に生きる」とし、人と人、人と自然とのかかわりの中で体験的な活動を通して、進んで学び、進んで考える児童の育成を目指すためのカリキュラム作成を進めてきた。

(2) 学年の重点の設定

総合的な学習の取組に関しては、あらかじめ、「共に生きる」というテーマに迫るための重点を

表1 学年目標（目指す児童像）

学年	活動への関心・意欲・態度	問題解決の力	表現活動	他とのかかわり
1年	○学習に関心を持ち、準備ができる。 ○喜んで学習に取り組むことができる。	○調べたいことをもつことができる。	○進んで発表することができる。	○友達と仲良く活動ができる。
2年	○学習に興味をもち喜んで取り組むことができる。	○知りたいことを調べることができる。	○進んで発表することができる。	○友達と仲良く活動ができる。
3年	○課題をもつことができる。	○自分の考えをまとめることができる。	○学習したこと表現し、わかりやすく相手に伝えることができる。	○グループで協力して活動ができる。
4年	○進んで課題を見付けることができる。	○調べたことをもとに、自分の考えをまとめることができる。	○調べたことをまとめ、工夫して発表することができる。	○一人一人の考えを生かしながら、協力して活動することができる。
5年	○進んで課題を見付けることができる。	○いろいろな調べ方の中から、自分で調べ方を工夫し、調べたことをもとに考えをまとめることができる。	○活動する中で、自分の願いや思いをはっきりと表現することができる。	○一人一人の考えを生かしながら、相手の考えを尊重しながら、協力して活動することができる。
6年	○進んで課題を見付けることができる。	○調べたことをもとに、自分の考えをまとめ、実践しようとする。	○活動する中で、自分の願いや思いをはっきりと表現することができる。	○人の気持ちを理解しながら、友達と協力して活動ができる。

学年ごとに設定しておき、6年間で追求していくスタイルをとった。（学校カリキュラム 表2）

学年の重点については、総合的な学習を進める際に、それぞれの学年で押さえておきたい課題ととした。

1・2年生は生活科との関連から、学校や地域の人々や自然へ目を向けることを考えて設定した。3年生は生活科で学んだことを土台として、社会科との関連から、地域の中に自分がどうかかわっていくのかを考えることができるよう設定した。

4・5年生では自分を取り巻く人や物、生活に目を向け、そこから生まれる様々な疑問や興味を追究する中で、自分は何をすべきかを考えることができるように設定した。6年生では、それまでの学習経験を基に、子供たちの思考や取組が様々な世界へ広がっていくことを考え設定した。

(3) 学校カリキュラム作成の進め方

このような学年の重点を基に、年度当初、児童の実態や教師の願い、児童との話合い等で学年テーマを決定することとした。次に、1年間の活動を

見通すために大まかな活動計画（表3）を立て、実践しながら必要に応じてカリキュラムを修正したり、開発したりしていくことにした。また、活動の柱はねらい達成のための手段ととらえ、毎年、学年裁量で柔軟に考えていくことにした。

以上のような考え方で、実践しながら11年度は40時間程度のカリキュラムの開発を目指した。さらに12年度は、このカリキュラムを基に、60時間程度のカリキュラムの開発を進めてきた。

表2 12年度の学校カリキュラム

60時間程度（1・2年は20時間程度）

学年	重点	学年テーマ	主な活動の柱	時間の設定
1年	学校	がっこうだいすき	地域・国際交流	生活科
2年	田子	すてきな田子をさがしたいな	地域・国際交流	
3年	街	自分の住む町	地域・環境	総合的な学習の時間
4年	くらし	見つけよう 人にやさしい町づくり	福祉・環境	
5年	命・人間	杜の都仙台と私たち	環境・福祉	
6年	世界	未来という宝物	情報・環境	
ひまわり	生活	自分と「人・生活」とのかかわり	生活単元学習	

2 カリキュラムの開発の進め方

カリキュラムの開発においては、指導要領で示されている三つの課題、いわゆる「今日的な課題」「児童生徒の興味・関心に基づく課題」「地域や学校の特色に応じた課題」を視野におき、学校や児童の実態を踏まえて進めてきた。

12年度は、前年度開発したカリキュラムを検討し修正を加えながら進めていく学年や、児童の実態や教師の願いから新たにカリキュラムを開発し学習を進めていく学年等、多様な進め方が見られた。また、各学年のカリキュラムがそれぞれの発達段階を踏まえ妥当であるかを研究推進委員会や研究授業後の全体会で検討し、次年度に生かすカリキュラム作りを目指した。

3 実践の内容

(1) 生活科との関連

生活科で経験した具体的な活動や体験、それら

を通して培われた主体性や行動力は、総合的な学習の時間の基礎として3年生以上で生かされ、学ぶ力として育っていくものと考えた。そこで、総合的な学習の時間のテーマを受けて、低学年では生活科との関連を図った学年ごとのテーマを設定し“人と人のつながり”を中心としたカリキュラムを開発し実践してきた。

1年生は幼稚園児を招待し、自分たちで作ったおもちゃで一緒に遊んだり、小学校の紹介をしたりするなど、幼稚園との交流を行った。2年生は地域の人々との交流として、商店、施設及び自然を探検し発見したことを基に、1年生に田子の町を再現して見せる活動を行った。

(2) 体験的な活動の重視

本校では、学習活動の中に体験的な活動ができるだけ多く取り入れることで、そこから生まれる気付きや関心から、子供自身が感じ、考え、実践

していこうとする学習活動へ展開していくのではないかと考え、「体験的な活動を重視した総合的な学習の時間の授業作り」を目指し、授業実践を進めている。3年生は新たなカリキュラムとして、田子にある様々な施設を見学し、調べたことをパンフレットにして、地域の人たちに配布する活動を行った。4年生は児童の実態に基づいた教師の願いからスタートし、福祉教育に取り組んだ。5年生は仙台の街の良さと魅力について、様々な視点から取り組んだ。6年生は児童がテーマを決め、学習計画を立てながら学習を進めた。

(3) 4年生の例

年度当初に、1年間の総合的な学習の時間を見通すために総合的な学習の時間活動計画を作成した。(表3)

これを基に、実践を重ねながら開発していったカリキュラムが表4の福祉教育編である。

カリキュラムの開発に当たっては、活動ごとの児童の反応や興味・関心と教師の願いを結びつけながら、必要に応じて新たに活動内容を設置したり、修正を加えたりしてきた。

表3 総合的な学習の時間活動計画

	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4学年
学校カリキュラム 「みつけよう 人にやさしい町作り」	福社教育	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	45時間程度
		・キャップハンディ体験 ・バリアフリー探検隊 ・目が不自由な方を招いて ・人にやさしい施設発表会 ・学芸会で手話の発表 ・福祉施設訪問 ・人にやさしい町づくり提案											
60時間程度	環境教育	15時間程度
		・清掃工場見学 ・ゴミの何が問題なんだろう? ・省資源、省エネについて考える ・人にやさしい町づくりのためにできることはないだろうか											

表4 総合的な学習の時間カリキュラム

4学年 福祉教育編

実施時期	単元名・時間	ねらい	主な活動内容	教科等との関連
5月	「みつけよう 人にやさしいまちづくり」 福社教育 ◇障害って何? 2時間 ◇キャップハンディ体験	○障害の意味を知り、自分たちがこれからやろうすることに目を向ける。 ○キャップハンディ体験することで、障害を有する人々の生活を知る。 ○障害を有している人々が困っている時に、自分たちができることはないか考える。	・いろいろな障害についての話を聞く。 ・車椅子、口話、目隠し体験をする。	道徳 花さき山
6月	4時間 ◇見つけよう 人にやさしい田子の町	○バリアフリーを調べることにより、障害を有する人々の不便さを補うための施設・設備があることに気付く。	・障害を持つ人の生活の様子を実際に聞く。 ・地域の中にあるバリアフリーを探す。 □市民センター □田子郵便局 □スーパーマーケット	道徳 にじ 道徳 ヤゴをすくいたい
7月	15時間 ◇目が不自由な方を招いて 4時間	○目の不自由な方の話を聞き、生活の様子や、手助けの方法を知る。	・生活の様子や困っていることなどの話を聞く。 ・盲導犬とふれあう	道徳 とべないホタル 道徳 病気の人を助けたい
9月	6時間 ◆夏休みの課題として、いろいろな場所でのバリアフリーを調べる。 ◇バリアフリー探検隊発表会	○友達の発表から、いろいろなバリアフリーがあることを知る。	・夏休みに調べたバリアフリーを発表し合う。	道徳 やさしいなみだ
10月	◆親子で手話	PTA行事		
11月	◇ひまわり学級との交流 ◆学芸会での発表 ◇人にやさしいまちをつくろう 10時間	○ひまわり学級の子どもたちと一緒に活動する時間を持ち交流を深める。 ○今までの学習を振り返り、人にやさしい町はどんな町なのかを考える。	・朝自習と朝の会と一緒にし、ふれあう時間をもつ。 ○福祉の視点から、障害を有する人と健常者が共に生活できる町を提案する。	

4 平成13年度カリキュラムの構想

13年度は学年ごとの取組だけでなく、地域の特色を生かした全校的な取組も必要なのではないかという考え方から、学校カリキュラムをA、Bの二つに分けて実施することにした。また、必要に応じて、学年・学級カリキュラムを加えることにした。

◆学校カリキュラムA（学校全体で取り組む）

学校の近くの七北田川ともっとかかわりをもっていきたいと考えた。そこで、全学年が学年ごとの段階を踏んで取り組んでいく活動として、「七北田川から」を設定した。また、児童会行事で

「いちょうまつり」に取り組むための時間を加えた。

◆学校カリキュラムB（学年ごとに取り組む）

従来の学校カリキュラムと同様、学年ごとにカリキュラムを作成して実施していく。

◆学年・学級カリキュラム

学校カリキュラムにとらわれず、柔軟に進めるカリキュラムがあつてもよいのではないかと考え、その年の学年・学級担任の考えで必要に応じて実施できるものとした。学年・学級独自のテーマや個人テーマで追究していく。（卒業研究も含む）

表5 平成13年度の学校・学年・学級カリキュラム案

105～110時間

学校カリキュラムA		20時間程度	学校カリキュラムB 90時間程度			学年・学級カリキュラム
	七北田川から（10時間程度）	いちょうまつり（10時間）	重点	学年テーマ	活動の柱	必要に応じて設定
1年	「七北田川とあそぼう」		学 校			
2年	虫取りをしよう・鮭の稚魚を放流しよう 等		田 子			
3年	「七北田川を知ろう」		街			
4年	七北田川に住む魚や生き物を調べよう・鮭の観察会をしよう	クラスごとの取り組みのための時間	くらし	13年度4～5月 決定		
5年	「七北田川からのメッセージ」		命・人間			
6年	七北田川の現状を調べよう・日本や世界の川の問題を調べよう		世 界			
ひまわり	協力学級で参加		生 活			

III 総合的な学習の時間推進のための工夫

1 行事との関連を意識した学芸会

4年生は、総合的な学習の時間で「人にやさしい町づくり」をテーマに、福祉教育に取り組んだ。学芸会では「やさしさ」をテーマに、子供たちの考えを取り入れた構成で音楽の発表をした。手話を取り入れた歌や、学習の様子の紹介等、それまでの取組の中で気付き考えたことを保護者や地域の方々へ発表する場として学芸会を位置付けた。

2 人材の活用と地域・保護者の協力

人材ボランティア部から保護者や地域に向けて呼びかけをし、人材マップを作成している。

保護者に対しては、毎月各学年の総合的な学習の時間の取組を特集した学校だよりや授業参観・懇談会で活動を紹介している。

学年ごとに必要に応じて学年だより等で呼びかけをするなどして、多数の保護者の協力を得てい

る。また、地域の商店や施設、老人クラブ、ALT、幼稚園、福祉協議会、手話サークル等からも、学校・学年の考えを十分理解してもらいながら、多くの協力を得ている。

IV 実践の中から見えたこと

年度当初に学年の重点を定めテーマを設定し、児童の実態に応じて活動を進めていく学習スタイル（学校カリキュラム）が定着してきたことで、意欲をもって学習に取り組む児童の姿がどの学年にも見えてきた。また、総合的な学習の時間の中で得た力や心が、教科や行事に生かされるようになってきたことが、児童の様子から感じられる。これらは、2年間の取組の大きな成果といえる。

平成13年度に向けてカリキュラムの改善を図ったように、実践の評価に基づいて改善を重ねていきたい。

V 中学校の検討課題と方策

■ 1 課題と課題解決の方策

(1) 教科や特別活動との関連について

① 各教科との関連

総合的な学習の時間において、生徒が自らの課題を自ら考えた方法で解決していくためには、様々な基礎的、基本的な知識や技能が必要になる。例えば、地域の人口についての課題を追究する場合、社会科で学んだ統計等の資料の見方が応用される。情報の収集やまとめの段階では、国語科で学んだインタビューや討論、レポートのまとめ方などが応用される。

このように、教科学習で学んだ知識や技能を応用、発展させてこそ総合的な学習の時間における問題解決が円滑に行われる所以あり、これが表4のような総合的な学習を支える学び方になっていくと考えられる。そのためには、各教科などでその基礎・基本をしっかりと身に付けさせることが求められる。

表4 総合的な学習に必要な、各教科で身に付けさせたい学び方（例）

総合的な学習の学習過程（例）	教科で身に付けさせたい学び方（例）
課題発見	【国語】対話、話し合いの仕方 【社会】生活、文化、社会の観察の仕方 新聞、統計等の資料の見方 【理科】観察や実験から課題を発見する方法 【技術・家庭】コンピュータの使い方 資料の収集の仕方
課題の明確化 課題設定	【数学】数字や図形による処理や表現方法 【理科】観察や実験から規則性を発見する方法 【国語】説明、発表の仕方 【音楽・美術】プレゼンテーションの方法など
課題追究 課題解決	
まとめ 表現	

総合的な学習の時間で重要視される、情報収集、表現、発表などの学習活動をスムーズに展開するためには、その前に育てておきたい学び方（スキル）等について、各教科との関連から洗い出すなど十分に検討しながら、活動計画を作成する必要がある。（P43事例9参照）

総合的な学習の時間の学習内容は、教科の枠を越えるものである。また、グループでの学習や異学年集団による学習など多様な学習形態もとれることから、個々の教科担任では対応しきれない場合もある。したがって、総合的な学習の時間を全校的に効果的に推進するためには、全教職員が担当教科以外の概要についても理解できるようにし、各教科・領域を見わたしながら総合的な学習の時間の活動計画の作成に当たれるようにならねたい。

② 選択教科との関連

中学校において、総合的な学習の時間を何時間実施するかは、選択教科との実施時数の相関によって決まる。生徒の個性に応じて主体的な学習活動を進めることなど、両者には共通点が多い。しかし、選択教科には教科のねらいがあり、目指す方向が違うことをよく認識したい。

例えば、選択家庭で食品について調べ学習を行うことを想定する。総合的な学習の時間においても同様な取組がよく見られる。実際の学習活動については、よく似たものになる可能性がある。ここで留意したいことは、選択家庭では教科の内容の補充・発展を求めることがあるが、総合的な学習の時間では、教科の内容に縛られず、幅広く食品の問題について調べ学習を展開できることである。

③ 学校行事や進路学習との関連

「教育課程への位置付け」で述べたように（P11）、特別活動の目標と総合的な学習の時間のねらいには違いがある。つまり、「集団活動」を通して社会性を育成する特別活動の目標に対して、総合的な学習の時間は、「問題解決能力」を育てることを主なねらいとしている。こうした違いを

十分踏まえた上で、互いの関係付けや関連を図ったり、ねらいや方法を明確にして、総合的な学習の時間の活動として見直し、活動の精選や焦点を絞ったりすることは可能である。

学校行事でも問題解決能力を育てるという視点から検討し、単に活動ありきではなく、行事を通して経験したことが課題づくりにつながるようにして、課題解決的な学習活動を展開すれば、総合的な学習の時間としてふさわしい学習活動になる。

(P43事例9参照)

また、進路学習との関連では、進路学習に関する情報の取得、整理など教師側のねらいをもとにした学習活動と生徒が課題を設定し追究する学習活動などを相互に関連付ける。さらに、道徳とも関連させ、その指導項目から学習内容を取り上げたり、教科で学んだことを応用したりすることにより、総合的な学習として展開することができる。

(P41事例8参照)

そのような検討なしに、「同じ主体的な体験学習、生き方学習」等の共通性のみをとらえ、安易に特別活動を総合的な学習の時間に置き換えるようなことは慎まなければならない。

(2) 学習課題の設定について

① 発達段階と学習課題の設定

総合的な学習の時間で重視されている問題解決的な学習では、課題の設定が大切である。課題意識をもてるような出会いの場面をつくったり、互いに意見を交流したりしながら、生徒にとって追究する価値のある課題をいかに設定できるかが重要である。

中学校三年間で、生徒は心身ともに大きな成長を遂げる。中学一年生はまだ児童期の面影をもち、周囲の事象をありのままに感覚的に受け入れ、グループでの活動を好むなどの特性がみられるが、やがて、青年前期、更に青年中期への変化が起こる。中学生は、自我の目覚めの時期であり、客観的に自分を見つめる自我意識が現れてきて、分析的にとらえたり論理的に思考したりできるよう

なる。

このような発達段階の特性から、学習課題の設定に当たっては、課題の内容だけでなく、個人やグループでの活動などの学習形態に配慮するとともに、探求活動の期間などにも留意したい。

② 学習課題の発見と設定の場面

自分の課題を発見する段階として、以下の三つの段階が考えられる。

- ア 教師等に与えられて自分の課題に気付く
- イ 自分の身の回りから課題に気付く
- ウ 興味・関心等から自ら課題に気付く

前述の発達段階や小学校での実践の積み重ねが不十分な移行期の状況からすると、1学年においては、生徒にとって自ら追究するに値する切実感のある課題を発見するということは難しいかもしれない。そこで、最初はアのような課題の設定から始め、段階的に自ら課題を設定できるように支援を進められることが考えられる。アのような課題の設定においては、共通の課題を投げかける方法と、いくつかの課題から選択させる方法が考えられる。

イの課題設定については、普段の生活やTVのニュース、新聞報道から自ら見つけられる生徒もあるが、難しい生徒もいるだろう。そのような場合には、講演会や体験の場等を設定することにより、それらを通して具体的な課題を意識させるようとする。(P45事例9参照)

自ら課題意識をもてるようになった段階では、これまでの学習の積み重ねなどをふまえ、多様な興味・関心に基づき、ウのような課題に取り組むこともできるようになる。ガイダンスや事前の体験の設定等を工夫すれば、1学年においてもこのような取組が可能である。(P48事例11参照)

③ 課題設定の進め方

課題設定の段階にどのくらい時間をかけるかを検討して、活動計画を作成することが大事である。1学年のうちに、様々な学び方を経験させるため、短期間の多様な学習活動に取り組ませることも想

定できる。一つ一つの追究活動の期間は短くとも、課題設定の場面には、十分時間をかけたい。特に、個々の課題を発見させた後、それをどう広げ、深めさせるかが重要である。気付いたこと、発見したことなどをKJ法やウェビング図等により整理する方法がある。(P49事例11参照)このような方法を積み重ねることが課題設定能力を高めることに効果があったという事例もある。

課題を設定したら即追究という矢継ぎ早の展開ではなく、その課題が「解決可能か」「追究するにふさわしいものか」「資料は入手可能か」「解決の方策はあるか」など、もてる知識や経験から洞察を深めさせたい。

2学年や3学年においては、長期的な課題解決への取組が予想される。長時間追究するに足りる魅力をもつ課題づくりのためには、それなりの知識や経験が必要になることを考慮した上で活動計画を作成したい。

課題発見や課題設定そして学習計画の作成の過程をどのような学習形態で取り組ませるかも検討したい。課題の発見は、個人で取り組ませるが、その妥当性を検討するための意見交換、討論などの段階はグループでの取組にするなど、学習形態の工夫が必要である。

(3) 学習環境の整備について

① 情報収集を支援する環境の整備

図書室の整備については、情報収集の中核としての機能を十分發揮できるようにしたい。具体的な整備の内容は前述の通り(p18参照)であるが、そのほかに調べ学習のスペースを確保することや地域の情報のコーナーを設置する等、資料センターの機能も充実させたい。

図書室を利用するに当たっては、限られた時間内で、全校生徒を対象とすることは物理的に難しいので、以下のように取り組んだ学校もある。

- ・ 参考資料、書籍を理科や社会など学習内容と関連する部屋及び図書室に分散させ、時間差をつくり、学年や学級に割り当てる。

- ・ 資料は原則として貸し出しせず、コピー機を活用し、必要なページのみコピーする。
- ・ コンピュータ室も割り当て、コンピュータ担当教師が指導し、インターネットによる資料収集ができるようにする。

② 情報をまとめる活動を支援する環境整備

調べたことをグラフ化したりビデオに編集できるようにしたり、表計算、表現などの道具として使えるように、生徒にも扱いやすい各種のソフトの整備が望まれる。(P50事例12参照)

また、実験や創作に対応して、理科室や美術室等の特別教室や視聴覚室、余裕教室等を教科の学習以外にも多目的に活用する工夫をしていく。

③ 情報発信、学習のまとめを支える環境整備

総合的な学習の時間の活動計画の作成に当たっては、発表や情報発信の場を位置付けることが大切である。展示、ステージ発表、Webページ作成等においては生徒の個性を生かせるように、メディアを目的に応じて活用できる学習環境の整備が不可欠である。(P50事例12参照)

④ 学校外施設や人材の活用

地域にある施設、官公庁、事業所等については、特にアクセスの時間や方法、費用等について把握しながら協力依頼していくことが大切である。指導上の必要性から生徒が直接連絡を取り、依頼したりすることをあらかじめ了解していただき、理解を得るようにする。

地域の人材、施設等の活用に当たっては、決まりや約束について指導したり、電話による問い合わせや見学の申し込みなどの社会的スキルを身に付けさせたりすることが不可欠である。こうしたスキルの形成のため、判断力やマナーを体得させる時間を検討し、位置付ける必要がある。

■2 中学校におけるカリキュラム作成の事例

以下に、これまで述べてきた中学校におけるカリキュラム作成の検討課題を踏まえ、実践してきた6校の事例を紹介する。

〈事例7〉カリキュラムの開発のための共通理解と校内組織の事例

将監中学校では、道徳や特別活動と関連させながら総合的な学習の時間を試行し現在に至っている。新学習指導要領が示され、総合的な学習の時間を教育課程の中に位置付けられることになり、これまでの取組を再編し直す上で今年度は2000年委員会を設置したが、教務主任が中心的な役割を担い、企画・運営の牽引的役割を果たしてきた。

I 将監中学校の総合的な学習

本校では平成8年度から2年間、「豊かな心を育む教育推進事業実践研究協力校」に指定され、研究に取り組んだ。その内容は、教科・道徳の時間を中心に話し合い活動を活性化させ、特別活動において豊かな体験活動を取り入れるなど教科・領域を越えた総合的な取組で「豊かな心」の育成を目指したものであった。

新学習指導要領が示され、総合的な学習の時間の導入にあたり、これまでの取組を生かしながら計画・実践を行った。

II カリキュラム開発に向けて

1 生徒の実態の把握のために

平成8・9年度の研究指定の際に生徒の実態把握のために①道徳性検査の実施②保護者へのアンケート③職員の話し合いの三つを行った。そのときの結果を基に新たに職員間で話し合いをもち、実態の変化と育てたい力を絞り込んでいるところである。

2 平成12年度の取組

総合的な学習の時間の導入に当たり大きな役割を果たしたのは教務主任である。本校ではまず枠組みの確保という観点から教育課程の大枠を決めた。職員会議の度に教科の教員数、校務分掌の負担、施設設備面、その他の要因を考慮しながら可能と考えられる教育課程案が教務主任から提案され、話し合いがもたれた。話し合いの過程では、教師の持ち時数や校務分掌を調整する必要に迫られた。

III 校内組織とその運用

1 2000年委員会の組織

教職員の創意を教育課程に反映していくために、本校では2000年委員会を組織した。この委員

会は、新教育課程の編成や総合的な学習を展開するための話し合いを行う特別委員会である。

2000年委員会	研究推進委員会
校長・教頭・教務主任・研究主任	道徳主任・特活主任・進路指導主任
生徒会担当	

+
1学年主任・2学年主任・3学年主任

2 2000年委員会の活動

2000年委員会の役割は、新教育課程の編成と運営である。そのため、研究推進委員会を母体としながら各学年主任を委員に加えた。縦割りの学年部と学年横断的な教科、道徳、特活部会等との連携を密接なものにすることを目指した。

3 学年部と2000年委員会の関連

2000年委員会では、「目指す生徒像」を見直す作業を始めた。新たな生徒像の構築こそ新たな教育の柱となるからである。平行して各学年部では、これまでの取組を基に各行事のねらいを見直し、具体的な計画を作成している。2つの組織で話し合われたことの連絡調整を図りながら、カリキュラムが開発され実践も始まった。現在2学年では「国際理解教育」を、1学年では啓発的な体験活動を数多く取り入れた「生き方」の探究を柱として実践中である。

IV 実践の中から見えてきたこと

(1) 推進組織を確立することで全体の目指す方向性や教職員の思いを確認することができ、課題も把握できたと思われる。

(2) 総合的な学習の時間は学年で学習させる場面が多いため、学年内での企画・運営組織の確立が不可欠だということを改めて感じた。

<事例8>進路学習と関連を図ったカリキュラム作成の事例

広瀬中学校では、平成11年度から全校体制で総合的な学習の時間に取り組んでおり、今年度は固定された時間割にも総合的な学習の時間を設定するとともに短期集中型の時間割との併用で実施した。特に、第1学年では、特別活動の中の進路学習と総合的な学習の時間の関連を図る方向で計画を作成して実践を行い、次年度のカリキュラム作成に備えた。

I 平成11年度の取組

仙台市立広瀬中学校では、昨年度、総合的な学習の時間の試行として、短期集中まとめ取りの時間割を臨時に編成し、全校体制（全学年）で総合的な学習の時間を19時間設定し、実践した。1学年は国際理解、2学年は野外活動に関連させた内容であり、3学年は生徒の興味・関心に応じた分野について生徒に課題を設定させて取り組ませた。発表会は、全校一斉に行った。

II 平成12年度の実践

1 今年度の基本方針

本年度は、前年度の反省をふまえて、本校の実態に合った総合的な学習の時間の内容を更に模索するとともに、移行期間における新学習指導要領の時間設定にできるだけ近づけて、総合的な学習の時間を実施して、その内容を検討していくことを考えた。そのため、時間割を短期集中まとめどりに加えて総合的な学習の時間を週固定で設定することにした。具体的には、1学年では通年で週2時間、2学年では後期から隔週で2時間設定した。3学年については、短期集中での時間設定のみとした。

また、今年度は各学年が以下のような内容で総合的な学習の時間との関連の可能性や内容の在り方について検討した。

2 時間割との関連でどのように進めたか

- (1) 時間割の中に1学年は、通年、週2時間設定し、学び方としての学習を進めた。
- (2) すべての学年で短期集中まとめどり27時間を夏休みをはさみ、3週間設定した。
- ・主に午後の2時間に集中して設定したが、職場訪問の際は特別活動の時間を全日設定した。

・文化祭の時期に4時間の発表会を設定した。

学年ごと発表会を持ち、学年代表が文化祭でステージ発表を行い、保護者が参観できるようにした。

表1 各学年で検討した題材と実施時期

学年	内容	実施時期	時数	合計
1	校外学習・平泉 職業調べ 広瀬の地域調べ 野外活動・大島	4～5月 7～9月 10～12月 1～3月	14 29 20 20	83
	上級学校調べ 修学旅行・東京	7～9月 10～12月	27 20	47
	福祉（私たちにできること）	7～9月	27	27

各学年での検討を進める一方、学校全体での連絡調整や資料収集などが必要であることから、表2のように教師の組織をつくり、運営をしていった。

3 総合学習委員会について

教育課程検討委員会の下部組織として、総合学習委員会を編成した。学年をまたがって全校体制で内容調整ができる、しかも、実際の活動では、学年担当の教師が中心となって企画運営ができるという利点がある。

表2 実践及び検討のための組織

総合学習委員会	総合学習内容検討部	学校行事検討部	道徳特活関連検討部	評価資料作成部	地域人材活用部
	内容学習形態 教師体制 校外学習の持ち方	学校行事時間割	関連内容の検討	評価方法 資料作成	地域施設や人材調査 人材リスト作成
各部会	1学年担当者	1学年担当者	1学年担当者	1学年担当者	1学年担当者
	2学年担当者	2学年担当者	2学年担当者	2学年担当者	2学年担当者
	3学年担当者	3学年担当者	3学年担当者	3学年担当者	3学年担当者
企画委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム作成の提案・作成・審議 ・各部会との連絡・調整 ・職員会議への提案事項の審議 				

*横方向の部会（各学年部）は実際的な企画運営を行う。
縦方向の部会は各学年部の代表を含み、学校全体にかかる内容を話し合う。

企画委員会に各部会のチーフを構成員として組織し、総合的な学習の時間を実施していくに当たっての企画調整を行った。また、各学年の実践を本校の総合的な学習の時間のカリキュラムとして適した内容なのかを企画委員会等で検討、修正し、来年度以降の総合的な学習の時間としてカリキュラム化する役割ももたせた。

III 進路学習との関連による総合的な学習の時間

1 進路指導と連携させた総合的な学習の時間

内容を検討していく中で、総合的な学習の時間の題材の一つに、特別活動の中の進路学習を総合的な学習の時間との関連で計画し、実践を通して総合的な学習の時間のカリキュラムを作成する方針と方向性を探ることにした。

学習の中核に職場訪問を据えた進路学習を計画することで、生徒が生き方の問題を自分自身の問題として受け止め、その学習を進めていく中で、よりよく問題解決を図る能力や態度を育成したり、課題を自ら設定し、主体的に探究活動に取り組む資質を育てられるのではないかと考えた。

表3 進路学習との関連による総合的な学習の時間

内 容	時数
特別活動として 進路（身近な人の職業） 職業分類 身近な人へのインタビュー 班での発表 訪問したい職種の希望調査 興味関心ごとのグループ分け	6
総合的な学習の時間として 課題解決学習の進め方 学習計画づくり 職場訪問の計画を自分で作成 職業や職場に関連した事項の調査 依頼文・質問文の作成 訪問の感想・礼状作成 自己評価	10
特別活動として 職場訪問	6
総合的な学習の時間として まとめ 発表 相互評価 自己評価	12

また、従来行っていた特別活動や道徳とどんな関連性があるのかを意識して、活動計画を作成した。今後、生徒の評価や題材ごとの内容や時数の記録をもとに、本年度行った総合的な学習の時間の題材のねらいを見直す予定である。

今年度の1学年の職業調べは、生徒が直面するであろう生き方や進路について、総合的に考えさせる課題として位置付け、自ら学び、主体的に探究活動に取り組む能力を育てることを目指した。将来の自分の生き方を進路学習と結びつけながら、職業の多様さや職業の実像を理解させ、生徒の身近にいる人々（地域）の職業を調べる課題解決的学習を行った。

次に、職場訪問に入る前に訪問先の選択については、生徒から訪問してみたい職種をあげさせた。その職種での訪問先を探すために保護者からの協力をいただきながら、学年所属教師が中心となって、受け入れ先を探した。訪問先に教師が電話と手紙を出し先方の了解を得てから訪問先リストを生徒に示した。その結果、生徒は希望する職種に訪問することができた。

表4 主な職場訪問場所

主な職場訪問場所	班の人数
児童館	5
警察犬訓練所	5
放送局	6
消防署	5
印刷会社	7
ディケアセンター	6
旅行会社	6
自動車部品販売店	6
保育所	6
幼稚園	5
仙台北警察署	5
整形外科	4
苦竹陸上自衛隊	4
宮城県林業公社	6
スポーツ団体	5
ペットショップ	5
動物病院	7
仙台フィル管弦楽団	6
宮城学校給食センター	4
専門学校	4
八木山動物園	5
新聞社	5
北税務署	3
東日本旅客鉄道仙台駅	3
生花店	3
フランス料理店	4
など	

昨年度の反省から訪問先に失礼にならないよう連絡調整の時間を十分にとり、電話で依頼し了解を取った。その後生徒が、手紙で確認した。

IV 学年テーマ設定に当たっての教師の役割

1 1学年のテーマは学年会で設定

- (1) 総合的な学習のねらいや配慮事項から、各学年ごと課題を設定し、教科・領域と関連したもの実践しながら検討を加えた。課題設定に当たっては、生徒の興味・関心に応じたものに加え、学年所属の教師がテーマを設定した。
- (2) 定期の総合的な学習の時間の内容についても学年所属の教師が企画し、基礎的な力（調べ方など）を身に付けさせていった。

2 指導体制

- (1) 学年所属の教師が単位時間を受けもった。
- (2) 教科担任が輪番で教室を受けもったり、教科担任が計画した指導案で、学級担任が授業を行ったり、課題設定や生徒のグループに応じて弾力的に、合科的な教師の組み合わせでも対応した。
- (3) コンピュータ室や図書室の利用の際に、学年担当教師を配置するなどの協力体制で指導に当たった。

V 総合的な学習の時間の評価

総合学習委員会の評価・資料作成部で検討しながら以下のように進めていった。

1 ポートフォリオ評価

ワークシート、レポート、自己評価、相互評価のコメント、教師のコメントなどをポートフォリオに組み込んで蓄積するようにした。

2 発表時における相互評価

発表会の時に、聴講生徒が相互評価カードで発表グループを評価し、発表グループは友達か

らの評価カードを参考にしながら自己評価を行った。

3 校外学習における評価

行動評価（自己評価）に加えて、職場訪問等では、職場の方にも評価していただいた。

VI 実践の中から見えたこと

(1) 1学年については、新学習指導要領の授業時数に近づけることを目標に、総合的な学習の時間を通年、時間割を設定して行った。その結果時間が定期的に確保できるため、時間に余裕があり、見通しを持った活動や、課題を立ち止まって設定し直したりする深まりのある学習活動ができた。また、職場訪問等の連絡調整については、先方に失礼のないように、時間をかけて確認と調整ができた。

(2) 教育課程を検討していくなかで、総合的な学習の時間のねらいを見定めつつ教科・領域との連携の可能性を探っていった。具体的には1学年の進路指導において連携の方向で試みた。その結果、3学年を見通した進路指導の視点から進路指導主事の役割や進路指導計画との関連性も大切であることが見えてきた。

(3) テーマを設定し、調べ、まとめ、発表するという学習形式では、課題をいかに設定するか、課題意識をいかに持続させるか、体験的な学習をどのように取り入れるか、などによって学習内容の質が左右されるので、教師は、生徒一人一人の学習状況をきちんと把握して、総合的な学習の時間の活動計画を作成していく必要がある。

そのためにも、生徒の活動に対応した幅広い支援や助言を行えるような、教師側の準備や体制づくりと評価の活用が重要であることが見えてきた。

〈事例9〉学校行事との関連を図ったカリキュラム作成の事例

田子中学校では生徒と教師による実態調査に基づき、目指す生徒像を明らかにした。活動内容については、前期は学校行事を見直し学び方を中心に、後期は進路学習を見直し生き方を中心に据え、移行期における活動プログラムのもとに実践することにした。また、活動過程を明確にし、教科指導との関連を図ることで生徒の課題意識を高める工夫をした。

I 移行期における活動プログラム

本校では、平成11年度からどの生徒にも「意欲・学び方・生き方」をはぐくむことを目指して、総合的な学習の時間プロジェクト会議を設置し、総合的な学習の時間を学校づくりの一環として、組織的に研究と実践を推進する体制づくりを行った。昨年度は「移行期における活動プログラム」(p.16参照)を作成するとともに、問題解決的な学習を中心として教科指導の改善や行事の見直しを行った。

移行期における活動プログラムの2年目となる平成12年度は、全学年で旅行的・集団宿泊的行事(以下、旅行的行事と略す)の見直しを図り、総合的な学習の時間としての要素も取り入れた活動計画を作成し、実践を行いながら、よりよいカリキュラム作成を目指すことにした。

II 平成12年度の実践

1 総合的な学習の時間で目指す生徒像

昨年度、生徒と教師を対象にした実態調査から本校の生徒の改善点として「問題を発見する力」「情報収集力」「分かりやすく伝える力」が挙げられた。

そこで本校では、総合的な学習の時間で目指す生徒像を以下のように考えた。

- ・教科で学んだ学び方を生かしながら、問題を発見し、情報を収集し、分かりやすく伝える力が身についている生徒
- ・工夫改善しながら粘り強く頑張る生徒
- ・自己の生き方について、よく考えようとする生徒

2 身に付けさせたい力

総合的な学習の時間の活動を通して本校の生徒に身に付けさせたい力として「資質能力」「学び方・考え方」「態度」「生き方」の四つの観点から考え、分析した。また各々の力については、3年間の見通しをもって、じっくり育成しようと考えた。

表1 総合的な学習の時間で身に付けさせたい力

	第1学年 (第一段階)	第2学年 (第二段階)	第3学年 (第三段階)
資質能力	与えられた課題をよりよく解決する能力	→	課題設定、解決能力、自己選択能力、知識・能力の応用、発展能力
学び方考え方	学び方の基本情報収集・活用、まとめ方、討論の仕方、発表力	→	学び方の応用、資料に対する批判力
態度	学習への興味・関心・意欲の喚起、学習意欲の持続	→	主体的な態度、創造的な態度
生き方	自己の生き方への興味・関心の喚起	→	自己概念の確立、生き方への自覚

3 総合的な学習の時間のカリキュラム

本校では総合的な活動の時間のカリキュラムを現行の旅行的行事と進路学習を中心に表2のように考えた。ここでは年間を前期・後期に分け、学期の特性を考え、目標と活動計画を作成した。

(1) 学び方を学ぶ前期(旅行的行事を中心に)

前期は新しいメンバーが発足する時である。そこで学級づくりをベースとして、活動の中心を旅行的行事とした。ここでは総合的な学習の時間についての意義や目標の理解を第一義と考えた。また学び方については、教科指導との関連を密に図ることで、生徒は学び方の基本を学び、主体的な学習を育成することができるものと考えた。なお、旅行的行事の中で、総合的な学習の時間の要素を

取り入れる視点は4で詳しく述べる。

(2) 生き方を追究する後期（進路学習を中心に）

後期は、前期での学級づくりの発展として、自己を見つめる活動としての進路学習を中心とし、自己の生き方について考える時期とする。すなわち、学級集団や学年集団の中で、他者と自己との関係を見つめさせ、自己の在り方や生き方を追究させたいと考えた。現行の進路学習の啓発的な体験の場としての職場訪問や高校訪問の内容を再検討し、総合的な学習の時間との関連を図った。

学び方については、前期で習得したものをさらに深めることで、知の総合化を一層進めることができるように計画としてのカリキュラムを作成した。

表2 総合的な学習の時間のカリキュラム

	前期	後期		
	学び方を学ぶ	生き方を追究する		
一 学 年	校外学習 体験的な学習 社会性の育成 学び方	各教科 基本的事項 学び方	職場訪問 生き方の考察	地域と環境 体験的な学習 他者と自己との関係の考察
二 学 年	野外活動 体験的な学習 社会性の育成 学び方	各教科 基本的事項 学び方	高校訪問 生き方の考察	地域と福祉 体験的な学習 他者と自己との関係の考察
三 学 年	修学旅行 体験的な学習 社会性の育成 学び方	各教科 基本的事項 学び方	生き方の 追究 生き方の考察	国際化 体験的な学習 他者と自己との関係の考察
関 連	道徳特活 学級づくりを中心	教科 問題解決的な 学習 基礎基本の徹底 学び方	教科・道徳・特活 学級生活の充実と発展 問題解決的な学習の深化 生き方の考察	

(3) 3年間の積み重ね

表2に従い、3年間の発展性や発達課題に基づき、意図的・計画的・継続的に積み重ねていく中で、本校が目指す生徒の育成が図られるものと考える。

(4) 卷紙式時間割

総合的な学習の時間については、内容に応じ、まとめどりの方がよい場合（例：行事）と毎週時間が確保されたほうがよい場合（例：進路学習）

がある。そこで本校では「卷紙式時間割」を導入し、臨機応変に対応できるようにしている。

4 旅行的行事を総合的な学習と関連させる際の視点

(1) 旅行的行事の見直し

本校では、特別活動の行事を中心に生徒の主体性を育成してきた。しかし非常に限られた時間の活動であるために、活動時間の設定などに無理があった。特に事前や事後の活動の時間が十分にとれず、生徒の課題意識があまり高まらない段階で行事に取り組むことが多く、その結果、思うような成果が得られにくいという傾向にあった。教師間でも改善したいという要求が多かった。

そこで前期の大きな行事である旅行的行事の見直しを図り、総合的な学習の時間と関連させてことで、旅行的行事の事前・事後の活動の時間を十分に確保しようとした。特に、事前の活動での時間を十分にとり、事前研究など綿密に行い、自分の課題を設定することで、生徒の課題意識を十分に高めようとした。明確な課題意識を持ち、現地で課題解決に当たれば、満足感も大きい。また、事後に現地で学んだことをまとめ、全員の前で発表する場を設けることで、自分の考えをまとめるだけでなく他の人の考えを聞くことで自分の考えをさらに深めることができる。そのような一連の活動を通して、生徒は成就感を味わうことができる。その結果、旅行的行事そのものへの取組も意欲的になるとえた。すなわち、予算も日程も確保されている旅行的行事を総合的な学習と関連させてことで、特別活動としての旅行的行事をより充実したものにできるという効果をねらった。

(2) 旅行的行事と総合的な学習の時間と関連させるための要素

総合的な学習の時間のねらいから、以下三つの要素を旅行的行事の中に取り入れることで、総合的な学習の時間と関連することができる。

- ①各自が課題を設定し、調べ活動を行うこと
- ②課題解決のための現地調査を行うこと
- ③自己の生き方の探究を行うこと

特に①が成立するためには、追究しがいのある課題を設定できる訪問先での活動内容の充実が必要である。例えば従来多くの学校の修学旅行で行われてきた「自主研修」という形態の学習だけでは、なかなか追究しがいのある課題が設定されにくいのではないかと考えた。

そこで本校では、生徒が課題を設定しやすいように学年テーマを設け、そこから旅行的行事の訪問先を考えることにした。

今年度の第1学年の校外学習のテーマは「環境問題・省エネルギー」と「身近な地域の理解」として、仙台新港と多賀城市を訪問することにした。第2学年の野外活動のテーマとしては「他県の課題を探る」ということで福島県を訪問し、「会津地方の現状と課題」を探ることにした。第3学年の修学旅行のテーマは「国際協力」とし、東京都のN G Oを訪問することを活動の中心に据えた。

(3) 活動過程の工夫

生徒の課題意識を高めることが、総合的な学習の時間を成功させるポイントであると考える。そこで、生徒の課題意識を高める工夫として、本校では活動過程を図1のように考え、事前・事中・事後の各過程でのねらいの明確にした活動計画を作成した。

事前：事前研究を十分に行いながら、各自の課題を設定する。その際、教科指導との関連を図ることで、事前研究の内容面での深まりや学び方を学ぶことができる。

事中：課題解決に向けて聞き取り調査や観察などを行い、自分の考えをもつ。

事後：現地調査のまとめや発表を行う。その過程で、自分の考えを深め「自分として何ができるのか」考え、実践化まで至らせたい。また自己評価や相互評価をする中で、「自分はこれだけ成長したんだ」という自信をもたせる。この自信が次の活動への意欲になると考える。

この活動過程を生徒も教師も意識し、意図的に活動することで活動全体の活性化が可能となる。

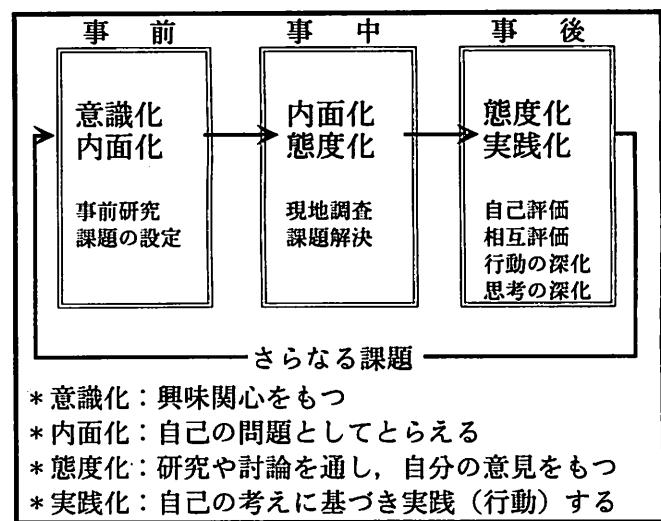


図1 活動過程の工夫

(4) 教科学習との関連

各活動過程において、特に事前の活動では教科学習との関連を図ることで事前研究の内容や調べ方に深まりが期待できる。また教科で学んだ内容や方法を体験の場で活用したり応用したりすることで、知の総合化が図られ、生徒は学ぶ楽しみを得る。その喜びが、次の教科や総合的な学習の時間での主体的な活動への意欲につながるものと考える。教科との関連を図ることで、教科学習も総合的な学習の時間も活性化しようと考えた。

III 実践の概要

今年度は、従前、特別活動として行ってきた旅行的行事の中に、総合的な学習の時間の視点を取り入れ、全学年で実施した。以下、第1学年で実施した校外学習について説明する。

1 環境問題や地域調査の方法を学ぶ校外学習

昨年までの山寺の見学を中心とした校外学習を中止し、社会科と理科との関連を図りながら環境問題や地域調査の方法について学習することを中心に据えた、新しい形の校外学習を実施した。

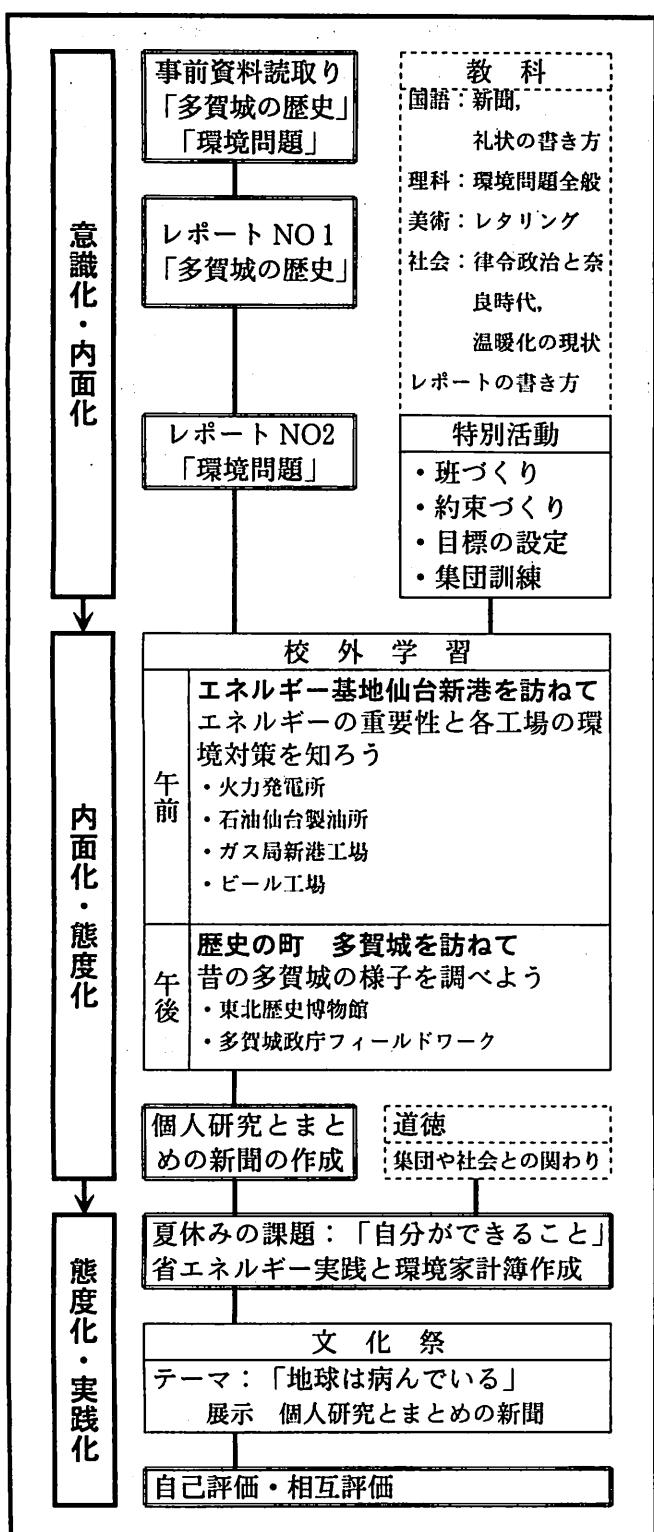


図2 総合的な学習の時間と関連させた校外学習

...総合的な学習の時間

2 総合的な学習の時間と関連させた校外学習

- (1) 対象 第1学年
- (2) 日時 平成12年5月24日
- (3) 方面 仙台新港と多賀城市
- (4) ねらい (総合的な学習の時間のみ)
 - ①エネルギー基地を訪問することで、エネルギー問題や環境についての興味・関心を高める。
 - ②多賀城市的史蹟を訪問することで、身近な地域についての関心を高める。
 - ③事前研究の仕方やまとめ方、発表の方法など調べ方についての基礎を身に付ける。
- (5) 課題設定
 - ・個人と班で課題を設定させた。
- (6) まとめ方と発表の仕方
 - ・個人研究のまとめと班新聞の作成
 - ・文化祭での展示による発表と代表者による口頭発表
- (7) 総時数 24時間 (総合的な学習の時間のみ)

IV 実践の中から見えてきたこと

- (1) 生徒の自己評価からは、事前学習やまとめ方の方法など総合的な学習の学び方が少しずつ身に付いてきた様子が分かる。
- (2) 教師は、活動計画に基づく実際の活動に取り組む過程で、総合的な学習の時間の意義についての理解が深まり、協働の精神が高まった。
- (3) 生徒の主体的な学びを育成するという、総合的な学習の時間の目標を十分に踏まえた活動内容の開発がさらに必要であろう。
- (4) 特別活動と総合的な学習の時間とを関連させてカリキュラムを作成した。相互の関連の在り方について一層明確にすることが必要である。
- (5) 活動をより効果的に実施できる時間割の工夫が必要である。

<事例10>特色ある教育活動を生かしたカリキュラムの開発の事例

折立中学校では、これまで、地域の協力を得ながら推進してきた国際理解教育や福祉教育など学校的特色ある取組を生かしながら総合的な学習の時間のカリキュラムを構想してきた。

特色ある教育活動を通して生徒に培われた「交流やボランティアの精神」を、総合的な学習の時間の趣旨やねらいに即して一層充実させることや、地域の特性を生かした実践の在り方を教職員の共通理解を図りながら模索している。

I 特色ある取り組みの概要

1 国際理解教育

数年前から地域の特性により、中国帰国子女の適応指導を始めた。それと同時に、全校生徒との相互啓発指導を進めてきた結果、自然な交流が深まってきた。また、中国帰国者の講演会を実施したり、留学生を招いて交流を深める中で、生徒自身が、世界の文化や生活習慣等に興味を広げ、自ら課題を見つけ、調べ、体験する学習に発展した。

2 福祉教育

ボランティア推進協力校の指定を受けたことを契機に、「折中ボランティア協力隊」が組織された。「できるときに、できることを、できるだけ行う」を活動方針とする任意の会員登録からなる組織で、街頭募金や地域の児童館との連携による活動等を定期的に行ってきる結果、生徒にはボランティア精神がかなり浸透してきた。

II 特色ある取組を総合的な学習に生かすための共通理解

1 総合的な学習の時間のねらいから

(1) 本校の実態に応じ、地域の協力を得ながら、地道に取り組んできた特色ある教育活動であり、総合的な学習の時間として、創意工夫できる。

(2) 平成11年度までの国際理解教育において、課題設定や課題の追究、発表などの問題解決的な学習の一連の学習過程が試行されている。

2 総合的な学習の時間の基本方針

これまでの特色ある取組を生かし、実施、改善しながらカリキュラムの開発を進めることにした。これまで取り組んできた「国際理解教育」「福祉

教育」に共通する「共生」「共存」から「地域」との「共生」「共存」に視点を当てることにした。

1学年は、まず身近な「地域」に密着した学習課題を探る。2学年は、これまでの学習経験を発展させ、「国際理解教育」から学習課題を探る。3学年は、これまで学年で力を入れて取り組んできた「福祉」から学習課題を探る。

II 3学年における取組

これまで行われてきたキャップハンディなど障害の類似体験ではなく、障害者と同じ立場で喜びを共有できることはないかという願いから、地域の体育指導員の協力を得ながらシッティングバレーに取り組み始めた。生徒は、ゲームを体験することを通して、特別ルールの意義を理解し、実際に障害者と交流できることに期待感をもつようになった。

今後、地域の協力を得ながら、障害者との活動を具体化していく予定である。この学習活動を通して、障害のあるなしにかかわらず共に生きるというノーマリゼーションの理念形成の基礎が培われたり、これまでのボランティア活動を発展させた取組となることが期待できる。

III 実践の中から見えてきたこと

「地域」との「共生」「共存」に視点を当てた総合的な学習の時間を構想し、実践する中で、地域の保育所や老人などの新たな課題が見えてきた。

今後は、学習活動を通して、生徒とともにそれらの課題を掘り起こしながら、地域の特性を生かした総合的な学習の時間を展開していきたい。

<事例 1 1 >生徒の興味・関心を生かした学習課題の設定の事例

宮城野中学校では、平成11年度から課題解決的な学習「一人一研究」に取り組んでいる。特に今年度は、生徒の興味・関心を生かした課題設定に重点を置いて実践してきた。1学年は、学級担任が中心に指導を行い、2学年は、研究内容によるコースごとに、関連する教科担任が指導を担当し、生徒が追究する価値のある課題を設定できるようにした。

I 総合的な学習の時間の基本方針

平成11年度に仙台市教育委員会より「特色ある学校づくり推進指定校」の指定を受け、当校の目指す「生き生きと主体的に学ぶ学習指導の展開」「生き方を踏まえた進路指導の推進」を具現化するため、総合的な学習の時間に取り組んできた。

平成12年度は、前年度の成果を踏まえ総合的な学習の時間を全校研究とし、各学年部を中心として実践してきた。「試行しながら具体化へ」を基本として、4月から実践研究を進めている。各学年35時間程度の総合的な学習の時間を設定し、「自己の可能性を求めて」をテーマに『自己の力に気付き、高める一人一研究』及び『人間性豊かな生き方を学ぶ体験学習』の2本柱で実践している。

研究推進委員会を中心に総合的な学習の時間のねらいを理解し、育てたい力、重視したい学習活動を明らかにしたうえで研究を進め、新学習指導要領が求める「特色ある学校づくり」の基礎を築くための実践を重ねている。

II 「一人一研究」の取組

1 ねらい

(1) 生徒の興味・関心を基本に「自分で課題を見付け、自分で解決する方法を追求して、自分で課題を解決していく力」を付けさせるために、「一人一研究」に取り組ませる。

(2) 生徒の意欲を大切にしながら、主体的な学習を促し、課題解決能力を高めることにより、自己の力に気付かせる。

(3) 今年度は、「課題づくり」に力を入れ、自分の興味・関心のあるものを課題に作り上げていく過程を学ばせ、課題の作り方を身に付けさせる。

2 「一人一研究」の基本的な考え方

(1) 生徒の実態、学校の実態を考慮したうえで、教科・領域を越えた総合的・横断的学習を行う。

(2) 全体と学年において、ねらいや方法についてガイダンス日を設け、生徒に研究に対する意欲付けを行う。

(3) 「一人一研究（一作品でもよい）」が原則だが、4人以下のグループ研究も認める。

(4) 教師は〔課題設定→課題追究→課題解決→まとめ→発表〕の一連の流れの中で、指導・支援を行う。指導は学年ごととして、1学年は学級単位で学級担任が、2学年はコース別単位でコース担当者が中心となって行う。どちらがより教育的な効果があるか実践によって明らかにする。

(5) 今年度は特に「課題づくり」を重視し、自分の興味・関心のある課題を作らせて、積極的かつ主体的に取り組ませる。

(6) 配布した資料や学習記録カードなども含めて必要なものはすべてファイリングさせ、評価の助けとする。

3 「一人一研究」の進め方

- | | |
|----------------------|--------|
| (1) ガイダンス | (1時間) |
| (2) 課題づくり | (4時間) |
| (3) 課題追究のための計画 | (3時間) |
| (4) 課題追究→課題解決→まとめ | (夏休み中) |
| (5) 発表準備 | (4時間) |
| (6) 発表リハーサル | (2時間) |
| (7) 発表 宮城野中学校「文化発表会」 | |
| (8) 振り返り | (2時間) |

II 「課題づくり」について

1 指導における工夫

(1) 生徒の興味・関心のあるもの、好きなもの、自分でやりたいもの、今まで温めてきたものなど、意欲をもって最後まで取り組める課題を設定するために、「ウェビング図」作成を通して課題の明確化を図り、価値ある課題へと導く。

(2) 1学年では、課題意識をもてる出会いの場として、「市内自主研修」(一日)を実施し、文化施設の体験学習により、普段とは違う見方から生徒の視野を広げることができるように工夫しながら、「一人一研究」の意識付けを行った。それに基づき、自分の興味・関心から広がったアイデアを「ウェビング図」に作成させることで整理させ、課題の明確化を図った。

生徒の課題については、教科の学習と関連したり発展したものや新聞の記事から発見したこと、趣味に関するもの、ものづくり等多岐にわたる内容になった。

また、課題づくりの過程においては自由に教室等を移動できる時間を設定して、専門的な内容について教科の指導者にも質問できるようにした。

(3) 2学年は、課題づくりまでを学級担任が行い、課題の確認や研究の計画・追究の段階はコース別単位でコース担当者が中心に行った。その際に、1学年で取り組んだ課題との関連性が途切れないように配慮したり、教師の得意分野を生かせるようにした。

課題については、「自然」「人文」「スポーツ科学」「芸術」等に集約し、それぞれ1~3コースを設定した。

生徒一人一人の課題を明確にし、個々に設定した課題を追究に値する課題とするために、個別に相談指導を行った。個別の相談に当たっては、生徒の興味・関心やその課題意識の程度を把握するとともに、よりよく課題解決するための手段・方法の見通しをもっているかなどを確認しながら助言、援助を行った。

(3) 課題づくりを通して、課題設定能力をはぐくみながら、新聞、統計等の資料の見方や観察、実験の結果から課題を発見する方法など、主体的に学習していくための基礎的な学び方(スキル)を身に付けることができるようとした。

2 課題

(1) 「ウェビング図」の作成などを通して、課題づくりの指導を重点的に行ったが、生徒の個人差が大きく、個別指導を必要とする生徒が多い。各教科等とより一層の関連を図ることや指導方法の工夫が課題になる。

活動計画作成においては、学びの時間のゆとりも重要である。また、学習計画を立て、課題を追究する場面から、まとめや発表の仕方までの見通しがもてるよう、活動計画を工夫する必要がある。

(2) 指導体制について、学級担任の指導を中心とした1学年では、生徒の掌握や指導がしやすく、生徒にも安心感をもって取り組めるよさがあるが、反面、専門的な分野に対する指導が十分にできないことが問題になった。

コース担当者の指導による2学年では、教科と関連したコースで指導しやすく、内容的にも深めることができた。しかし、生徒のコース分類と担当者の割当が難しかった。また、いずれの場合にも、個別指導が必要になってくるが、限られた教師の人数で行うには、その時間を充分に確保することが難しかった。

III 実践の中から見えてきたこと

今年度は、学年ごとの発達段階を見据えながら課題づくりに力を入れて実践してきた。実践の結果、課題意識の個人差や課題決定までの進度の違いなどから、個別の指導が必要となる場面が多く見られた。生徒が活動期間を見通して、課題づくりに取り組めるようにするために、ガイダンスや個別相談などの一層の工夫が望まれる。

<事例12> 調べ学習や発表活動を充実させる学習環境整備の事例

寺岡中学校では、平成11年度より、学年ごとのねらいと系統性から総合的な学習の時間のカリキュラムの開発を進めてきた。それとともに、先進的ネットの研究指定校として取り組んできた成果を生かし、総合的な学習の時間の調べ学習や発表活動を充実させるために、メディアを有効に活用できる学習環境の整備に積極的に取り組んでいる。

I 総合的な学習の時間の基本方針

これまでの教育活動を見直し、実践しながら、総合的な学習の時間のカリキュラムを開発していくが、生徒の興味・関心に基づいたテーマによる学習内容も開発していく。課題を追究するなどの過程で、これまでの情報教育の研究成果を生かし、調べ学習や表現・発表の学習活動を充実させるための学習環境の整備に努める。学年ごとの発達段階をふまえ、カリキュラムを作成する。2学年では、平成11年度からの3年間を見通した以下のようなカリキュラムの構想に基づき、実践している。

1学年（11年度）	2学年（12年度）	2学年（13年度）
校外学習と関連させ、生徒自らが課題を設定し、調べたり、調べた結果をまとめなど、総合的な学習の学び方を身に付ける。	前期は、野外活動と関連させ取材、発表学習など、コミュニケーションを大切して課題を追究する。 後期は、現代的課題をテーマに、個々の興味・関心に基づく課題を追究する。	修学旅行と関連させ、将来取り組むべき課題や我が国が大切にしてきた伝統などから、個の課題を設定する。個々の課題の追究や旅行先での体験等により、「生き方」を学ぶ。

II 調べ学習や発表活動を充実させるメディア等の環境整備

- (1) 衛星回線による高速なインターネット接続が可能になり、すべての端末から必要な情報の検索・収集ができるようになった。
- (2) 調べ学習をする際のメディアとして、インターネットのほかに、CD-ROM版の百科事典を端末分整備し、メディアの特性に応じた活用ができるようにした。
- (3) 生徒が使えるプレゼンテーションソフトやWebページ作成ソフトウェアを導入し、表現や発表、発信に活用できるようにした。

III 発表会の実際（2学年の例）

<平成11年度> 1学年では、校外学習で学んだ学習内容を発表会で生かすことにより、総合的な学習の時間として「生きる力」をはぐくむことをねらいとした。事前にインターネットで情報を収集したり、活動後は、班で何回も話合いを持ち、発表内容をまとめた。その後、発表会を実施し、保護者にも公開した。

プレゼンテーションの作成が生徒では難しいため、教師が行なうなど、総合的な学習の時間の趣旨からみると課題となることもあった。

<平成12年度> 野外活動と関連させ、テーマ設定に十分時間をかけるとともに、発表方法まで見通した活動計画を立てさせた。その後の調査活動では、インターネットや図書館を活用したり、電話で訪問先に連絡を取るなど、生徒自らが調査の手段や方法を考えながら進めた。前年度の反省から、プレゼンテーションの作成においては、生徒でも扱えるソフトを用意した。その成果として、発表会では、プロジェクタやビデオなどを活用するとともに、寸劇、踊り、クイズなど生徒の個性的なアイデアが盛り込まれ、工夫されたものが多くなった。生徒からは、来年の修学旅行でも発表会を実施してほしいという要望が出され、保護者からも大変好評であった。

IV 実践の中から見たこと

調べ学習や発表活動を活動計画の中にきちんと位置付け、カリキュラムの開発を進めるためには、生徒の個性や思いに応じたメディアを活用できるようにするなど、学習環境を整備することが重要である。

VI おわりに

として取り上げるとともに、必要な情報を提供していきたい。

■ 1 研究のまとめ

総合的な学習の時間を推進する方策を探求する3年間の研究において、初年度には仙台市立全小・中学校を対象とした調査により、各学校が抱える諸課題を明らかにすることができた。

2年次には、その課題から実践上の課題を3段階に設定し、第1段階「総合的な学習の時間の共通理解、実態把握」の段階と第2段階「試行・実践」の段階に取り組んだ。また、その各段階における実践上の課題解決のための具体的方策を提言するとともに、小・中学校6校の実践事例を紹介することができた。

3年次に当たる今年度においては、第3段階「総合的な学習の時間のカリキュラム作成」の段階に取り組んだ。総合的な学習のカリキュラムのとらえ方を明らかにするとともに、新しい学校づくりの視野から「学校の財産としてのカリキュラム作成」の具体的方策を提言した。さらに、小・中学校におけるカリキュラム作成の検討課題を踏まえて実践してきた12校の事例を紹介することができた。

■ 2 今後の課題

小学校では、学校全体、学年、学級などの多様な学習形態でカリキュラム開発が行われているが、今後は、英会話なども含めどのような学習活動をどのように組み合わせて行うか、それぞれにどの程度の時数を設定するか等の検討が必要である。当センター主催の「総合的な学習の時間研修会」などで引き続き検討していきたい。

中学校では、これまで積み上げてきた教育活動の見直しによるカリキュラムの開発について多くの学校で実践が行われている。今後は、新たなアプローチによるカリキュラム開発を進める必要がある。当センター主催の研修会などでも研修内容

● 参考文献

- 亀井 浩明 1999 「生きる力」をはぐくむカリキュラム経営』 東洋館出版社
- 佐藤 学 2000『授業を変える学校が変わる』 小学館
- 大阪市教育センター研究紀要第14号 2000
- 東京都立教育研究所紀要第44号 2000
- 広島市教育センター研究紀要第19号 2000
- 佐賀県教育センター 研究紀要第24集別冊 2000

● 委嘱研究員

宮城教育大学教授	相澤秀夫
仙台市立田子小学校教諭	坂本憲昭
仙台市立折立小学校教諭	池田和子
仙台市立小松島小学校教諭	三井裕
仙台市立鹿野小学校教諭	千葉久美子
仙台市立八乙女小学校教諭	亀谷憲昭
仙台市立将監西小学校教諭	古山洋一
仙台市立広瀬中学校教諭	里見幸広
仙台市立田子中学校教諭	須藤由子
仙台市立宮城野中学校教諭	佐藤獻嗣
仙台市立折立中学校教諭	齋藤宏之
仙台市立将監中学校教諭	吉田知彦
仙台市立寺岡中学校教諭	相原一洋

● 担当

仙台市教育センター

主任指導主事	宗形文雄
指導主事	佐藤洋
指導主事	三品良春
指導主事	首藤真弓
指導主事	工藤洋

「仙台市の子どもー2000」 －児童生徒実態調査－

■ 要 約

本調査は、仙台市の小・中学生の生活実態や意識を探り、そのデータを提供することによって、本市の教育行政の推進に資することを目的として行った。仙台市内小学校 14 校 444 名、中学校 14 校 463 名、合計 907 名の児童生徒から回答を得ることができた。

その結果、仙台市の児童生徒の生活実態や意識等を探ることができ、素材としてのデータを提供することができた。

■ キーワード

実態調査 仙台市の子ども 生活実態

目 次

I はじめに	55
II 調査の目的	55
III 調査の概要	55
IV 調査の結果	56
V おわりに	71
◇ 参考文献	72
◇ 委嘱研究員	72
◇ 資料 調査結果集計表（学年別、男女別）	73

I はじめに

現代の子どもたちがどんな生活を送っているのか、またどんなことを考えているのか、親や教師は意外にその実態を知らないものである。子どもたちの生活の一部を知っていても全容は不明なところが多い。例えば「このごろの子どもたちは昔と変わった」という声にしても、どこがどのように変わったのか根拠もないまま推量で言っているところがある。

そこで、仙台市の小・中学生の基本的な生活実態を探り、そのデータを整えることは仙台市の今後の教育の在り方を考えるうえで大きな意義をもつものと考える。また、今後継続的に調査をし、子どもたちの変容を探ることは、社会や時代の変化をとらえることにもつながると考える。

II 調査の目的

仙台市の子どもの実態を把握し、そのデータを提供することによって、今後の本市教育行政の推進に資する。

III 調査の概要

1 調査内容

仙台市の子どもたちの生活の実態や意識についての質問 26 問

2 調査対象

表 1 の各小学校 5 年生、中学校 2 年生のうち、それぞれ 1 学級の児童生徒を対象とした。

調査対象校の選定に当たっては「仙台都市総合研究機構」の助言を受け、各区ごとの地域特性に応じた 14 の区分から、その地域の特性を代表する学校で、かつその区

分の総学級数の平均に近い学級数を有する学校を選定した。

表 1 調査対象校

青葉区	〔都市を含む市街地〕	
	立町小学校	第二中学校
	〔丘陵地を中心とした住宅地域〕	
	北仙台小学校	中山中学校
宮城野区	〔昭和 62 年合併の旧宮城町地域〕	
	大沢小学校	大沢中学校
	〔古くからの仙台市域〕	
	鶴谷小学校	東仙台中学校
若林区	〔昭和 16 年合併の農村地域〕	
	田子小学校	中野中学校
	〔古くからの仙台市域〕	
	若林小学校	八軒中学校
太白区	〔昭和 16 年合併の農村地域〕	
	蒲町小学校	沖野中学校
	〔古くからの仙台市域〕	
	向山小学校	西多賀中学校
泉区	〔昭和 16 年合併の農村地域〕	
	中田小学校	中田中学校
	〔昭和 31 年合併の農村地域〕	
	生出小学校	生出中学校
泉区	〔昭和 63 年合併の旧秋保地域〕	
	秋保小学校	秋保中学校
	〔七北田川以北の地域〕	
	将監小学校	将監中学校
泉区	〔七北田川以南の地域〕	
	長命ヶ丘小学校	南光台中学校
	〔根白石地域〕	
	根白石小学校	根白石中学校

3 調査数 表 2

学年	調査数 (人)	仙台市の総数 平成 12 年 (人)	抽出率 (%)
小学 5 年生	444	9, 359	4. 74
中学 2 年生	463	9, 953	4. 65
合計	907	19, 312	

4 調査実施期間

平成12年9月1日～11日

5 調査方法 質問紙法

IV 調査の結果

1 学校名、学年 (P55参照)

2 性別 (P73資料参照)

3 今、一緒に住んでいる家族はあなたを含めて何人ですか。

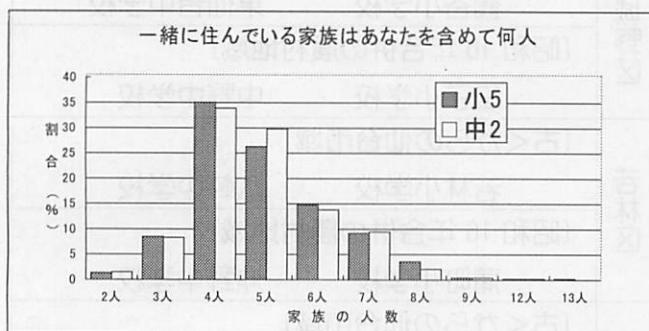


図1

一緒に住んでいる家族の人数は4人が最も多く、小5で35.1%，中2で33.9%となっている。ついで5人家族は小5で26.3%，中2で29.8%である。これは設問4の兄弟（姉妹）数と対応していると思われる。

4 兄弟（姉妹）はあなたを含めて何人ですか。

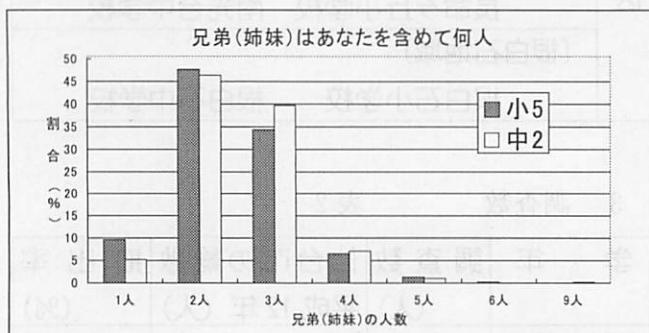


図2

兄弟（姉妹）の人数は、2人が小5で47.7%，中2で46.4%と最も多く、次に3人が小5で34.4%，中2で39.7%となっている。1人は小5が9.7%，中2が5.2%である。

5 学校のある日は、朝だいたい何時ごろ起きていますか。

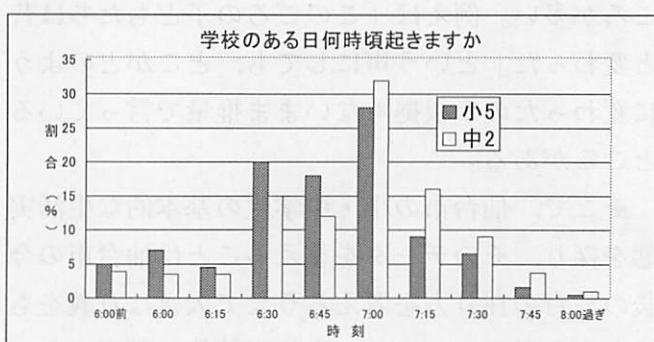


図3

学校のある日の起床時刻は小5，中2とも午前7時ごろに集中している。小5は7時以前に起床している割合が高いが、中2は逆に7時以降に起床している割合が高い。

6 学校のある日は、朝ご飯を食べていますか。

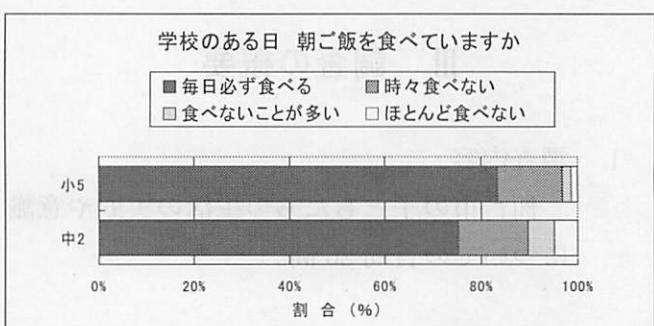


図4

学校のある日は、毎日朝食をとっている子どもが大多数で、小5が83.3%，中2が74.9%である。「ほとんど食べない」という中2の子どもが4.8%いる。

7 学校のある日は、テレビを見たり、テレビゲームなどをしてたりする時間はどのくらいですか。

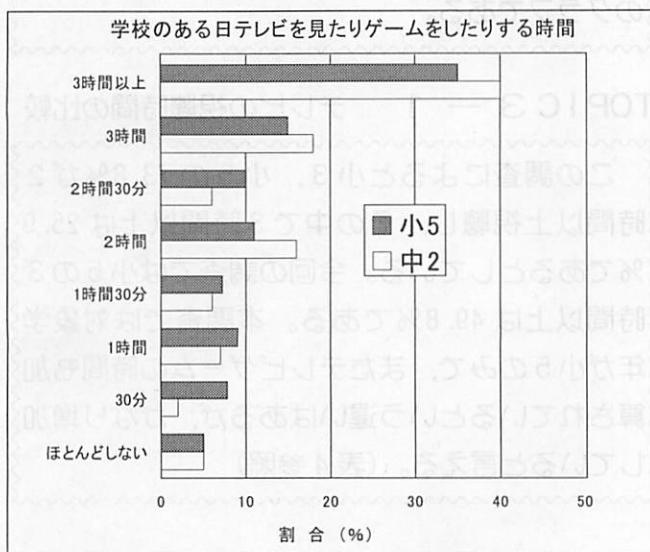


図 5

テレビに向かっている時間は小5、中2とも「3時間以上」が最も高い割合である。「3時間」と「3時間以上」を合わせると小5で49.8%、中2で57.5%である。小5、中2のほぼ半数以上が3時間以上テレビに向かっていることになる。

8 学校のある日は、家庭学習をしている時間はどのくらいですか。(学習塾での学習時間はのぞきます)

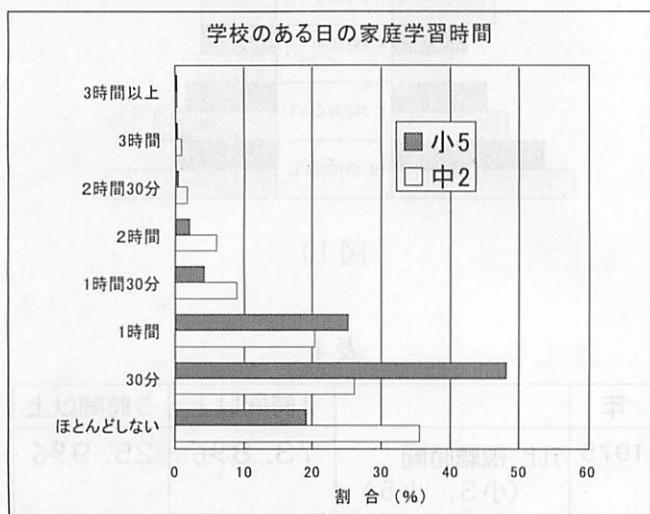


図 6

家庭での学習時間で最も高い割合は、小5、中2とも「30分ぐらい」で、小5は48.1%、中2が26.1%である。中2で最も高い割合を示したのは「ほとんどしない」で35.6%を占めている。

TOP IC—1 他県の調査結果では

1998年に新潟県青少年問題協議会、新潟県福祉保健部児童家庭課が実施した調査結果が表3、図7である。

全体の傾向はほぼ同じであるが、本調査より学習時間は多い。

表 3

	仙台市 2000年		新潟県 1998年	
	小5	中2	小5	中2
ほとんどしない	19.1	35.6		
まったくしない			9.3	26.2
30分ぐらい	48.1	26.1	52.8	34.5
1時間くらい	25.2	20.3	32.4	29.0
2時間くらい	2.0	6.0	4.7	9.2

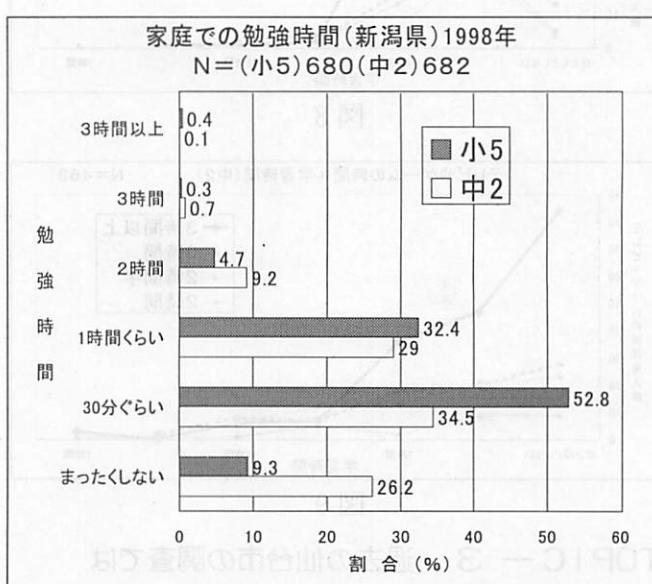


図 7

TOPIC—2 テレビと学習時間

テレビを見たりテレビゲームをしたりする時間と家庭学習の時間の関係をクロス集計してみると図8と図9のようになる。小5は3時間以上(3時間含む)テレビに向かっていると回答した221名の43%(95名)が「30分ぐらい」学習している。「ほとんどしない」は25%(56名)である。一方、中2は3時間以上(3時間含む)テレビに向かっていると回答した266名の43%(114名)が「ほとんどしない」と回答している。「30分ぐらい」は25%(67名)である。

次に学習時間からクロスしてみると中2で「ほとんどしない」と回答した165名の68%(112名)が3時間以上(3時間含む)もテレビに向かっているということが明らかになった。

(設問7×設問8)

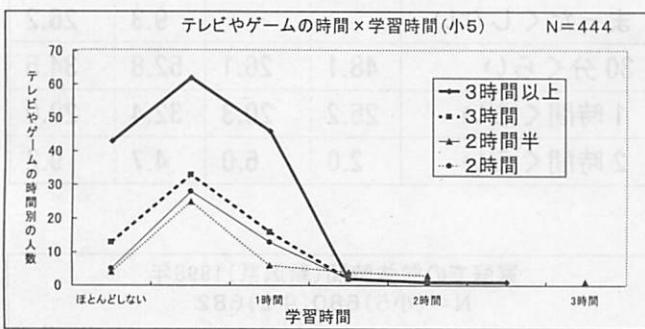


図8

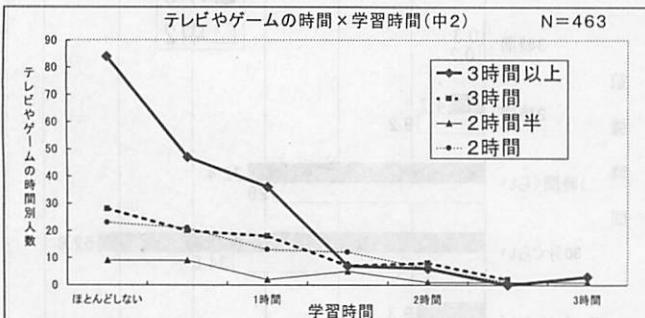


図9

TOPIC—3 過去の仙台市の調査では

過去の仙台市の子どもに関する調査と比較してみた。下記の図10、図11は「仙台市における子どもの遊びと生活についての調査」(1975)

年11月)仙台都市科学研究所(仙台市企画局内)によるテレビを見る時間と家庭学習の時間のグラフである。

TOPIC 3—1 テレビの視聴時間の比較

この調査によると小3、小5の73.8%が2時間以上視聴し、その中で3時間以上は25.9%であるとしている。今回の調査では小5の3時間以上は49.8%である。本調査では対象学年が小5のみで、またテレビゲームの時間も加算されているという違いはあるが、かなり増加していると言える。(表4参照)

「仙台市における子どもの遊びと生活についての調査」1975年より

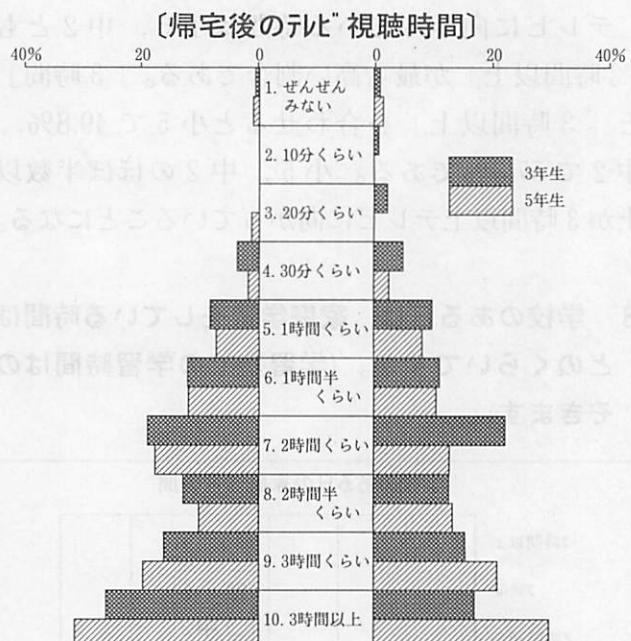


図10

表4

年		2時間以上	3時間以上
1975	テレビ 視聴時間 (小3、小5)	73.8%	25.9%
2000	テレビ やゲームの時間 (小5)	70.5%	49.8%

TOPIC 3 — 2 学習時間の比較

図11を見ると当時の子どもたちの学習時間は小5で「1時間くらい」が最も高い割合であり、約30%を越えている。今回の調査の最大は「30分くらい」で48.1%で、「1時間くらい」というのは25.2%である。

学習時間は当時と比較して減少していると言える。

「仙台市における子どもの遊びと生活についての調査」1975年より

[帰宅後の勉強時間]

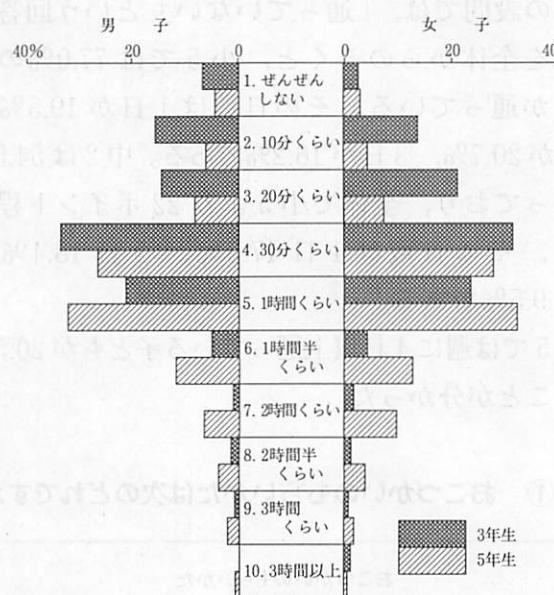


図11

9 学校のある日、夕食をとる時刻はいつごろですか。

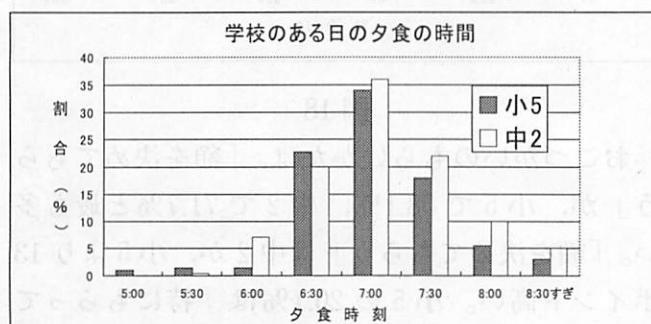


図12

学校のある日の夕食をとる時刻は、小5、中2とも午後7時ごろに集中している。7時以降の占める割合は、合計すると小5は61.0%に対して中2は72.1%である。夕食の時刻は中2の方が小5よりやや遅いと言える。

10 学校のある日は、夕食は誰と一緒にとりますか。

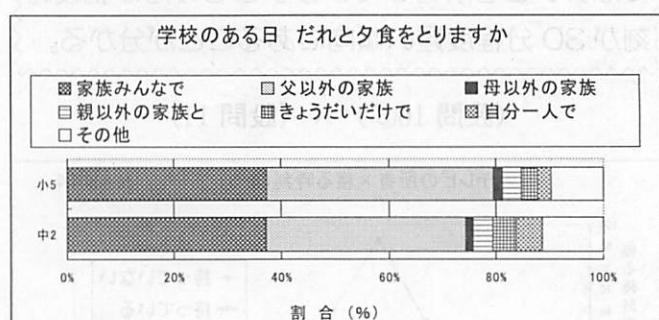


図13

だれと一緒に夕食をとっているかを小5、中2で比較すると大きな差は見られない。

「父以外の家族」と夕食をとる家庭が最も多く、小5が42.1%、中2が37.4%となっている。「家族みんな」で夕食をとっているのは、小5で37.4%、中2で36.7%となっている。

11 学校のある日、寝る時刻はいつごろですか。

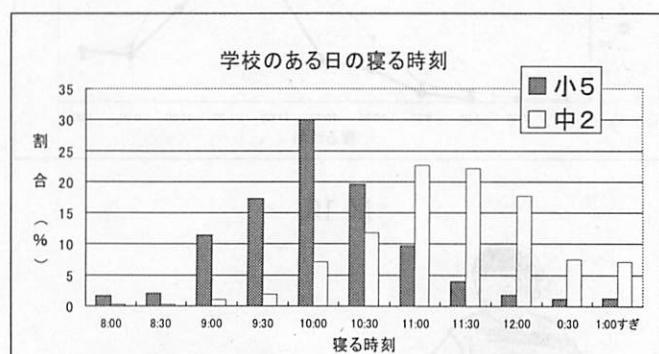


図14

学校のある日の就寝時刻を見ると、小5は午後10時ごろ、中2は11時から11時30分ごろという割合が高い。就寝時刻は小5より中2が1時間ほど遅いことが分かる。

TOPIC—4 テレビの所有と就寝時刻

自分のものとしてテレビを所有している子どもと、所有していない子どもで就寝時刻に差があるかどうかを探るため、下記のクロス集計を行った。

その結果小5ではテレビを所有しているかないかは、就寝時刻とは無関係であるが、中2ではテレビを所有している子どもの方が就寝時刻が30分程度遅い傾向にあることが分かる。

(設問16③) × (設問11)

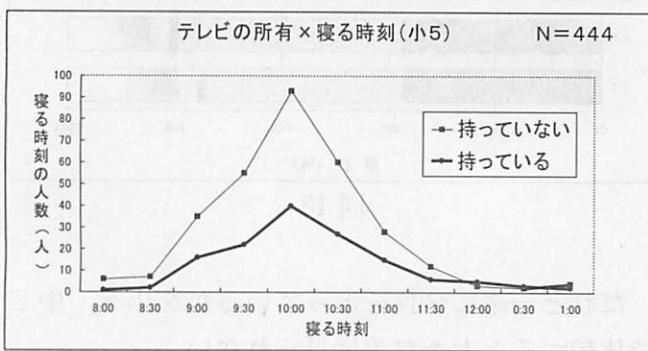


図 15

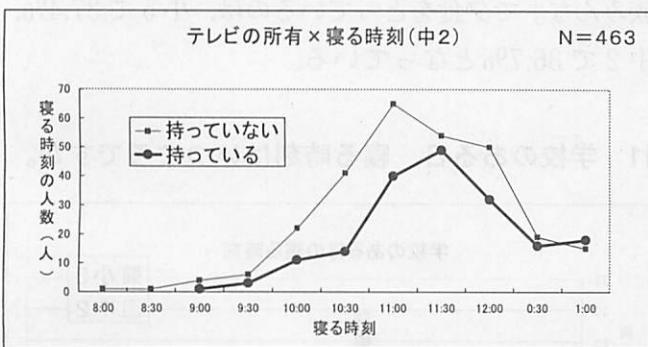


図 16



12 学習塾や習い事（スポーツ少年団も含む）などに一週間に何日ぐらい通っていますか。

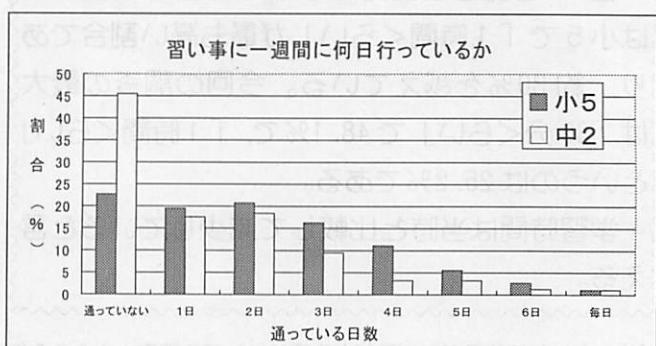


図 17

一週間にどれぐらい学習塾や習い事に通っているかの設問では、「通っていない」という回答の割合を全体からのぞくと、小5では77.0%の子どもが通っている。その日数は1日が19.5%，2日が20.7%，3日が16.2%である。中2は54.5%が通っており、全体で小5より22ポイント程少なく、その日数は1日17.5%，2日18.4%，3日9.5%である。

小5では週に4日以上通っている子どもが20.5%いることが分かった。

13-① おこづかいのもらいかたは次のどれですか。

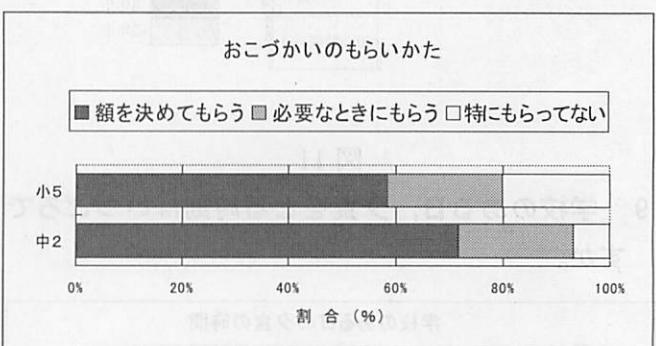


図 18

おこづかいのもらいかたは、「額を決めてもらう」が、小5で58.1%，中2で71.7%と最も多い。「額を決めてもらう」は中2が、小5より13ポイント高い。小5の20.1%は「特にもらっていない」と回答している。

13-② おこづかいの金額は1か月に合計するとどれぐらいですか。

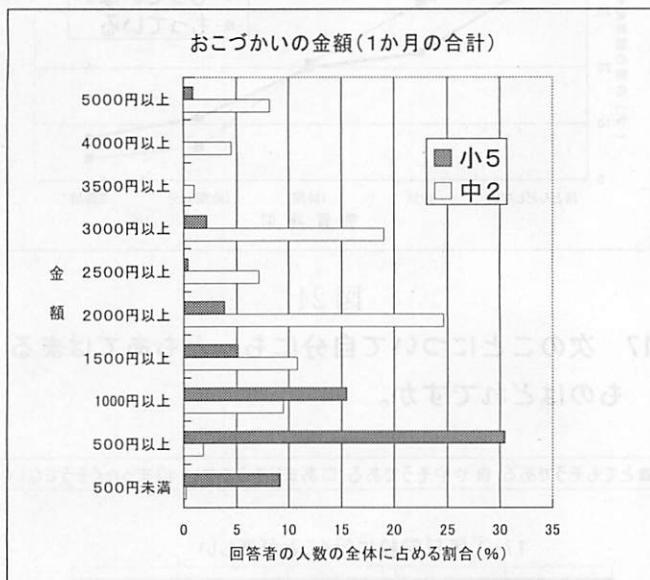


図 19

子どもたちがもらっているおこづかいの1か月の合計金額を見ると、小5は500円以上1000円未満が30.4%，中2は2000円以上2500円未満が24.6%と最も高い割合を示した。ついで小5が1000円以上1500円未満が15.5%，中2は3000円以上3500円未満が19.0%となっている。

14 あなたは家のお手伝いをしていますか。

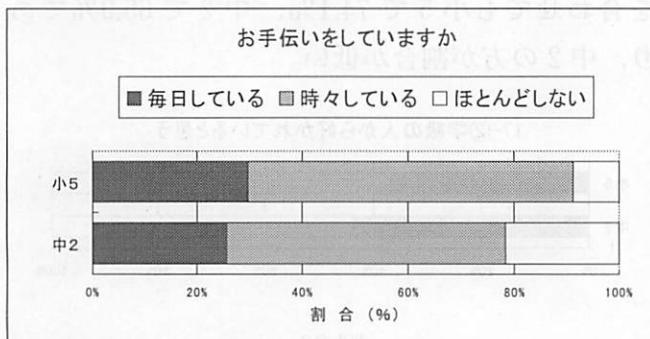


図 20

お手伝いの状況は「ほとんどしない」が小5では8.8%であるが、中2は21.6%を占めている。このことから小5の方が中2より家の手伝いを行っていることが分かる。また中2の5人に1人がほ

とんど行っていない。

15 あなたの使用している部屋は次のどれですか。

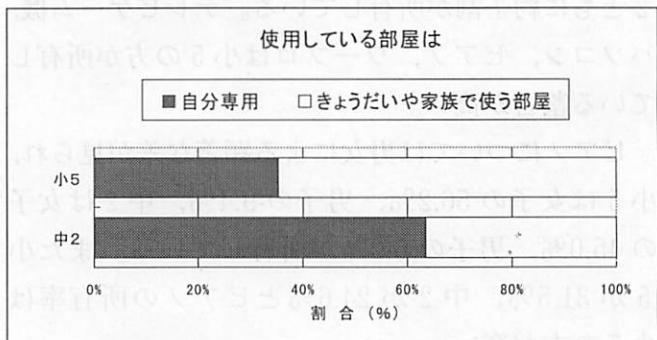


図 21

自分専用の部屋を持っている割合は小5では34.9%であるのに対し、中2では63.5%と小5の約2倍である。

TOPIC—5 全国調査では

文部省が行った「子どもの体験活動に関するアンケート調査(1998)」の全国調査によると自分専用の部屋を持っているのは、小6で47%，中2で64%となっている。仙台市と比べると中2はほとんど同じ割合を示している。

16 自分のものとして持っているもの、使っているものはどれですか。

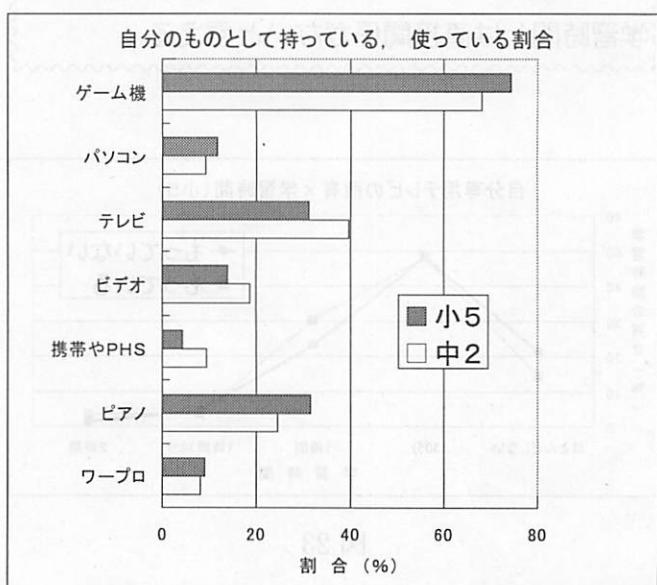


図 22

個人用に持っているものとして、テレビゲーム機は小5が74.3%、中2が68.0%と、小5、中2ともに約7割が所有している。テレビゲーム機、パソコン、ピアノ、ワープロは小5の方が所有している割合が高い。

ピアノについては男女による顕著な差が見られ、小5は女子の56.2%、男子の9.4%、中2は女子の45.0%、男子の6.2%が所有している。また小5が31.5%、中2が24.6%とピアノの所有率は小5の方が高い。

TOPIC—6 全国調査では

前述の文部省調査によると自分専用のテレビの所有状況は小6で16%、中2で25%である。仙台市の調査では小5で31.3%、中2で39.7%であり全国より高い割合で所有している。

TOPIC—7 テレビ所有と学習時間

本調査において、自分専用のテレビを持っていることと、学習時間の関係をクロスして探つてみた。図23、図24で見る限り、ほとんど差は見られない。

自分専用のテレビを持っているかいないかは、学習時間とは直接関係がないと言える。

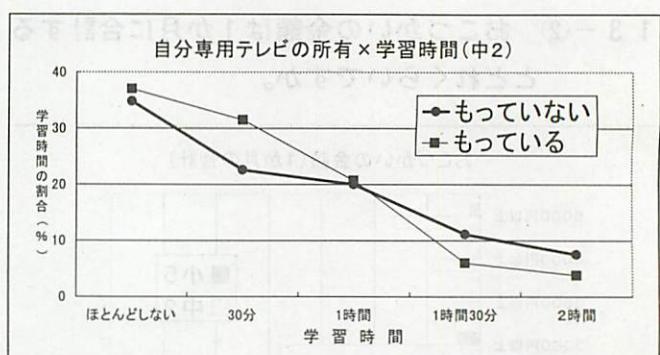


図24

17 次のことについて自分にもっともあてはまるものはどれですか。

■とてもそうである ■ややそうである □あまりそうでない □まったくそうでない

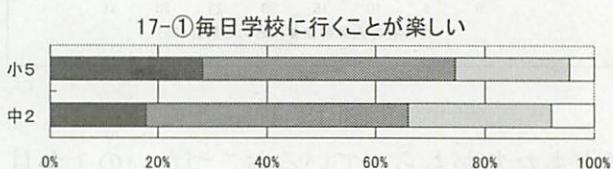


図25

毎日学校に行くことが楽しいかという設問では、「とてもそうである」と回答しているのが、小5が27.9%、中2が17.8%と中2が10ポイントほど低い。「とてもそうである」「ややそうである」を合わせても小5で74.1%、中2で65.9%であり、中2の方が割合が低い。

17-②学級の人から好かれていると思う

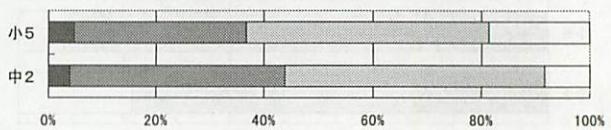


図26

学級の人から好かれているという意識について、「とてもそうである」という回答の割合は小5、中2とも低く、小5は4.7%、中2が3.9%である。「まったくそうでない」と回答しているのが小5が18.4%で、中2の8.2%の倍以上であ

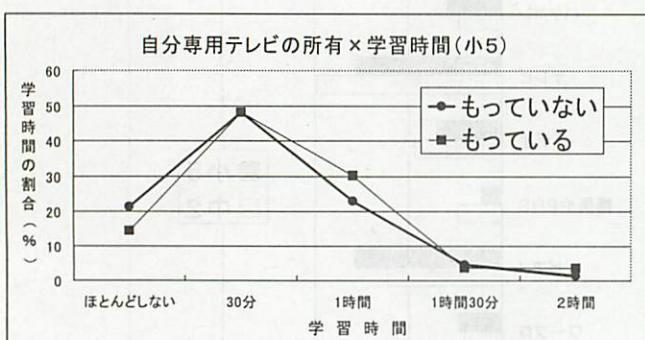


図23

り、小5の方が中2よりも周囲から好感を得ていないという意識が強いようである。「とてもそうである」と「ややそうである」を合わせると、小5は36.5%，中2は42.8%であり、小5の割合が低い。

■とてもそうである ■ややそうである □あまりそうでない □まったくそうでない

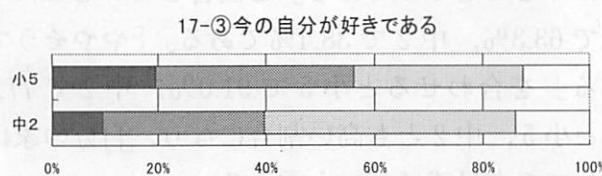


図 27

「今の自分が好きか」という設問では、「とてもそうである」「ややそうである」を合わせると小5で55.9%，中2で39.5%であり、中2の方が小5より16ポイント割合が低い。

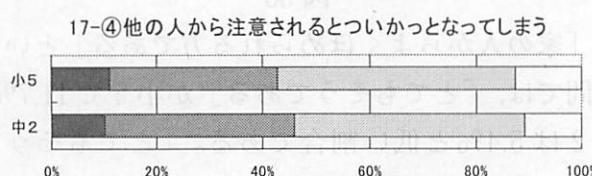


図 28

「他の人から注意されると、ついかっとなってしまう」という設問では「とてもそうである」と回答した子どもは小5で11.0%，中2が10.2%であり、小5，中2とも1割の子どもが自分は「かっとなる」と自覚していると思われる。「ややそうである」を合わせると小5で42.6%，中2で46.0%であり、小5，中2に大きな差は見られない。

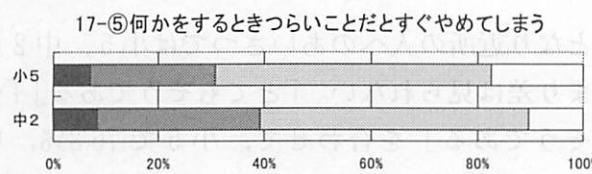


図 29

「何かをするとき、つらいことだとすぐやめてしまう」という設問では、「とてもそうである」「ややそうである」を合わせると小5で30.2%，中2で39.1%である。中2の方が高い割合を示しているが、反面6割から7割の子どもはつらいことでもすぐやめることはないことが分かる。

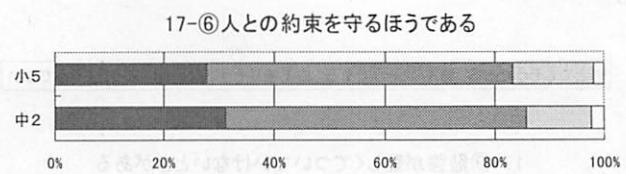


図 30

人との約束を守ることについては「とてもそうである」「ややそうである」を合わせると小5で81.8%，中2で85.3%である。小5，中2ともに高い割合を示しており、約束を守るという姿勢が身に付いていると思われる。

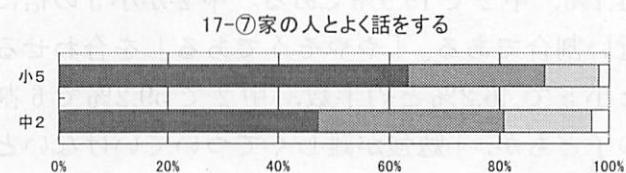


図 31

「家の人とよく話をするか」という設問では「とてもそうである」「ややそうである」を合わせると小5で86.9%，中2で80.3%であり、小5，中2ともに8割を越える高い割合を示している。小5に比べると、中2がやや低いが家族との会話の機会は十分あると思われる。

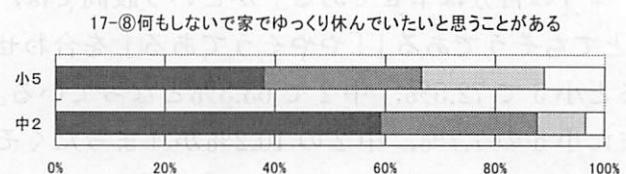


図 32

「何もしないで家でゆっくり休んでいたいと思う」という設問は、「とてもそうである」が小5で37.6%，中2で59.0%であり、中2は半数を超えていている。子どもたちは疲れているのであろうか。「とてもそうである」「ややそうである」を合わせると小5で66.0%，中2で87.3%であり、ともに高い割合であるが、中2は9割に迫っている。

■とてもそうである □ややそうである □あまりそうでない □まったくそうでない

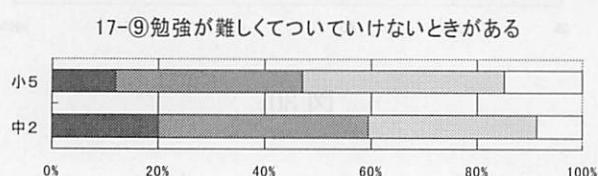


図 33

勉強が難しくてついていけないときがあると思っている子どもは、「とてもそうである」が小5で11.7%，中2で19.9%である。中2が小5の倍に近い割合である。「ややそうである」を合わせると小5で46.2%と約半数、中2で59.2%で6割の子どもが、「勉強が難しくてついていけないときがある」と回答している。

17-⑩今の自分は幸せである

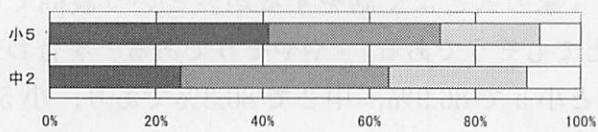


図 34

「今の自分は幸せである」かという設問では、「とてもそうである」「ややそうである」を合わせると小5で72.5%，中2で63.3%となっている。また小5の7.7%，中2の10.2%が「まったくそうでない」と回答している。これは「今の自分は幸せであるとはまったく思っていない」子どもたちの割合である。

17-⑪今のお家に生まれてきてよかった

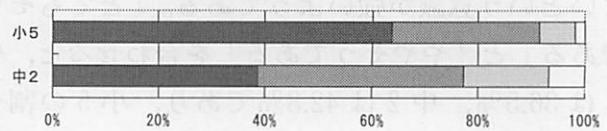


図 35

「今の家に生まれてきてよかったか」という設問に「とてもそうである」と回答しているのは小5で63.3%，中2で38.4%である。「ややそうである」を合わせると小5で91.0%，中2で77.1%と小5，中2とも高い割合になり、自分の家に対する満足感は高いと言える。

17-⑫家人の人からよくほめられる方である

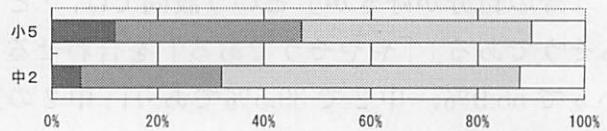


図 36

「家人の人からよくほめられる方である」という設問では、「とてもそうである」が小5で11.7%，中2は5.4%と低い割合である。「とてもそうである」「ややそうである」を合わせても、小5で46.4%，中2で31.8%と小5，中2とも低い割合であり、あまり家でほめられていないと言える。

17-⑬となり近所の人へあいさつをする

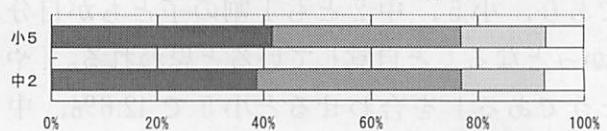


図 37

となり近所の人へのあいさつでは小5，中2にあまり差は見られない。「とてもそうである」「ややそうである」を合わせて、小5で76.3%，中2で76.7%である。小5，中2ともに7割を越える子どもたちは、となり近所の人へのあいさつの習慣がついているようである。

18 友達が次のようなことをしているのを見たとき、どのように思いますか。

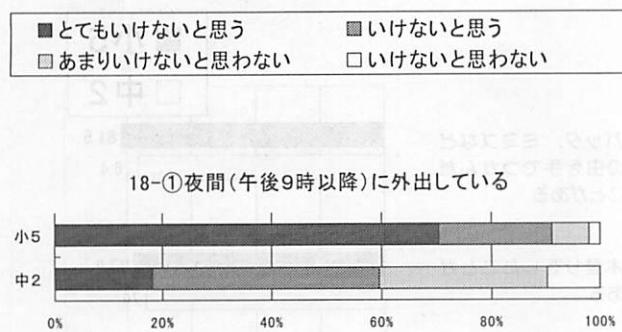


図 38

「夜間外出」については小5、中2で顕著な意識の差が見られた。「とてもいけないと思う」は小5で70.0%で高い割合を占めているのに対して、中2ではその4分の1の17.9%である。夜間（午後9時以降）の外出に小5ほどの抵抗感はないようである。

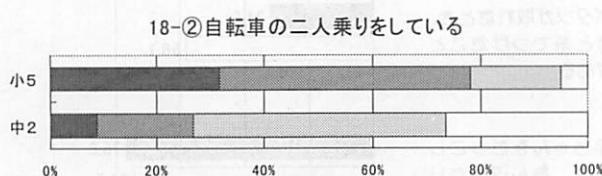


図 39

「自転車の二人乗り」に対しては「とてもいけないと思う」「いけないと思う」を合わせると小5で77.7%，中2で26.8%とその意識に大きな差が見られる。

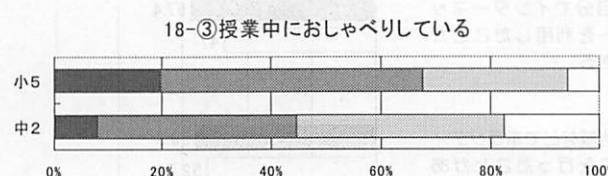


図 40

「授業中のおしゃべり」に対しては「とてもいけないと思う」「いけないと思う」を合わせると

小5で67.1%であり、中2ではそれよりも22ポイント低く44.5%である。

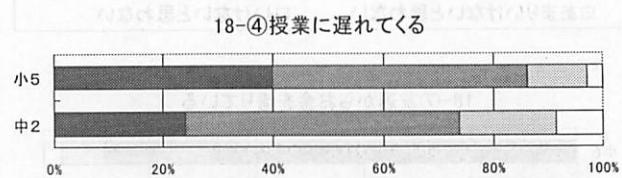


図 41

「授業に遅れてくる」については「とてもいけないと思う」「いけないと思う」を合わせると、上記の「授業中のおしゃべり」よりは小5で18ポイント高い85.1%，中2で29ポイント高く73.7%である。「授業に遅れてくる」ということに対しては「いけない」という意識が高いと言える。

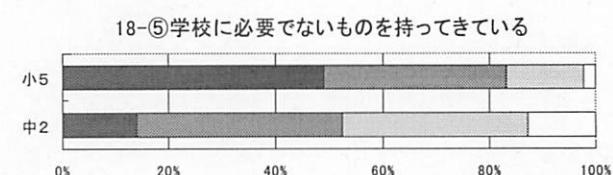


図 42

「必要でないものを持ってきている」に対しては「とてもいけないと思う」は小5が48.7%，中2が13.8%で、学校への持参物については小5が中2より厳しい見方をしている。

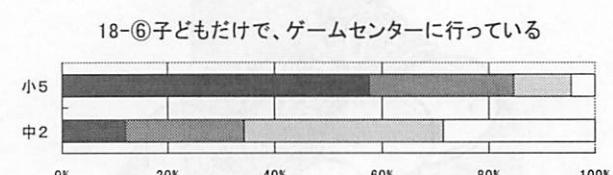
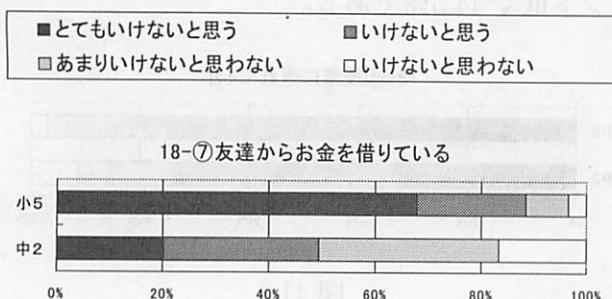


図 43

「子どもだけでゲームセンターに行っている」については、「とてもいけないと思う」は小5で57.4%と6割を示しているが、中2では11.9%であ

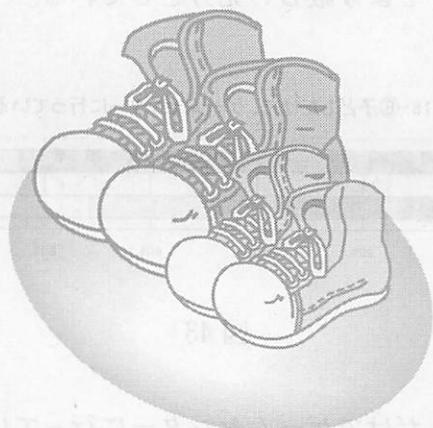
り、小学生ほどの罪悪感は持っていない。



18-⑦友達からお金を借りている

図 44

「お金を借りている」については「とてもいけないと思う」は小5で67.3%とほぼ7割の高い割合を示しているが、中2は20.0%であり、大きな差がある。



19 次のことをやったことがありますか。

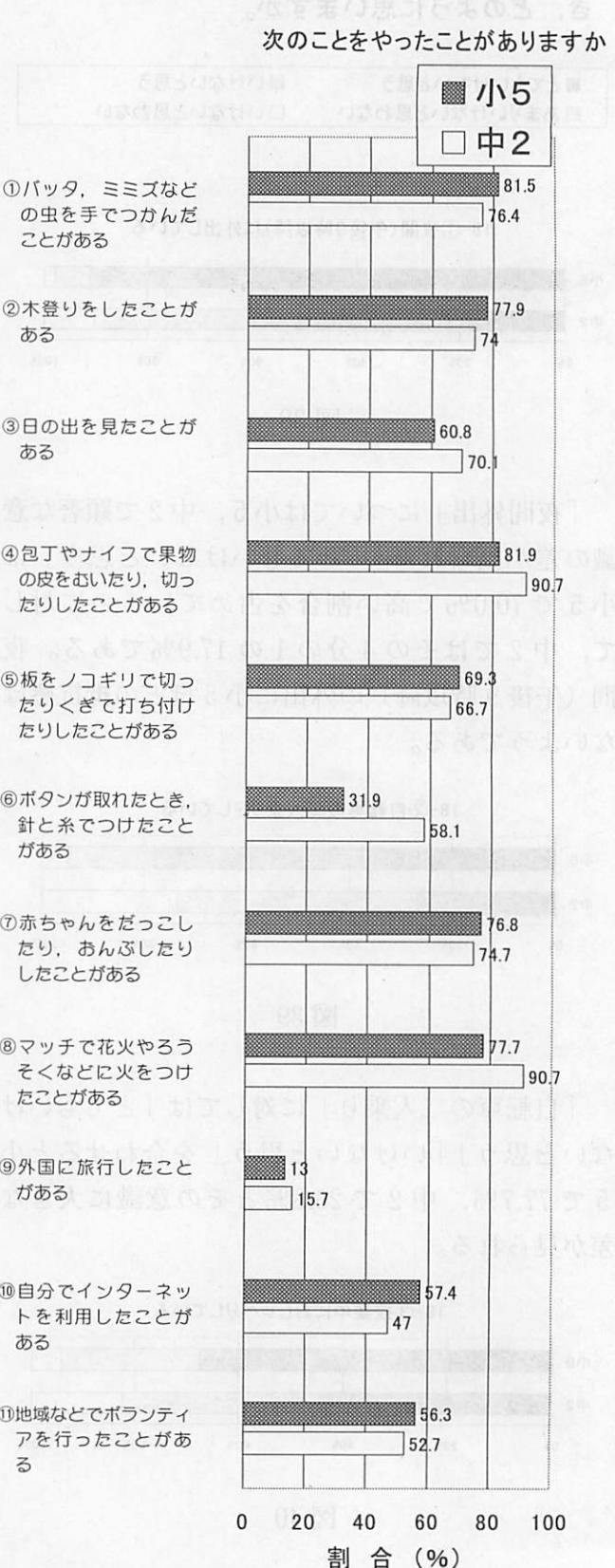


図 45

生活経験の短い小5の方が11設問中6設問について中2より体験の割合が高い。特に「⑩インターネット」は小5が57.4%，中2が47.0%と小5が10ポイント高い。

その他で小5の方が割合が高いのは（①バッタ，セミ，ミミズなどの…）（②木登りをしたこと…）（⑤板をノコギリで切ったり，…）（⑦赤ちゃんをだっこしたり…）（⑪地域などでボランティア…）である。

TOPIC—8 男女差の顕著な体験

本調査において（⑥ボタンが取れたとき…）などは男女間で体験の有無に大きな差があった。その他で男女により顕著な差があったものは以下の通りである。

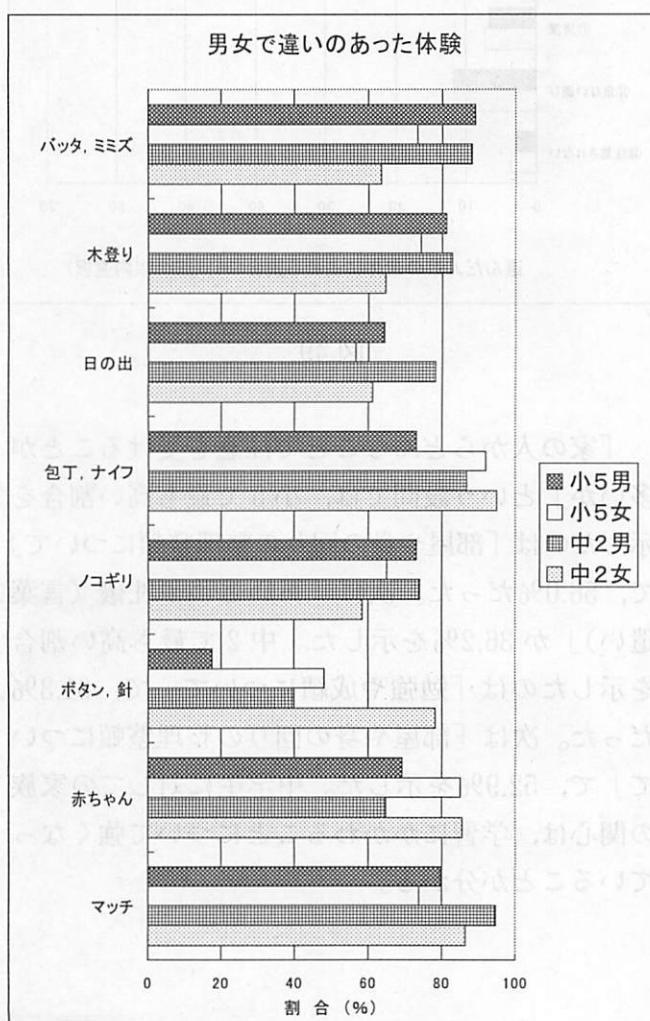


図46

20 何か困ったことがあったとき、主にだれに相談しますか。（三つ以内選択）

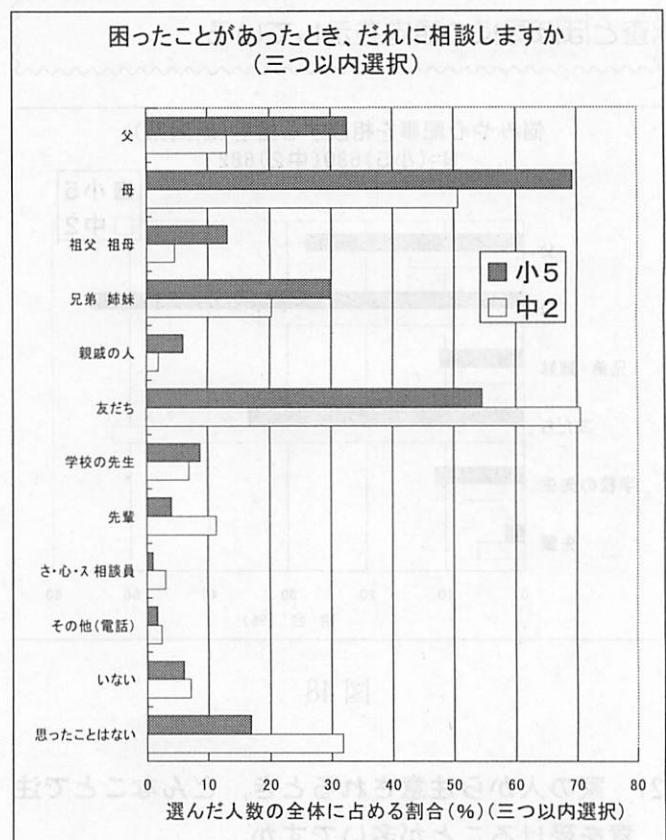


図47

さ・心・ス相談員…・さわやか相談員・こころの教室相談員
・スクールカウンセラー

困ったときの相談相手としては、小5では母親が69.3%，友だちが54.5%，父親が32.6%の順で割合が高い。中2では友達が70.6%，母親が50.7%，兄弟・姉妹が20.3%の順に割合が高くなっている。

相談相手として学校の先生を選択した子どもたちは小5で8.7%，中2で6.9%であった。

TOPIC—9 ふるさと調査

前述の新潟県の調査が下図48である。本調査とほぼ同様の傾向を示している。

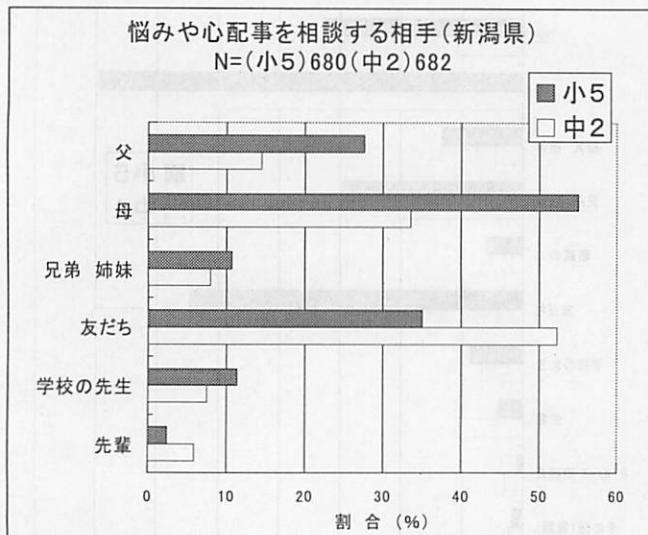


図 48

21 家の人から注意されるとき、どんなことで注意を受けることが多いですか。

- ① 勉強、成績について
- ② 友達とのつきあい方について
- ③ 服装や髪型について
- ④ あいさつや礼儀(言葉づかい)について
- ⑤ うそをついたりすることについて
- ⑥ 公共の場で、人のめいわくにならないようにすることについて
- ⑦ 部屋や身のまわりのせいりせいとんについて
- ⑧ 遊ぶ時間や帰宅時刻(家に帰る時刻)について
- ⑨ お金の使い方(むだづかい)について
- ⑩ 食べ物や飲み物について
- ⑪ 入浴、手洗い、つめ切りなど、清潔にすることについて
- ⑫ 交通ルールを守ることや、あぶない遊びをしないことなどについて
- ⑬ 注意されない

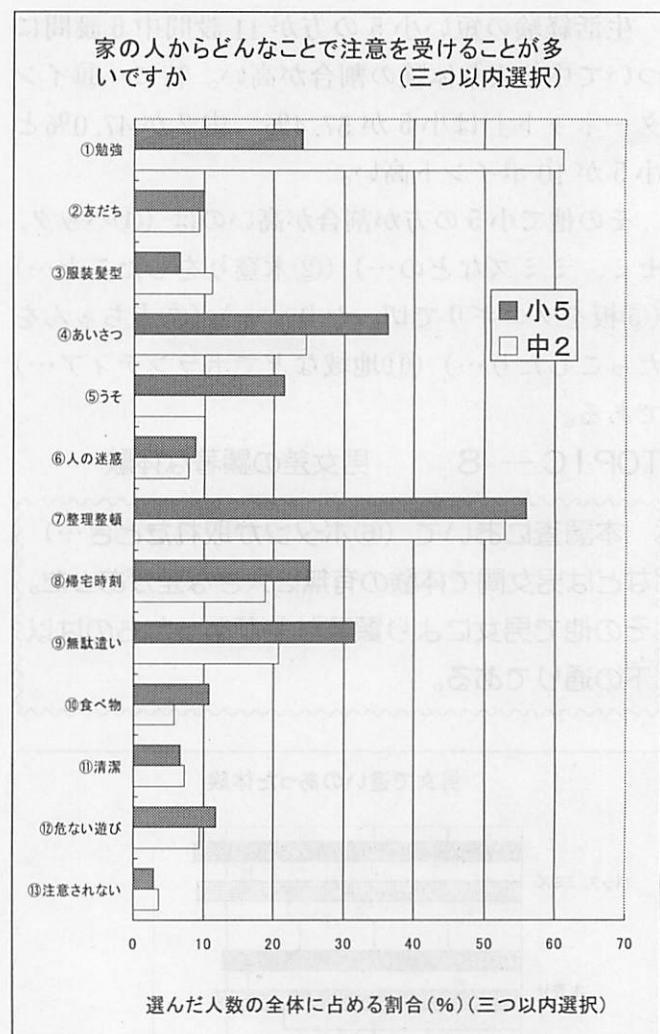
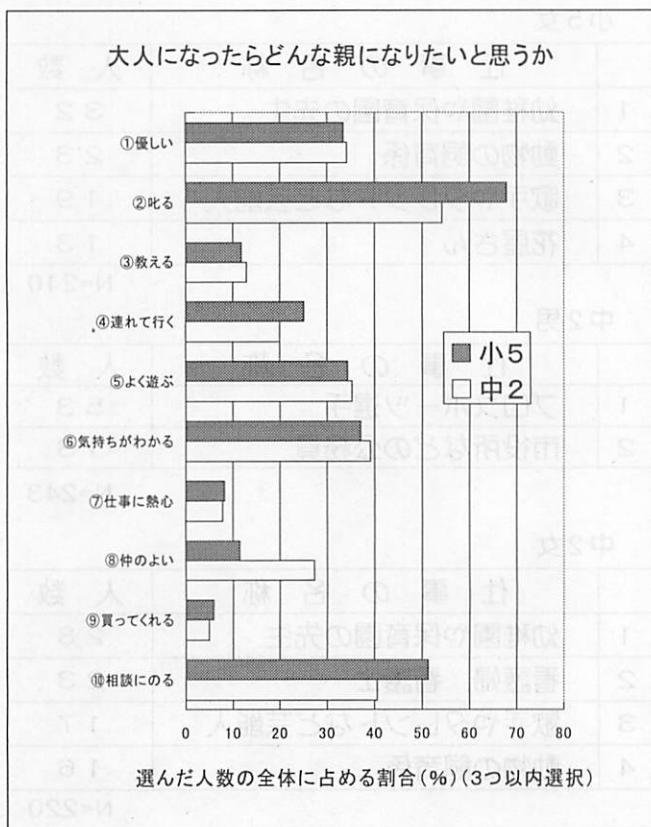


図 49

「家人からどんなことで注意を受けることが多いか」という設問では、小5で最も高い割合を示したのは「部屋や身の回りの整理整頓について」で、56.0%だった。次に「あいさつや礼儀(言葉遣い)」が36.2%を示した。中2で最も高い割合を示したのは「勉強や成績について」で、61.3%だった。次は「部屋や身の回りの整理整頓について」で、52.9%を示した。中学生に対しての家族の関心は、学習にかかわることについて強くなっていることが分かる。

22 大人になったとき、どんな親になりたいと思いますか。

- ① やさしい親
- ② 子どもが悪いことなどしたときは、きちんと叱る親
- ③ 子どもに何でも教える親
- ④ 子どもをいろいろな所へ連れて行く親
- ⑤ 子どもとよく遊ぶ親
- ⑥ 子どもの気持ちが分かる親
- ⑦ 仕事に熱心な親
- ⑧ 仲のよい親
- ⑨ 子どもにいろいろな物を買ってくれる親
- ⑩ 子どもの話をよくきき、相談にのってくれる親



「大人になったとき、どんな親になりたいと思いますか」という設問で、最も高い割合を示したのは、「悪いことなどをしたときは、きちんと叱る親」であった。割合は小5が67.8%、中2が

54.2%であった。次が「子どもの話をよく聞き、相談にのってくれる親」で小5が51.3%、中2が40.6%の割合を占めた。この二つとも小5の方が中2よりも高い割合を示しているが、中2が高い割合を示しているものに「優しい親」「子どもの気持ちがよく分かる親」「子どもとよく遊ぶ親」などがあり、中学生の親に対する期待の反映が感じられる。

TOPIC—10 男女差の顕著な項目

高い割合を示し、男女で差があった項目を下記の図51に示す。それによると小5、中2とも、男子が「子どもとよく遊ぶ親」と回答し、女子が「子どもの気持ちがわかる親」「子どもの話をよく聞き相談にのってくれる親」と回答している比率が高い。

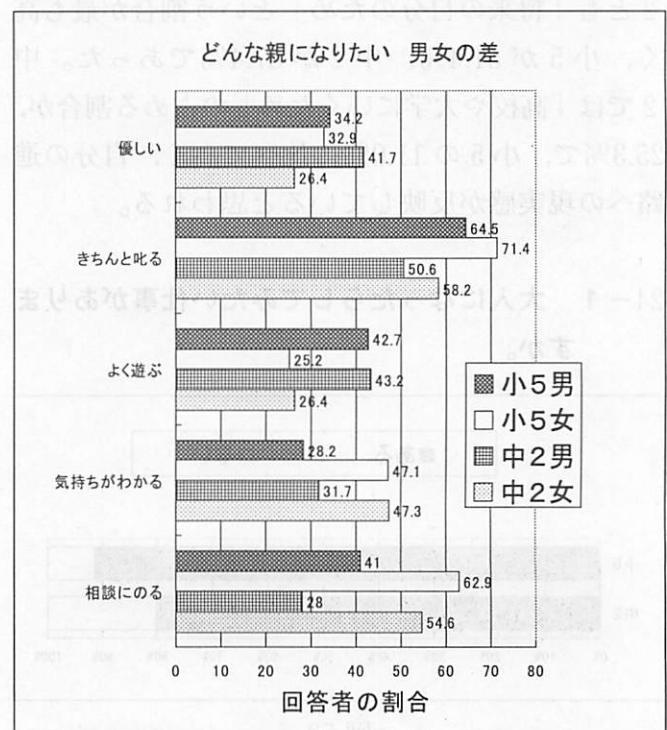


図 51

23 あなたが勉強する理由はどれですか。

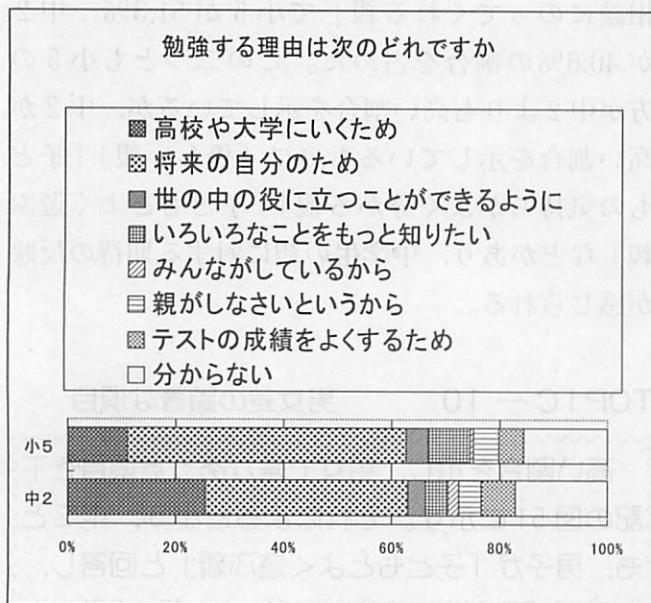


図 52

「勉強する理由は」という設問では、小5、中2とも「将来の自分のため」という割合が最も高く、小5が51.4%、中2が37.4%であった。中2では「高校や大学にいくため」の占める割合が、25.3%で、小5の11.0%に比べて高く、自分の進路への現実感が反映していると思われる。

24-1 大人になったらしてみたい仕事がありますか。

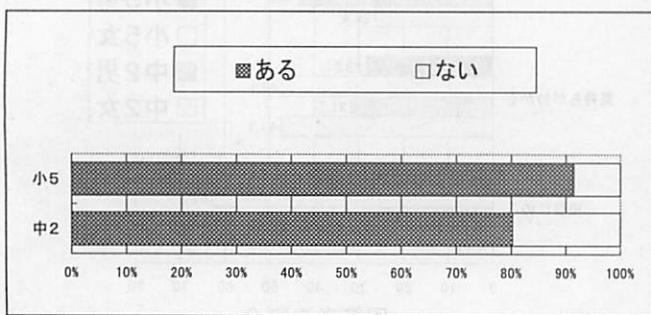


図 53

「大人になったらしてみたい仕事はあるか」という設問では、小5が91.0%、中2が79.8%の高い割合で「ある」と答えている。中2が小5より11ポイント低いが、「してみたい仕事」に対して少しずつ現実的になってきているのであろうか。

24-2 してみたい仕事はどんな仕事ですか。

選択された割合の高い仕事の名称の上位を次に示す。

小5男 (人)

	仕事の名称	人数
1	プロスポーツ選手	87
2	動物の飼育係	12
3	大工さん	11
4	会社員(サラリーマン)	10

N=234

小5女

	仕事の名称	人数
1	幼稚園や保育園の先生	32
2	動物の飼育係	23
3	歌手やタレントなど芸能人	19
4	花屋さん	13

N=210

中2男

	仕事の名称	人数
1	プロスポーツ選手	53
2	市役所などの公務員	13

N=243

中2女

	仕事の名称	人数
1	幼稚園や保育園の先生	28
2	看護婦、看護士	23
3	歌手やタレントなど芸能人	17
4	動物の飼育係	16

N=220

その他では美容関係、ゲーム、コンピュータ関係、漫画、イラスト関係、デザイナー、ペット関係、スポーツ関係等の仕事があげられている。

25 家族に対して次のようなあいさつをしていますか。

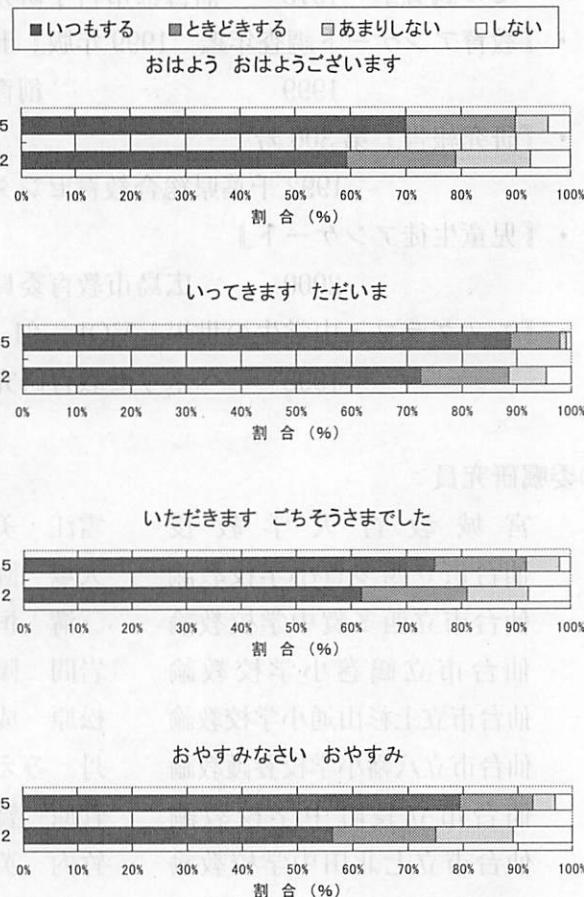
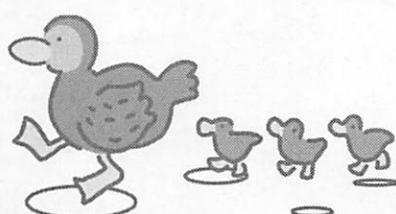


図 54

「家族に対して次のあいさつをしていますか」の設問では、小5、中2ともにそれぞれの項目に高い割合で「いつもする」と回答している。「いってきます」「ただいま」は小5が88.5%、中2が72.1%と特に高い。しかし「いつもする」「ときどきする」を合わせても中2が、小5よりどの項目でも低い割合を示している。



26 あなたは仙台が好きですか。

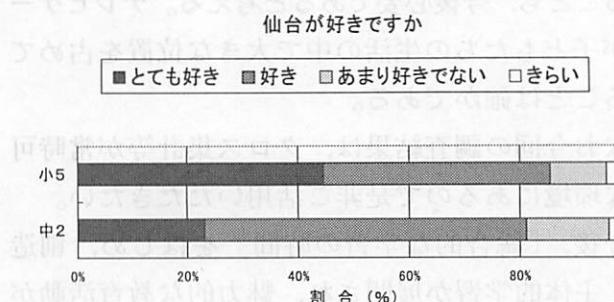


図 55

「あなたは仙台が好きですか」という設問では、「とても好き」は小5が44.3%で、中2の23.1%より20ポイントほど高い。「とても好き」と「好き」を合わせると小5が85.1%、中2が81.0%と、ともに高い割合を示しており、仙台の子どもたちは仙台が「好き」であるととらえてよいのではないだろうか。

V おわりに

今回の調査は、仙台市的小・中学生の生活実態を探り、そのデータを提供することによって、本市の教育行政の推進に資すること目的として行った。推察や想像での考察ができるだけ避け、事実を明らかにし、データを提供することにとどめた。

この調査がそれぞれの立場から本市の教育について考察するための、よりよい指針を模索する一助になれば幸いである。

本報告において「学習の時間」と「テレビやゲームの時間」にポイントをおき考察した部分があるが、「3時間以上」という回答が実際は何時間程度なのかを、今回の調査では明らかにできなかった。

また「テレビに向かっている」というくくりで

考えたが、「テレビゲーム」に焦点を当てて調査することも、今後必要であると考える。テレビゲームが子どもたちの生活の中で大きな位置を占めていることは確かである。

なお今回の調査結果は、クロス集計等が當時可能な環境にあるので是非ご活用いただきたい。

今後、「総合的な学習の時間」をはじめ、創造的・主体的学習が展開され、魅力的な教育活動が行われていくと考えられる。次回の調査では「毎日学校にいくことが楽しい」(設問 17-①)の割合が一層高くなっていることを期待したい。

○参考文献

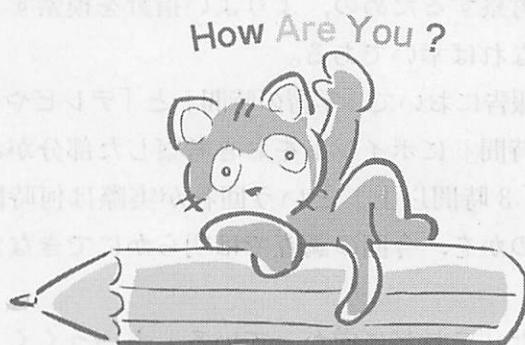
- ・『仙台市における子どもの遊びと生活についての調査』 1975 仙台都市科学研究所
- ・『教育アンケート調査年鑑 1999 年版』上巻 1999 創育社
- ・『研究報告』第 300 号 1992 千葉県総合教育センター
- ・『児童生徒アンケート』 2000 広島市教育委員会
- ・『モノグラフ・中学生の世界』VOL. 61 1998 ベネッセ教育研究所

○委嘱研究員

宮城教育大学教授	雪江 美久
仙台市立西多賀小学校教諭	大場 隆幸
仙台市立西多賀中学校教諭	三溝 恒久
仙台市立鶴巻小学校教諭	岩間 陽子
仙台市立上杉山通小学校教諭	松原 成子
仙台市立八幡小学校養護教諭	丹 みえ子
仙台市立長町中学校教諭	菅原 賢二
仙台市立七北田中学校教諭	竹内 英治
仙台市立桜丘中学校養護教諭	高橋 次子

○担当

仙台市教育センター主任指導主事	今野 英二
指導主事	瀧谷代志子
指導主事	桜井 重行
指導主事	堀越 清治
指導主事	中山 伸枝



資料 調査結果集計表(学年別、男女別)

質問項目		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全
サンプル数		907	210	234	444	220	243	463
3 総に住んでいる家族数	1. 2人	13	4	2	6	1	6	7
	2. 3人	78	20	18	38	19	21	40
	3. 4人	313	74	82	156	69	88	157
	4. 5人	255	51	66	117	77	61	138
	5. 6人	130	35	31	66	30	34	64
	6. 7人	85	18	23	41	19	25	44
	7. 8人	26	8	8	16	5	5	10
	8. 9人	4	0	2	2	0	2	2
	9. 12人	2	0	1	1	0	1	1
	10. 13人	1	0	1	1	0	0	0
4 きょうだいの数	1. 1人	67	20	23	43	9	15	24
	2. 2人	427	101	111	212	98	117	215
	3. 3人	337	77	76	153	94	90	184
	4. 4人	62	9	20	29	16	17	33
	5. 5人	11	2	4	6	2	3	5
	6. 6人	1	1	0	1	0	0	0
	7. 9人	1	0	0	0	0	1	1
	8. 無回答	1	0	0	0	0	0	0
5 起床時間	1. 6時前	40	1	21	22	6	12	18
	2. 6時ごろ	47	15	16	31	8	8	16
	3. 6時15分ごろ	36	11	9	20	9	7	16
	4. 6時30分ごろ	158	43	47	90	35	33	68
	5. 6時45分ごろ	137	40	40	80	34	23	57
	6. 7時ごろ	271	74	49	123	78	70	148
	7. 7時15分ごろ	115	13	27	40	36	39	75
	8. 7時30分ごろ	72	11	18	29	12	31	43
	9. 7時45分ごろ	24	2	5	7	2	15	17
	10. 8時すぎ	7	0	2	2	0	5	5
6 朝食の摂取	1. 毎日必ず食べる	717	178	192	370	167	180	347
	2. 時々食べない	127	29	31	60	29	38	67
	3. 食べないことが多い	34	2	6	8	13	13	26
	4. ほとんど食べない	28	1	5	6	11	11	22
	5. 無回答	1	0	0	0	1	1	1
7 テレビゲーム等の時間	1. ほとんどしない	47	8	15	23	10	14	24
	2. 30分ぐらい	45	22	13	35	6	4	10
	3. 1時間ぐらい	74	22	18	40	16	18	34
	4. 1時間30分ぐらい	58	17	15	32	8	18	26
	5. 2時間ぐらい	125	28	21	49	31	45	76
	6. 2時間30分ぐらい	70	24	19	43	12	15	27
	7. 3時間ぐらい	148	28	37	65	49	34	83
	8. 3時間以上	339	60	96	156	88	95	183
	9. 無回答	1	1	0	1	0	0	0

質問項目		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全
8 家庭学習の時間	1. ほとんどしない	250	30	55	85	62	103	165
	2. 30分ぐらい	335	116	98	214	59	62	121
	3. 1時間ぐらい	206	49	63	112	54	40	94
	4. 1時間30分ぐらい	61	9	10	15	25	17	42
	5. 2時間ぐらい	37	4	5	9	11	17	28
	6. 2時間30分ぐらい	10	1	1	2	5	3	8
	7. 3時間ぐらい	5	0	1	1	4	0	4
	8. 3時間以上	3	1	1	2	0	1	1
9 夕食時間	1. 5時ごろ	4	0	4	4	0	0	0
	2. 5時30分ごろ	8	2	4	6	1	1	2
	3. 6時ごろ	95	29	33	62	12	21	33
	4. 6時30分ごろ	195	52	49	101	42	52	94
	5. 7時ごろ	317	70	82	152	87	78	165
	6. 7時30分ごろ	182	44	38	82	45	55	100
	7. 8時ごろ	70	10	14	24	22	24	46
	8. 8時30分ごろ	36	3	10	13	11	12	23
10 夕食を一緒にとる相手	1. 家族みんなで	336	78	88	166	67	103	170
	2. 父親以外の家族	360	90	97	187	89	84	173
	3. 母親以外の家族	13	5	2	7	3	3	6
	4. 親以外の大人	33	3	13	16	8	9	17
	5. きょうだいだけ	33	8	5	13	10	10	20
	6. 自分ひとりで	34	2	9	11	12	11	23
	7. その他	96	23	20	43	31	22	53
	8. 無回答	2	1	0	1	0	1	1
11 就寝時間	1. 8時ごろ	8	2	5	7	0	1	1
	2. 8時30分ごろ	10	2	7	9	0	1	1
	3. 9時ごろ	56	19	32	51	1	4	5
	4. 9時30分ごろ	86	31	46	77	4	5	9
	5. 10時ごろ	166	70	63	133	10	23	33
	6. 10時30分ごろ	142	49	38	87	21	34	55
	7. 11時ごろ	148	24	19	43	51	54	105
	8. 11時30分ごろ	121	9	9	18	55	48	103
	9. 12時ごろ	80	1	7	8	40	42	82
	10. 午前0時30分ごろ	40	1	4	5	23	12	35
	11. 午前1時過ぎ	39	2	4	6	14	19	33
	12. 無回答	1	0	0	0	1	0	1
12 習い事の日数	1. 通ってない	312	34	67	101	96	115	211
	2. 1日	168	53	34	87	50	31	81
	3. 2日	177	47	45	92	40	45	85
	4. 3日	116	46	26	72	18	26	44
	5. 4日	64	20	29	48	6	9	15
	6. 5日	39	5	20	25	4	10	14
	7. 6日	18	1	11	12	4	2	6
	8. 毎日	10	4	1	6	1	4	5
	9. 無回答	3	0	1	1	1	1	2

質問項目		概要							
		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全	
13 の 1	おこづ かい	1. 額を決めてもらう	590	121	137	258	156	176	332
		2. 必要なときもらう	194	57	38	95	50	49	99
		3. 特にもらっていない	121	31	58	89	14	18	32
		4. 無回答	2	1	1	2	0	0	0
13 の 2	おこづ かいの 額	1. 500円未満	45		41			1	
		2. 500円以上	144		135			9	
		3. 1000円以上	113		69			44	
		4. 1500円以上	73		23			50	
		5. 2000円以上	131		17			114	
		6. 2500円以上	35		2			33	
		7. 3000円以上	98		10			88	
		8. 3500円以上	5		0			5	
		9. 4000円以上	21		0			21	
		10. 5000円以上	42		4			38	
14	手伝い	1. 毎日している	250	69	63	132	69	49	118
		2. ときどきしている	517	129	144	273	120	124	244
		3. ほとんどしない	139	12	27	39	31	69	100
		4. 無回答	1	0	0	0	0	1	1
15	部屋	1. 自分専用	449	74	81	155	140	154	294
		2. きょうだい家族と	455	134	152	286	80	89	169
		3. 無回答	3	2	1	3	0	0	0
16 の 1	持つて いるも の	1. テレビゲーム機等	645	134	196	330	98	217	315
		2. パソコン	95	27	25	52	16	27	43
		3. テレビ	323	65	74	139	72	112	184
		4. ビデオデッキ	149	29	33	62	42	45	87
		5. 携帯電話やPHS	63	11	8	19	25	19	44
		6. ピアノや電子オルガ	254	118	22	140	99	15	114
		7. ワープロ	78	25	15	40	23	15	38
17 の 1	毎日学 校に行く ことが楽 しい	1. とてもそうである	206	63	61	124	44	38	82
		2. ややそうである	428	101	104	205	104	119	223
		3. あまりそうでない	214	39	53	92	56	66	122
		4. まったくそうでない	56	6	14	20	16	20	36
		5. 無回答	3	1	2	3	0	0	0
17 の 2	学級の 人から 好かれ ている	1. とてもそうである	39	5	16	21	6	12	18
		2. ややそうである	321	68	73	141	81	99	180
		3. あまりそうでない	413	103	94	197	108	108	216
		4. まったくそうでない	120	32	50	82	18	20	38
		5. 無回答	14	2	1	3	7	4	11
17 の 3	今のお 自分が好 きである	1. とてもそうである	130	30	56	86	21	23	44
		2. ややそうである	301	74	88	162	56	83	139
		3. あまりそうでない	352	71	67	138	105	109	214
		4. まったくそうでない	119	34	21	55	38	26	64
		5. 無回答	5	1	2	3	0	2	2

質問項目		概要							
		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全	
17 の 4	ついかっ となつ てしまふ	1. とてもそうである	96	22	27	49	20	27	47
		2. ややそうである	306	66	74	140	83	83	166
		3. あまりそうでない	397	99	98	197	95	105	200
		4. まったくそうでない	106	22	34	56	22	28	50
17 の 5	つらいこ とだとす ぐやめて しまう	5. 無回答	2	1	1	2	0	0	0
		1. とてもそうである	70	9	22	31	15	24	39
		2. ややそうである	245	48	55	103	72	70	142
		3. あまりそうでない	460	112	115	227	108	125	233
		4. まったくそうでない	124	37	39	76	24	24	48
17 の 6	約束を守 る	5. 無回答	8	4	3	7	1	0	1
		1. とてもそうである	265	63	58	121	82	62	144
		2. ややそうである	493	126	116	242	117	134	251
		3. あまりそうでない	120	18	47	65	16	39	55
		4. まったくそうでない	19	0	8	8	4	7	11
17 の 7	家の人と よく話す	5. 無回答	10	3	5	8	1	1	2
		1. とてもそうである	495	148	130	278	121	96	217
		2. ややそうである	263	43	65	108	60	95	155
		3. あまりそうでない	118	15	29	44	34	40	74
		4. まったくそうでない	23	1	7	8	5	10	15
17 の 8	何もしな いで家で ゆっくり休 みたい	5. 無回答	8	3	3	6	0	2	2
		1. とてもそうである	440	87	80	167	140	133	273
		2. ややそうである	257	61	65	126	55	76	131
		3. あまりそうでない	139	43	55	98	17	24	41
		4. まったくそうでない	65	18	31	49	8	8	16
17 の 9	勉強につ いていいけ ないとき がある	5. 無回答	6	1	3	4	0	2	2
		1. とてもそうである	144	18	34	52	46	46	92
		2. ややそうである	335	82	71	153	100	82	182
		3. あまりそうでない	313	83	83	166	61	86	147
		4. まったくそうでない	105	23	42	65	12	28	40
17 の 10	今の自分 は幸せで ある	5. 無回答	10	4	4	8	1	1	2
		1. とてもそうである	293	85	95	180	56	57	113
		2. ややそうである	322	68	74	142	80	100	180
		3. あまりそうでない	203	44	39	83	57	63	120
		4. まったくそうでない	81	10	24	34	26	21	47
17 の 11	今の家に 生まれて きてよつ た	5. 無回答	8	3	2	5	1	2	3
		1. とてもそうである	459	140	141	281	86	92	178
		2. ややそうである	302	57	66	123	81	98	179
		3. あまりそうでない	103	10	19	29	31	43	74
		4. まったくそうでない	39	1	7	8	22	9	31
17 の 12	おこづ かい	5. 無回答	4	2	1	3	0	1	1

質問項目		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全
17の12 家人からよくほめられる	1. とてもそうである	77	25	27	52	15	10	25
	2. ややそうである	276	78	76	154	62	60	122
	3. あまりそうでない	445	91	98	189	115	141	256
	4. まったくそうでない	100	14	30	44	26	30	56
	5. 無回答	9	2	3	5	2	2	4
17の13 となり近く所の人につをする	1. とてもそうである	361	98	85	183	102	76	178
	2. ややそうである	333	74	82	156	82	95	177
	3. あまりそうでない	142	28	42	70	24	48	72
	4. まったくそうでない	67	9	23	32	11	24	35
	5. 無回答	4	1	2	3	1	0	1
18の1 午後9時以降に外出して遊ぶ	1. とてもいけないと	394	141	170	311	40	43	83
	2. いけないと思う	284	48	44	92	103	89	192
	3. あまり思わない	171	17	13	30	59	82	141
	4. いけないと思わない	54	3	6	9	18	27	45
	5. 無回答	4	1	1	2	0	2	2
18の2 自転車の二人乗り	1. とてもいけないと	180	46	94	140	14	26	40
	2. いけないと思う	289	112	93	205	44	40	84
	3. あまり思わない	291	43	32	75	106	110	216
	4. いけないと思わない	144	8	14	22	56	66	122
	5. 無回答	3	1	1	2	0	1	1
18の3 授業中のおしゃべり	1. とてもいけないと	124	27	60	87	17	20	37
	2. いけないと思う	380	112	99	211	97	72	169
	3. あまり思わない	292	60	57	117	71	104	175
	4. いけないと思わない	107	9	17	26	35	46	81
	5. 無回答	4	2	1	3	0	1	1
18の4 授業におくれる	1. とてもいけないと	286	83	92	175	53	58	111
	2. いけないと思う	433	99	104	203	118	112	230
	3. あまり思わない	129	24	24	48	33	48	81
	4. いけないと思わない	53	3	10	13	16	24	40
	5. 無回答	6	1	4	5	0	1	1
18の5 学校への不必要なものを持ち込み	1. とてもいけないと	280	95	121	216	24	40	64
	2. いけないと思う	328	74	77	151	90	87	177
	3. あまり思わない	224	36	28	64	72	88	160
	4. いけないと思わない	69	4	6	10	33	26	59
	5. 無回答	6	1	2	3	1	2	3
18の6 子どもだけのゲームセンターへ行く	1. とてもいけないと	310	113	142	255	22	33	55
	2. いけないと思う	221	65	54	119	47	55	102
	3. あまり思わない	219	24	24	48	90	81	171
	4. いけないと思わない	151	7	13	20	60	71	131
	5. 無回答	6	1	1	2	1	3	4

質問項目		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全
18の7 友達からお金借りる	1. とてもいけないと	392	131	168	299	49	44	93
	2. いけないとと思う	226	51	40	91	69	66	135
	3. あまり思わない	192	19	17	36	67	89	156
	4. いけないと思わない	92	7	8	15	35	42	77
	5. 無回答	5	2	1	3	0	2	2
19の1 虫を手でつかむ	1. ある	716	154	208	362	140	214	354
	2. ない	189	55	26	81	79	29	108
	3. 無回答	2	1	0	1	1	0	1
19の2 木登りをする	1. ある	689	156	190	346	142	201	343
	2. ない	218	54	44	98	78	42	120
	3. 無回答	0	0	0	0	0	0	0
19の3 日の出を見る	1. ある	595	119	151	270	135	190	325
	2. ない	309	90	83	173	84	52	136
	3. 無回答	3	1	0	1	1	1	2
19の4 包丁で皮をむく	1. ある	784	193	171	364	209	211	420
	2. ない	123	17	63	80	11	32	43
	3. 無回答	0	0	0	0	0	0	0
19の5 ノコギリで板を切る	1. ある	617	137	171	308	129	180	309
	2. ない	290	73	63	136	91	63	154
	3. 無回答	0	0	0	0	0	0	0
19の6 ボタンをつける	1. ある	411	101	41	142	172	97	269
	2. ない	495	108	193	301	48	146	194
	3. 無回答	1	1	0	1	0	0	0
19の7 赤ちゃんをだっこする	1. ある	687	179	162	341	188	158	346
	2. ない	217	30	72	102	32	83	115
	3. 無回答	3	1	0	1	0	2	2
19の8 マッチで火をつける	1. ある	762	155	187	342	190	230	420
	2. ない	143	53	47	100	30	13	43
	3. 無回答	2	2	0	2	0	0	0
19の9 外国を旅行する	1. ある	131	24	34	58	33	40	73
	2. ない	773	184	200	384	187	202	389
	3. 無回答	3	2	0	2	0	1	1
19の10 インターネットを利用する	1. ある	473	128	127	255	100	118	218
	2. ない	432	81	107	188	120	124	244
	3. 無回答	2	1	0	1	0	1	1
19の11 ボランティアをする	1. ある	494	120	130	250	112	132	244
	2. ない	405	87	104	191	104	110	214
	3. 無回答	8	3	0	3	4	1	5

質問項目		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全
困ったときの相談相手 (三つ以内の選択)	1. 父	206	52	93	145	11	50	61
	2. 母	543	157	151	308	125	110	235
	3. 祖父、祖母	80	28	31	59	7	14	21
	4. きょうだい	228	70	64	134	56	38	94
	5. 親戚	36	16	11	27	8	1	9
	6. 友達	569	145	97	242	187	140	327
	7. 学校の先生	71	20	19	39	20	12	32
	8. 先輩	71	10	8	18	31	22	53
	9. 相談員、スクールルーム	18	2	2	4	9	5	14
	10. 近所、地域の人	3	1	0	1	1	1	2
	11. その他の人	18	4	3	7	3	8	11
	12. 相談する人はいない	60	3	24	27	14	19	33
	13. 相談したいと思った	223	22	53	75	51	97	148
家人から注意されること (三つ以内の選択)	1. 勉強、成績	391	50	57	107	126	158	284
	2. 友達づきあい	88	21	24	45	21	22	43
	3. 服装、髪型	81	22	7	29	24	28	52
	4. あいさつ、礼儀	275	90	71	161	72	42	114
	5. うそをつく	142	38	57	95	15	32	47
	6. 人への迷惑	75	21	18	39	12	24	36
	7. 整理整頓	494	126	123	249	131	114	245
	8. 帰宅時間	199	48	64	112	37	50	87
	9. お金の使い方	236	66	74	140	43	53	96
	10. 食べ物、飲み物	75	20	28	48	9	18	27
	11. 身体の清潔	64	13	17	30	16	18	34
	12. 交通ルール	96	23	29	52	19	25	44
	13. 注意されることがない	30	4	9	13	8	9	17
どんな親になりたいか (三つ以内の選択)	1. やさしい親	307	69	80	149	58	100	158
	2. きちんと叱る親	552	150	151	301	128	123	251
	3. 教える親	113	18	35	53	20	40	60
	4. 連れていく親	204	39	72	111	43	50	93
	5. 一緒に遊ぶ親	316	53	100	153	58	105	163
	6. 気持ちが分かる親	346	99	66	165	104	77	181
	7. 仕事熱心な親	73	9	27	36	8	29	37
	8. なかのよい親	177	29	22	51	74	52	126
	9. 買ってくれる親	49	3	23	26	8	15	23
	10. 相談にのる親	416	132	96	228	120	68	188
勉強する理由	1. 高校、大学へ行く	166	26	23	49	57	60	117
	2. 将来のため	401	117	111	228	92	81	173
	3. 世の中の役に立つ	33	6	12	18	3	12	15
	4. もっと知りたい	53	17	17	34	8	11	19
	5. みんながしている	12	2	1	3	3	6	9
	6. 親がいうから	40	4	17	21	7	12	19
	7. 成績を上げたい	49	11	9	20	14	15	29
	8. 分からない	148	27	42	69	34	45	79
	9. 無回答	5	0	2	2	2	1	3

質問項目		全体	小5女	小5男	小5全	中2女	中2男	中2全
大人になつたらしてみたい仕事	1. プロスポーツ選手	150	6	87	93	4	53	57
	2. 食べ物屋さん	26	8	7	15	5	6	11
	3. 歌手、タレント芸能人	51	19	6	25	17	9	26
	4. 芸術家、音楽家	22	9	1	10	7	5	12
	5. 医者	11	4	3	7	0	4	4
	6. 農業	8	1	1	2	1	5	6
	7. 幼稚園、保育園の先生	66	32	5	37	28	1	29
	8. 学校の先生	21	3	8	11	7	3	10
	9. 学者	15	1	8	9	1	5	6
	10. 宇宙飛行士	5	2	1	3	1	1	2
	11. ドライバー	15	0	7	7	0	8	8
	12. 大工さん	20	1	11	12	1	7	8
	13. 花屋さん	14	13	0	13	1	0	1
	14. パイロット、客室乗務員	11	2	2	4	4	3	7
家族に対する朝のあいさつ	15. 飼育係	55	23	12	35	16	4	20
	16. 公務員	27	3	8	11	3	13	16
	17. 看護婦、看護士	34	10	1	11	23	0	23
	18. 会社員	20	0	10	10	2	8	10
	19. その他	187	57	33	90	52	45	97
いってきます。ただいま	20. 今のところない	149	16	23	39	47	63	110
	1. いつもする	583	160	150	310	140	133	273
	2. ときどきする	179	32	56	88	43	48	91
	3. あまりしない	90	15	12	27	24	39	63
	4. しない	52	3	15	18	13	21	34
いたたきました。ごちそうさまでした	5. 無回答	3	0	1	1	0	2	2
	1. いつもする	727	191	202	393	171	163	334
	2. ときどきする	114	17	23	40	29	45	74
	3. あまりしない	37	1	4	5	13	19	32
	4. しない	25	1	3	4	7	14	21
おやすみなさい	5. 無回答	4	0	2	2	0	2	2
	1. いつもする	619	167	165	332	146	141	287
	2. ときどきする	160	29	45	74	39	47	86
	3. あまりしない	79	12	15	27	26	26	52
	4. しない	45	2	7	9	9	27	36
仙台が好き	5. 無回答	4	0	2	2	0	2	2
	1. とても好き	304	90	107	197	43	64	107
	2. 好き	449	93	88	181	137	131	268
	3. あまり好きでない	114	24	21	45	33	36	69
	4. きらい	37	3	16	19	7	11	18
	5. 無回答	2	0	1	1	0	1	1

情報教育の推進に関する研究 —ミレニアム・プロジェクトを受けて—

■ 要 約

児童生徒がよき市民の一人として、これからの中社会で生きていくためには、子供たち同様、教員もまた情報リテラシーを身につけなければならない。教育センターは、「ミレニアム・プロジェクト」を受け、平成11・12年度、5つの新規事業を立ち上げ、それぞれの連携を図りながらこの課題に取り組んできた。その実践の結果、これからの仙台市における情報教育の方向性を提言するとともに、その実践事例も紹介した。

■ キーワード

- ミレニアム・プロジェクト 教員情報リテラシー IT社会
- 先進的教育用ネットワークモデル地域事業 エル・ネット 情報活用能力
- 交流学習 共同学習 電子掲示板

目 次

第1部 はじめに

1 教育の情報化が目指す目標	79
2 ミレニアムプロジェクトによる転機	79
3 本市の現状と課題	80
4 事業の立ち上げ	80

第2部 各事業における実践

I 情報教育研究推進事業

1 情報教育研究推進委員会	81
2 平成11年度の研究実践	81
3 平成12年度の研究実践	82
<事例1>電子掲示板を使った授業の実践	84
<事例2>学校用グループウェアを用いた交流学習	87

II 先進的教育用ネットワークモデル地域事業

1 事業概要	90
2 研究テーマと重点課題	90
3 実践事例紹介	90
<事例3>テレビ会議システムによる交流を取り入れた環境教育の実際	
4 ビデオ・オン・デマンドの活用について	92
5 事業の考察	92

III 教員情報リテラシー向上プロジェクト事業

1 事業の経緯	93
2 事業の4つの方針	93
3 情報教育担当者連絡協議会の設置	93
4 校内情報教育研修会	95
5 まとめ	95

IV 教育情報衛星通信ネットワークの整備と今後の課題

1 エル・ネット構築の目的	96
2 本センターの整備状況	96
3 活用状況	96
4 活用推進のための今後の取組	97

第3部 提言

1 校内研修会による情報教育の活性化	98
2 共同学習・交流学習で広がる可能性	99
3 今後の教育情報ネットワークのあり方	100

第1部 はじめに

■ 1 教育の情報化が目指す目標

情報通信技術の発達に伴い、社会のあらゆる部分に情報化の波が急激に押し寄せてきている。学校教育においても、この波を避けて通ることはできなく、21世紀の教育では情報化の光と影の部分をふまえながら、そのメリットを十二分に生かしていくかなければならない。

児童生徒が様々な情報を積極的に収集・整理・活用するとともに、自ら主体的に学び考え、その結果をわかりやすく表現し、相手に伝える力を身に付けていくためには、すべての教科、総合的な学習の時間などを通じ、コンピュータやインターネット等のメディアを積極的に活用することが必要である。そして、これらのメディアを有効に活用していくことで、従来の学校教育では十分に育成しきれていないといわれてきたコミュニケーション能力やディスカッション能力等も、飛躍的に高めていくことができる。

また、IT社会の中でよき市民の一人として生きていくためのルールを児童生徒にしっかりと身につけさせていくことも、学校教育の緊急な課題である。

これらを実現していくために、学校に情報機器を導入すれば自然にそれらに近づけるというものではなく、教員自身が積極的に「子どもたちを変えていこう」「授業を変えていこう」「学校を変えていこう」とする意識をもたなければならぬ。そのためには教員自らのリテラシーの積極的な向上と、それを支援する研修体制のいっそうの充実が必要であり、設備面では校内LANの効果的な導入と運用が前提となる。

■ 2 ミレニアム・プロジェクトによる転機

2000年以前までの情報化事業については、特にコンピュータ室への機器導入と、インターネット接続が中心に行われてきた。そこで、学校教育

におけるコンピュータ活用は、①コンピュータ室でコンピュータの使い方を学び、②コンピュータ室で教科や、総合的な学習の時間の調べ学習等に活用するという2点が中心だった。つまり、コンピュータ室という限定された空間で機器やソフトウェアの操作を習得し、インターネットで検索を行うということである。

しかし、平成11年12月のミレニアムプロジェクト「教育の情報化」では、「コンピュータやインターネットなどの新しい道具を使うことによって、これまでの教科書を用いた各教科の授業を、すべての子どもたちにとって分かるものにする」という具体的目標が示された。

この「分かるものにする」という意味には、①基礎基本である学習内容をよりわかりやすく教えるために、メディアの活用が必要であるということと、②従来の座学的な授業では、今日的な課題を多く含む学習内容を児童生徒に主体的に学ばせることは不可能である、という認識があると推察される。

こうした授業を実現するためには、ハード面で「すべての教室のすべての授業」を念頭においた校内LANの構築、さらにインターネットに接続されたパソコンとプロジェクターの各教室への設置が普及の鍵を握っている。

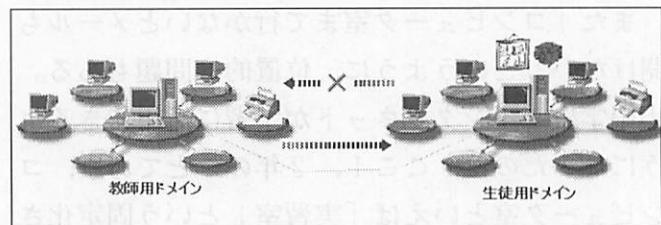


図1 校内LANの模式図

また、このような環境整備とともに、良質のコンテンツ（デジタル化された教材）を準備していくことが急務である。例えば、授業で使いたい静止画や、数十秒の動画コンテンツを各教室において利用できるようにするために、教育委員会が所有している教材をネットワークで配信できるようにしたり、企業や放送局、博物館

等が所有している各種リソースを提供できる体制を国レベルで整えていく必要がある。

■ 3 本市の現状と課題

仙台市においては、現状の機器導入が開始されたのは平成8年度からであり、平成11年度末までの4年間にすべての小・中・高・養護学校で国が示した基準台数の設置を終えた。またインターネット接続については、平成10年度から開始しており、現時点で100%の接続率であり、その形態もケーブルテレビ網、ISDNのほかに、国の事業である先進的教育用ネットワークモデル地域事業で行われている衛星接続、ADSL、無線接続等、多岐にわたっている。

一方、例年行われている現文部科学省の調査で、平成12年3月末の結果によるとコンピュータを活用した授業を行っている教員の割合は、小学校38.2%，中学校22.7%，高等学校44.7%，特殊教育諸学校8.1%と低くなっている。

授業で活用されない理由については、校種や教師の年齢層によっても違いはある。例えば情報機器を使用することについての教育的效果を見出せないとか、従来の指導方法の方が便利であるからという教師側の意識や、情報機器の使用についてのスキルの低さも要因になっている。

また「コンピュータ室まで行かないとメールも開けない」というように、位置的な問題もある。小中学校でインターネットが学習に活用できるようになったのは、ここ1，2年のことであり、コンピュータ室といえば「実習室」という固定化されたイメージがあったのも確かである。

また、インターネットに接続できるようになったのはいいが、授業で使えるコンテンツ（学習教材資源）が少ないという声も聞く。インターネットは情報を収集するだけではなく、本来、共同学習や交流学習等、様々な活用の仕方があるのだが、メディアを使い始めて間もない頃は、接続してもすぐ利用できるものがないと、使ってみたいとい

う意欲は確かにそがれるであろう。そこで、各種教育用コンテンツの整備が急務である。

■ 4 事業の立ち上げ

仙台市教育委員会では、このような現状を改善し、高度情報化時代の学校教育を支援するため、今年度からの新規事業を含め、以下の事業を立ちあげている。

- ① 情報教育研究推進事業
- ② 先進的教育用ネットワークモデル地域事業
- ③ 教員情報リテラシー向上プロジェクト事業
- ④ エルネット事業
- ⑤ 教育用コンテンツ開発事業

このうち、教育用コンテンツ開発事業は、平成12年度の文部科学省新規委託事業である。各地域や学校が参加し、コンテンツの開発意識を高めつつ、各教科等の学習に活用しやすいネットワーク提供型コンテンツを開発するのが目的である。

仙台市では、産・学・官連携によるコンソーシアムを組織し、「マップ型学習調査システム」と名づけた、インターネット上でデータの蓄積ができる地図提示システムの開発に当たっている。このシステムの利用により、地域で調べた情報を地図の中に埋め込むことができるため、複数の学校が同じテーマにより共同学習を行ったり、掲示板上で交流を行うことが可能になる。平成13年3月の「仙台市星空調査」をはじめとして、同年4月からの本格的運用を目指している。

上記①～④の事業については、第2部で詳細を述べる。

第2部 各事業における実践

I 情報教育研究推進事業

■ 1 情報教育研究推進委員会

(1) 設置の経緯

全国的な規模での学校インターネットの利用推進は、平成7年度の100校プロジェクトに始まる。仙台市では平成10年に仙台市教育情報ネットワークの接続サービスが開始され、現在すべての市立学校が教科や総合的な学習の時間における調べ学習を中心に、インターネットを活用している。

しかし、インターネットの本来的な活用法である共同学習や交流学習、また教科におけるインターネットの有効活用を目指した授業実践は、まだまだ少ないのが現状である。

そこで、全市的な取り組みができる共同学習や交流学習、あるいは教科の特色を生かした授業の企画立案を行い、それらの検証授業を通して、成果を市立学校の今後の実践に生かすことを目的に、平成11年4月「情報教育研究推進委員会」(以下「委員会」)が設置された。

なお、この委員会は、前年度までの「情報教育研究委員会」を発展的に改組したものである。

(2) 委員会のもう一つの課題

インターネットの活用が進むにつれ、児童生徒の情報モラルをはじめ、様々な内外の問題が発生するようになってきた。さらに平成10年3月に定めた「仙台市におけるインターネットの利用に関する要領」の規程だけでは、処理しきれないケースも多くなってきている。

委員会ではこうしたネットワーク社会のルールに関する課題に対処するため、ネットワークに詳しい学識経験者を委員に委嘱し、貴重なアドバイスを受けながら、教育情報ネットワークにおけるネットワークポリシーの問題に取り組んできた。

■ 2 平成11年度の研究実践

平成11年度は当初、小学校部会と中学・高校部会の二つで研究活動を開始した。

小学校部会では、掲示板を利用した交流学習の実践研究と、教科で使えるリンク集の作成を行うことにした。中学校・高校部会では、研究テーマとして「中高における情報リテラシーのあり方」を設定したが、一年という研究期間では議論が十分に尽くせないということから、教科におけるネットワークを有効に活用した実践研究及び、校内LANの構築と運用のあり方について研究を行うことにした。

(1) 小学校部会

① 総合的な学習の時間

「落ち葉はごみか？」

仙台市立西多賀小学校4年

Category	Summary of Responses
ごみではないと思う	465 ごみではないと思う 464 ごみではないと思う
大事な資源です	459 落ち葉は大事な資源です！ 458 ゴミなんてとんでもない！
きれい	457 ごみではないと思う 455 落ち葉は、ごみではない。 453 落ち葉はきれい 452 ごみではないと思う

図1 「落ち葉はごみか？」の掲示板

宮城教育大学環境教育実践研究センター鶴川研究室との共同プロジェクトとして行われた交流学習である。「落ち葉はごみ？」と題された掲示板(図1)には、全国から多くの意見が寄せられた。子どもたちはこれらの意見を分類・集約しながら学習を進めていった。「落ち葉」をテーマにした学習は、「杜の都仙台」の地にふさわしい情報発信のテーマであり、次年度以降の継続的な実践の広がりが期待された。

② 学習リンク集の作成

学年ごと教科ごとに使えるWebページを収集し、それを活用した授業事例作りを進めた。リンク集のまとめ方としては、「資料として使えるタイプ」と「交流授業で使えるタイプ」に分類し、活用形態としては、「調べ学習」「ドリル」「交流の場」の3タイプで構成した。

(2) 中学校部会

① 英語科「Let's Learn through the Internet—インターネットを使ってアメリカの文化を知ろうー」

仙台市立第一中学校 2 年

仙台市立将監東中学校 2 年

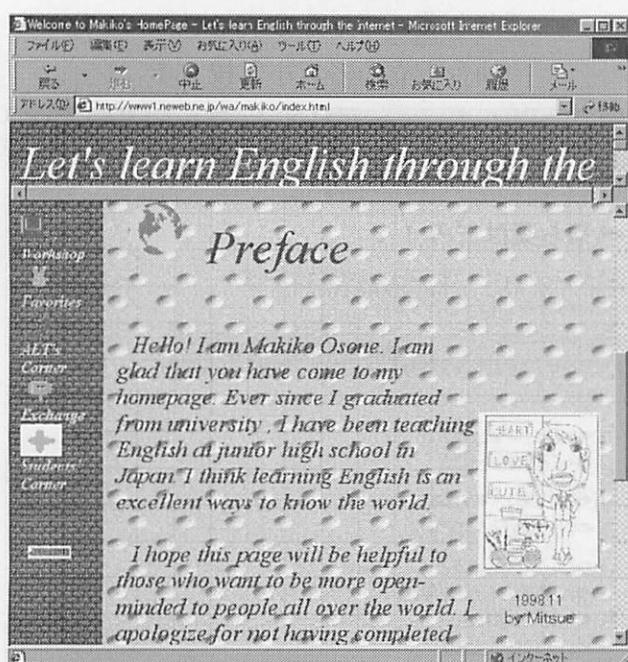


図2 「Let's Learn through the Internet」のトップページ
中学生にも親しみやすいカナダの少女が作成した Web サイトや、教科書の UNIT に関連した英語のサイトを活用した、生きた英語を体験できる英語科の授業実践である。

② 技術・家庭科

「プログラムと計測・制御—自律型移動ロボット”梵天丸”を教材として—」

仙台市立高森中学校 3 年

仙台市立六郷中学校 3 年

「もの作りとコンピュータ」をテーマに開発された”梵天丸”を活用した学習で、平成 11 年度は上記 2 校で研究授業が行われた。

研究授業に当たっては、委員を含む 2 名の授業者、教育センター情報教育担当指導主事、同技術・家庭科担当指導主事、そして、「梵天丸」の共同開発者である東北学院大学工学部岩本正敏助教授、宮城教育大学水谷好成助教授、計 6 名のグループが指導案や教材教具の工夫について検討を繰り返した結果、メディアを有効に活用した授業が展開できた。

③ 校内 LAN の構築と運用の実践研究

校内 LAN の構築と運用の実践研究は、西山中学校、仙台高校、仙台商業高校、仙台工業高校の委嘱研究員によって行われた。『平成 11 年度情報教育実践事例集』に掲載されたこれらの研究は、来年度から開始される市立小中学校の校内 LAN 整備事業のあり方や運用についての貴重な資料となるとともに、各学校情報教育担当者の校内 LAN 運用のスキルアップに大いに貢献した。

■ 3 平成 12 年度の研究実践

平成 12 年度は、国の委嘱事業として教員情報リテラシー向上に関する事業が始まった。

委員会ではこれを受けて、すべての市立学校が 10、11 月の情報月間に参加できる共同学習や交流学習を企画した。準備期間が短かったため全市的な実践は行うことができなかったが、次年度以降につながる 8 つの実践グループの立ち上げと、事前授業を行うことができた。

これらの授業企画は、現在開発中の教育用コンテンツ開発事業「マップ型学習調査システム」を利用することで、より多くの学校が参加することが可能になる。

(1) 英語科「Let's Learn through the Internet」

昨年度に引き続き、今年度は八軒中学校で初任者情報教育研修を兼ねて実践が行われた。授

業で利用可能なサイトやハンドアウトを登録していくことで、多くの英語科の教師が活用することができる。

(2) 総合「落ち葉」

今年度は高森東小学校に引き継がれ、前年度とは異なった視点で授業が行われた。

(3) 総合 「仙台・川」

「仙台・川」グループの研究は、それぞれ環境の異なる川を題材に、総合、環境教育の一環として、3つの小学校が交流学習を展開した。

(4) 総合 「バリアフリー探検隊」

「バリアフリー探検隊」は、東六番丁小学校と七北田小学校が取り組んだ共同学習である。JR仙台駅と市営地下鉄泉中央駅周辺でそれぞれフィールドワークを実施した。総合的な学習の時間では、福祉教育が取り上げられることが多い。全市的なバリアフリーマップを児童生徒の手で作成できればすばらしいことである。

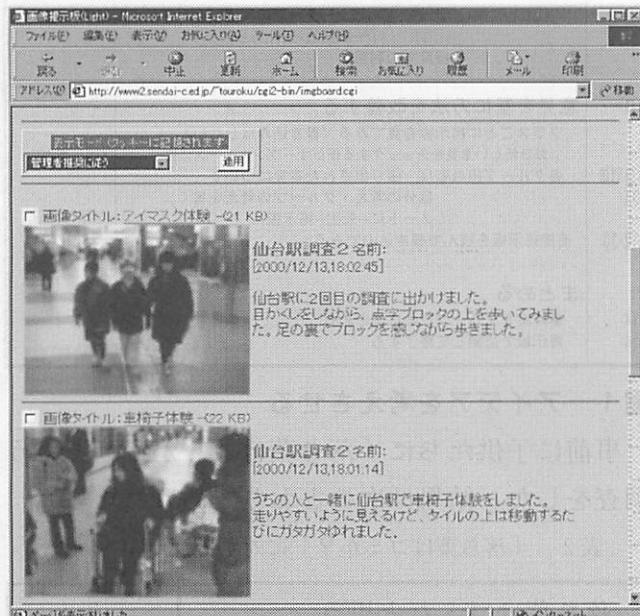


図3 「バリアフリー探検隊」の交流学習掲示板

(5) 総合 「地名」

「地名」研究グループは、仙台市内の町名や地名の由来を調べ、掲示板で交流することによって、それらの歴史的背景と現状、そしてこれからの町づくりを考えようという企画である。今年度は荒町小学校で授業実践（初任者情報研修授業提供を

兼ねる）が行われた。

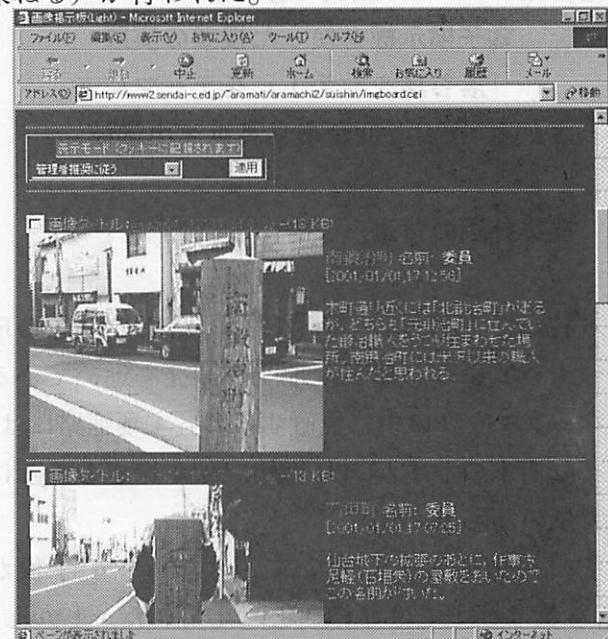


図4 「地名」の交流学習掲示板

(6) 環境 「環境家計簿」

「環境家計簿」は、学校や家庭での電気、ガス、水道、灯油等の消費量を二酸化炭素排出量に換算し、グラフ化し、環境教育のための基礎データを提供する。来年度の本格的な運用を目指し、現在研究が進められている。

(7) 図書館教育 「本の帯作り」

「本の帯作り」研究グループの実践は、古城小学校と八乙女中学校で行われた。図書館教育においては、従来から読書指導や利用指導の一環として本の帯作りが行われてきた。来年度は、参加校を増やし、サーバーに作品を蓄積していくことで交流を図っていきたい。

(8) 技術・家庭科 「梵天丸」

「梵天丸」による実践研究は、今年度七北田小学校と連坊小路小学校による交流学習と、富沢中学校において授業実践が行われた。小学校では総合的な学習の時間、中学校では技術・家庭科「プログラムと計測・制御」の題材構成に有効な教材であり、今後ネット上で実践を支援するライブラリや情報交換のための掲示板を充実させていくことで、今後の広がりが期待される。

【落ち葉グループ実践事例】

電子掲示板を使った授業の実践

—「落ち葉を救え！」をテーマに— 仙台市立高森東小学校

I 授業計画の背景

本校は、1972年から「人間のための理想の環境づくり」を理念に三菱地所が開発を進めている泉パークタウンの中に位置する。各主要道路には、様々な樹木の並木があり毎年、秋が過ぎるころには大量の落ち葉が出る。

その「落ち葉」に対して、8割近くの子供が「落ち葉はゴミではない」と考えていた。しかし、各家庭が集めた落ち葉を、家庭用の肥料として再利用したり、市から委託された業者が集めたものを再利用したりすることもあるが、ほとんどの「落ち葉」はゴミとして処分されている現状にある。

のことから「ゴミになってしまふ落ち葉を少しでも減らす工夫」を考えさせ、子供たちの思考を揺さぶり、考えを深めていくねらいで、「落ち葉を救え！」の指導計画を立てた。

子供たちが考えた「ゴミになてしまふ落ち葉を減らす方法」をいくつか電子掲示板上に公開し、一般の方々から広く意見をいただきながら、自分たちのアイデアを深めたり、アイデアを具体的にするのに利用できるのではないかと考えた。

II 授業の設計と経過

本校5年生（児童数97名・3クラス）の「総合的な学習の時間」として、年間105時間が割り当てられている。そのうちの15時間を「落ち葉を救え！」の学習にあて、昨年11月を中心にして実施した（表1）。

表1 5年生「落ち葉を救え！」指導計画（15時間）

2000.10.6

時間	活動内容	学習形態
①	ゴミ拾い ゴミ拾いをする 拾ったゴミに落ち葉はあるか? 問題提起	クラス単位
②	落ち葉はゴミか？考える 自分の考え方—ゴミだ・ゴミではない—をノートに書く 西多賀小の掲示板を読む 根拠を持って自分の考え方を書く 自分の考え方を支える意見・反対意見	クラス単位
③	高森東の場合を考える ゴミになっている現実・資料・写真 ゴミを減らさなくてはいけない現状-4年次の学習 ゴミになる落ち葉を減らさなくてはいけない なぜゴミになっているか調べる—工夫するポイント 家庭・三段階所から聞いてみる	クラス単位
④	聞いてきたことを発表しあう 今後のテーマ確認	クラス単位
⑤	ゴミになる落ち葉を減らす工夫を考える 各自で考える 考え方を短冊で書き出す クラスで考える	クラス単位
⑥ ⑦	7行7を絞る・グループ化・現実性も考えて 自分たちですること・地域に提案すること 学年で考える-4つの方法 掲示板で一般公開・意見を募る(11月4日) (細川先生に依頼一別紙提案) 1回問 保護者・地域関係者参加の呼びかけ 学年・学校たよりで 教育センターのページで 学校のコンピューター室の利用 一般開放・条件あり 授業での利用	クラス単位 学年単位
⑧	意見を基に方法を改善する クラスごとに掲示板を見てみる(書き込みはしない) (毎日新しい意見をチェックする係がオープンスペースに掲示。)	(当番)
⑨ ⑩ ⑪	各グループ担当者は、取り出された意見について 自分の考え方・グループの考え方を書く ノートに--先生--掲示板に	クラス単位
⑫ ⑬	直接掲示板を読んで書き込んでみる	
まとめる		
⑭ ⑮	最終案をグループごとにまとめる 掲示板で公開して終了する	

■1 アイデアを考えさせる

事前に子供たちに「落ち葉はゴミか？」という調査をした。結果は次のとおりであった。

表2 「落ち葉はゴミか？」に対する意見

落ち葉はゴミだと思う	18人
落ち葉はゴミではないと思う	77人

10月23日に地域のゴミを拾い集める学校行事を実施した。当日「落ち葉」は、さほど落ちていなかったが、下校途中にゴミ袋に詰め込まれた沢山の落ち葉を見つけた。これをきっかけに自分たちの考え方と現実とのギャップを理解さ

せ、焼却される「落ち葉」を少しでも減らし、ゴミにしないよう自分たちでできそうな工夫を各自考えさせた。考えついたアイデアは、すべて教室の壁にはり出し、子供たちにそれぞれ自由に討議させ、落ち葉を減らすのに適したアイデアかどうかを論点にアイデアを絞っていった。その結果11月4日に7つのアイデアを電子掲示板に載せることにした（表2）。

■ 2 電子掲示板の準備

子供たちがアイデアを考え、絞り込んでいくのと平行して、教師側が電子掲示板の骨組みを考えた。

宮城教育大学の鶴川義弘助教授には、掲示板の作成と運用管理をお願いした。また、ツリー構造の方がより分かりやすくなるのではないかとのご指導も受け、情報の収集と発信にツリー構造を取り入れることにした。

アイデアと説明文は、子供たちが話し合い作文にしたもので、夢のような話のものもあるが、子供たちにとっては真剣に考えたものである（表3）。

表3 電子掲示板の内容

アイデア1	公園で肥料（ひりょう）を作ろう！
アイデア2	腐葉土（ふようど）を作る施設（しせつ）を作ろう
アイデア3	学校で肥料（ひりょう）を作ろう！
アイデア4	落ち葉を家の周りで肥料(ひりょう)にしよう
アイデア5	公園に落ち葉を埋（う）めよう
アイデア6	家の庭に埋（う）めて土にもどそう
アイデア7	落ち葉製品（せいひん）を作ろう

■ 3 電子掲示板の公開

11月9日からWeb上で公開した。公開してから、書き込みの協力をさまざまなところ（団体、メーリングリスト、個人など）に、口頭、文書、メールなどでお願いした。

保護者宛てには、簡単に電子掲示板の書き込みの仕方なども記した印刷物を配布した。また、

仙台三菱地所泉パークタウンのwebページにこの電子掲示板をリンクしていただいた。

■ 4 意見を読む

自分たちのアイデアに対して、書き込みが来たこと自体が、子供たちにとっては、ものすごい刺激であった。中には反対意見もあったが、それを読んでめげることなく、「どうすればいいか教えてください。」とか、さらに意見を求め、それにまた返事が来た。こうしたやり取りは、子供たちにとってとても魅力的であった。

ツリー構造は意見をまとめるのに適しており、5年生でも十分理解できた。書き込みの順番に並べ替えたりと、使い分けることもできた。

一般の方々からの書き込みは、5年生であることを念頭に、わかりやすい文章が多かった。また、教師側の期待以上に丁寧にアイデアについて、具体的にどう進めれば実現できるのか示唆してくださったものもあった。

■ 5 掲示板の書きこみ

自分たちの掲示板を見る前に、他校すでに実践されている掲示板を閲覧させた。不適切な表現等もあり、自分たちが書くときには、①フルネームで書かずひらがらで名前を書こう、②他人の名前を使ったりしない、③相手が傷ついたりしないような文章で書こう、④反対意見を書くときは理由もきちんと書こう、の4点については特に強く指導した。

電子掲示板に書き込むときは、まず下書きをして担任に見せ、内容のチェックとあわせて文章指導もした。しかしこうすると返事一つ書くのに大変時間がかかり、子供たちは思うように返事が書けなかった。刻々と来る書き込みにどう対応できるか課題が残った。

■ 6 調べる

電子掲示板の書き込みには、質問も多くそれ

に答えるために、子供たちは調べて答えることが必要となった。計画を立てた段階では、活動が限定され調べる活動に発展しないのではと懸念したが、電子掲示板への書き込みのおかげで予想以上に、子供たちはいろいろなことを話し合い、調べる内容や方法にも幅が生まれ、充実した調べ学習になった。

■ 7 調べたことをまとめる

これまでの経過や調べたことをグループごとに模造紙を使ってまとめ、12月1日の保護者参観日に発表した。その発表を基に教師がWebページをつくり12月10日に公開した。

■ 8 学習成果の公開

学習のまとめを、協力を呼びかけた方々、電子掲示板に書き込みしていただいた方々や団体にお礼を含めて、web上で公開した。

III 考 察

■ 1 電子掲示板の活用

掲示板への書き込み総数は347件で、約半数が外部からの書き込みであった。

本実践では、子供同士の意見のやり取りよりも、より詳しい人から情報をもらうことを主眼にした。その点ではよく集まったが、地域からの声がもっと欲しかった。

「落ち葉」に関して興味・関心はあっても電子掲示板を見て、書き込んだりできなかった地域の方々が多くいたと思われる。こうした方々の声を集めることは、残念ながら今回指導計画の時間配当内ではできなかった。

電子掲示板におけるツリー形式は、どの意見について意見を述べているのかがよく分かり、自分の考えを深めるのに大変有効であったと思われる(図1)。

- [22] 落ち葉を肥料にする 2000/11/27(月)16:16
- [21] むずかしいと思う。 2000/11/27(月)16:13
- [20] 公園の落ち葉 2000/11/27(月)16:13
- [19] 落ち葉について 2000/11/27(月)16:10
- [18] だれの公園? 2000/11/21(火)12:13
- [17] re(1)だれの公園? 2000/11/21(火)16:47
- [16] re(2)だれの公園? 2000/11/27(月)10:27
- [8] 木の根本は堅いのだ 2000/11/17(金)10:18
- [9] re(1)木の根本は堅いのだ 2000/11/20(月)14:21
- [6] いいします(ーー) 2000/11/14(火)18:22
- [14] re(1)いいします(ーー) 2000/11/21(火)14:20
- [15] re(1)いいします(ーー) 2000/11/21(火)14:40
- [5] 公園に落ち葉をうめまひよか! 2000/11/14(火)14:01
- [4] とっこ埋めるのだ!!!! 2000/11/14(火)13:58
- [3] 公園フラワー作戦 2000/11/14(火)11:52
- [1] だれの公園? 2000/11/13(月)21:57
- [2] re(1)だれの公園? 2000/11/14(火)11:30
- [7] re(2)だれの公園? 2000/11/15(水)18:04
- [12] re(3)だれの公園? 2000/11/21(火)14:04
- [13] re(2)だれの公園? 2000/11/21(火)14:16
- [11] re(1)だれの公園? 2000/11/21(火)14:01
- [17] re(1)だれの公園? 2000/11/22(水)00:51

図1 掲示板に寄せられた意見のツリー構成の例

■ 2 総合的な学習のテーマとして

授業を始める前には、このテーマで総合的な学習が組めるのだろうかという危惧があった。

実際には、そうした教師側の予想とは異なり、「落ち葉はゴミか?」という討論から発表会、学習のまとめまで子供たちは、意欲的に取り組んだ。

その過程で子供たちは、自由に発想をふくらませ「落ち葉製品を作ろう」とか「落ち葉を食べよう」とか、教師の考えも及ばなかったすばらしいアイデアを生み出した。

今回は、学区が住宅地で街路樹がたくさんあり、ゴミとして捨てられる落ち葉が大量に出ていているという地域性もあり、同じような条件であれば同様の実践が行えると思われる。

参考文献

泉パークタウンサービスー会社案内

http://www.izumi-parktown.com/fr_pts.html

【仙台・川グループ実践事例】

学校用グループウェアを用いた交流学習

－3校による「仙台・川プロジェクト」－

仙台市立太白小学校

■ 1 はじめに

幸町南小学校、中田小学校、太白小学校では、それぞれ学校近くを流れている梅田川、名取川、笊川を使った環境学習を展開していた。1校だけで環境教育を展開するよりも、積極的に情報を交換することによって、他地域の河川と比べたり、地域の河川を深く調べていったりすることが可能になるであろうと考え、3校による学校間交流「仙台・川プロジェクト」を行うことになった。

交流に当たっては、小学生の交流では文章や写真だけでなく、お互いの顔が見えることが有効であると考え、テレビ会議システムを併用しながら進めることにした。

■ 2 学校用グループウェアによる交流学習

今回のプロジェクトで交流学習のツールとして選んだのはスタディノートである。

その理由としては、3校だけが閲覧することができる閉じた掲示板を使用することができることなど、その使い勝手の良いインターフェースの機能があるからである。文章だけではなく、デジタルカメラで撮影した画像や図、動画なども小学生が簡単に利用できる設計になっている。

■ 3 プロジェクト推進のための指導者側のコミュニケーション

担当者の連絡にはメーリングリストを利用した。また、テレビ会議を使用しての交流授業では、電話やFAX、携帯電話等の通信機器を十分に活用した。

しかし、プロジェクトを進行していくにつれ、間接的なコミュニケーションの方法だけではどうしても意志の疎通に限界があり、定期的に現状を

報告し合うなどの連絡を欠かさないようにすることが重要だった。

また、それ以上に問題になったのが、3校間の交流内容や日程等のすり合わせである。学校それぞれに異なるカリキュラムがあり、研究内容も違っているわけであるから、授業スケジュールの調整はもちろん、子どもたちの活動、担任との打ち合わせ等々、コーディネートしなければならない点が多くあった。

■ 4 学習環境と児童のリテラシー

太白小学校は仙台市南部の太白団地にあり、全校児童350名ほどの規模である。笊川は学区内を流れしており、太白学区内より上流には家屋がほとんどない。学区内にある施設「太白自然の森」には自然レンジャーが常駐しており、植物や生物について調べるときには適切なアドバイスを入手できる。

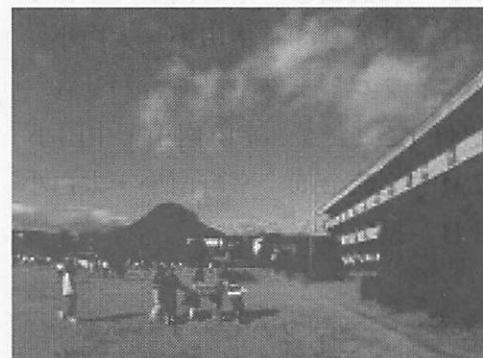


図1 太白小学校と太白山

コンピュータを利用した授業は1学年から6学年まで実施されており、年間平均40時間ほどの利用時数である。主な利用はスタディノートを使用したものが大半であり、総合的な学習のほか、教科においても利用されている。

■ 5 学校間交流学習の実際

笊川は上流に位置し、自然が豊かである。それに対して梅田川は都市部に位置しており、近年河川の汚れが問題となっていた。また名取川

は、太白区で唯一大きな川である。不法投棄によるゴミ問題が発生している。

このように異なる河川を取り上げているのに加え、取り組む学年もそれぞれ違い、異学年交流となつた。今回の交流は地域の川を報告することを通して、共通項や差異を見いだしたり、教えあつたりしながら地域の河川を見直す機会を作りたいと考えた。

(1) 交流学習の経緯

6月 14日 情報教育研究推進委員会①

平成 12 年度の計画についての協議

7月 17日 情報教育研究推進委員会②

「仙台・川」プロジェクト企画成立

9月 12日 プロジェクト打ち合わせ①

9月 22日 情報教育研究推進委員会③

10月 3日 プロジェクト打ち合わせ②

10月 18日 交流会① 幸町南小・太白小

10月 18日 交流会② 幸町南小・中田小

10月 18日 交流会③ 中田小・太白小

11月 13日 プロジェクト打ち合わせ③

12月 8日 交流会④ 幸町南小・中田小

12月 12日 交流会⑤ 幸町南小・太白小

12月 12日 授業検討会

(2) 交流テーマについてのすりあわせ

交流学習を実りあるものにするためには、共通するテーマ毎に問題を深めることができるように掲示板を工夫しなければならない。それぞれの学校が学習問題を出し合いながら、最終的にスタディノート上に、①水質、②植物、③生物、④環境、⑤その他、計五つの掲示板を設置した。

子供たちは自分の学習問題に沿ったスタディノート掲示板に、調べた経過や質問などを掲示しながら、テレビ会議に向けて交流を深めていった。

5回目のテレビ会議システムを利用した交流授業は、幸町南小学校（6学年）と太白小学校（4学年）との間で行われた。

太白小学校では指導計画の最終場面に位置付け、「幸町南小学校の友だちとの意見交流や情報交換をしながら、川調べの意欲をいっそう高めるとともに、地域の自然環境に目を向ける」というねらいにした。

具体的には、お互いの小学校で調べた内容を発表し合いながら、感想や意見の交流を行つた。残念ながら音声の調子が悪かったにもかかわらず、子供たちのアンケートでは「いろいろな考えがあることが分かった」「自分より年上の人には考えることが違っていて、詳しく説明してくれてわかりやすかった」等の意見が出された。

反面、交流はインターネット掲示板のテーマを中心に進められたが、自分の学習問題とのかかわりを見いだせない子供も多かった。テーマ相互の関連を子供たちに気付かせる指導とともに、テーマ毎の部分を取り上げてテレビ会議システムを実施する可能性も感じた。

(3) メディアの活用

今回の交流学習で中心となったメディアはコンピュータとテレビ会議システムである。また、学習の経過を記録し、交流先へ送信する情報を作成するのにはデジタルカメラが活躍した。MPEGムービーも利用できるが、今回は効果的な利用法は見られなかった。ムービーはコミュニケーションの手段としての可能性もあることから、積極的に活用することが望まれる。

太白小学校ではテレビ会議システムを3回実施した。これはスタディノートの交流学習を補完する目的で使用した。実際に交流先の子供たちの顔を見ながら交流する効果は大きかった。

反省点としては、まだテレビ会議システムに慣れておらず、使用することで満足する傾向が見られた。また、情報を伝えるだけのメディアになってしまった傾向があるので、電話のように自分の言葉で話すことができるようになるための指導と工夫が必要である。

しかし、4学年と6学年の異学年の交流であつたにもかかわらず、6学年から4学年へ教えるだけの交流にならず、お互いに発表しあい、意見を述べあうことができたのは今後の異学年交流の可能性を感じた。テレビ会議当日までに、子供たち同士のコミュニケーションを深める工夫をすることにより、より自然な形での交流学習を進めることができることがわかった。

■ 6 交流学習の成果と課題

(1) 成果

①異河川による学校間交流の実現

異河川による学校間交流でも、地域の河川を実際に調べることを通して出された学習課題を練り上げることにより、共通するテーマを設定することができた。

②異学年による学校間交流の実現

異学年でも情報の流れが一方的にならず、対等な形で交流ができた。また、4学年の子供たちは6学年の子供たちの調べ方や発表の仕方から学んだことが多く、これも異学年交流の効果と考えられる。

③スタディノートとテレビ会議システム

スタディノートとテレビ会議システムのメディアの違いをそれぞれ生かした交流をすることができた。交流学習におけるメディアの特徴を生かしながら有効に活用したケースとして、今後の利用を積極的に進めたい。

④ネットワークを通してのコミュニケーション

スタディノートでの交流学習を進めてからテレビ会議システムで直接顔を見ながら話をする。このような経験を重ねることにより、ネットワークの向こうの人間の存在を自然に体感できたことは重要なことと考える。小学校段階においては、顔の見える関係でのコミュニケーションを重視する必要を感じた。

⑤追究意欲の継続

誰に対して表現するかを明確にすることにより、子供の追究意欲が高まった。さらに表現したことに対する反応が得られたのは、子供にとって今までない経験であった。

⑥地域の河川とのかかわり

笊川以外の河川の実情を知り、笊川と比べることにより、自然に恵まれた笊川の特徴をより自然に感じることができたようである。当たり前に存在していた自然豊かな笊川を違った視点で見ることができるようにになったのは、交流学習の大きな成果と言える。

⑦太白自然の森との関係

これまで地域にありながら活用の度合いが低かった「太白自然の森」のレンジャーさんに多くのことを教えていただいた。多くの種類の生物が生息していることやその資料の多さに、子供たちは今更ながら驚いていた。今後の積極的な活用が期待される。

(2) 課題

①スタディノートの活用

コミュニケーションツールであるグループウェアに慣れていないため、効果的なサブジェクトの設定ができなかったり、要領よくまとめられたりする多かった。スタディノートをより効果的に使用するためのスキル向上が望まれる。

②テレビ会議システムの柔軟な活用

学年全体、あるいは学級全体での活用が前提であった。短い時間、グループ毎、3校同時等、さまざまな形態を柔軟に使いこなすことができれば、より効果的なツールとして威力を発揮すると思われる。

③子供同士のコミュニケーション

学習場面だけでなく、お互いの学校を紹介しあうなどの活動をより充実させたい。そのためにはビデオレターや実際に会って交流する場面なども積極的に設定したい。

II 先進的教育用ネットワークモデル地域事業

■ 1 事業概要

教育センターを拠点とした小学校、中学校、高等学校を高速回線（512K～1.5M）で接続する地域教育用ネットワークにおいて、学校教育におけるインターネットの有効活用や地域教育用ネットワークの在り方について、先導的な研究を行い、学校教育の改善・充実に資するを目的とし、現在、25校が指定を受けている。

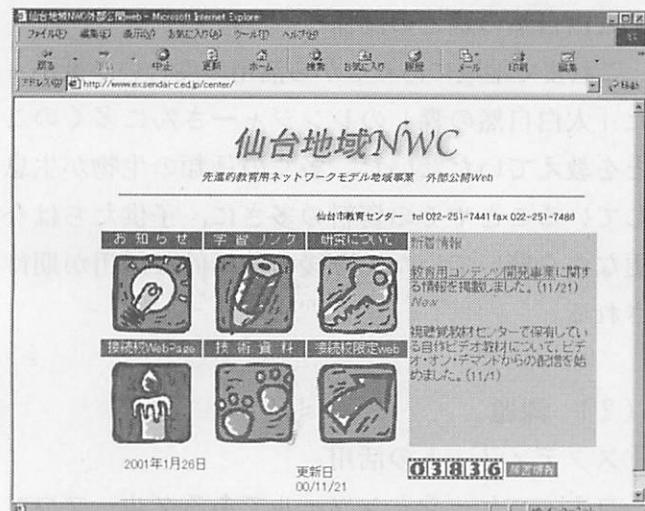


図1 仙台地域ネットワークセンターフロントページ

■ 2 研究テーマと重点課題

本市では、先進的教育用ネットワークモデル地域事業の研究テーマを「仙台市が保有する情報環境及びコンテンツを活用した共同の『学習空間』の創造－地域教材データベースの構築及びVODサーバの連携等による」とし、実践上の課題を以下の3点に押さえ、実践を通して明らかにしようと試みた。

- (1) ネットワーク活用の在り方について
 - ・実態に応じたネットワーク活用学習の在り方を探っていくため、各学校において研究推進計画を作成し、校内教職員の共通理解を図り実践していく。またそのための校内研究体制はどうあるべきかを検討する。

- ・各校種ごとに児童生徒の実態を調べ、意欲の向上を図りながら、望ましいインターネット活用の方策を探る。

- ・ビデオ・オン・デマンドの活用場面を想定し、授業へ積極的に取り入れ、活用による効果と問題点を探る。

(2) 学校間交流や共同学習の在り方について

- ・学校間交流や共同学習の有効性と課題を踏まえ、望ましい交流学習の在り方について探る。
- ・電子メールや電子掲示板、TV会議等の活用により、児童生徒のコミュニケーション能力の育成を図る。

(3) Webページの作成活動について

- ・各学校でWebページを作成し公開することにより、学校からの情報発信の在り方を探る。
- ・児童生徒の表現活動の場としてWebページの効果的な利用方法を探る。
- ・校内でWebページを作成することで、プライバシーの保護や著作権保護等についての在り方を探る。

なお、平成13年3月末現在で、指定を受けた25校すべての学校がWebページを立ち上げ、積極的な研究活動を続けている。

■ 3 實践事例紹介

「テレビ会議システムによる交流を取り入れた環境教育の実際」

芦口小学校

- (1) 単元名 「めざせ米博士！」（6年）
- (2) 目標

水田についての体験学習や調べ学習、他地域との交流などを通して、水田の豊かな環境や、環境に配慮したこれから農業の在り方について学習するとともに、自分たちの行動の在り方について考えることができる。

(3) 指導の手立て

①直接体験の重視

- ・田植えや稻刈り等の直接体験
- ・水田の周りに住む生物の調査
- ・ミニ水田やバケツによる稻の栽培

②マルチメディアの活用

- ・直接体験を支援し、水田の環境を探るための手段としてのマルチメディア
- ・農家や関係機関とのEメールによる交流
- ・インターネットによる調べ学習
- ・テレビ会議による交流
- ・Webページからの学習成果の公開

③話し合い活動の重視と表現力の育成

- ・ポスターセッションやパネルディスカッションへの取り組み
- ・体験活動を新聞形式でまとめ、最終的にWebページにて公開していく

(4) 活動の経過

- 平成10年度から南方町板倉農産の協力により、13aの水田を借りられることになり、同時に学校の敷地にもミニ水田を作り、水田についての学習環境を整えてきている。
- 児童一人一人が米に対する疑問や課題について調べ、水田の豊かな環境について追究していくことで、環境に対する様々な考え方につなげ、自然と人間が共生する社会の大切さを学べると考え、総合単元（50時間扱い）を設定した。
- 南方町での田植えや稻刈り等の体験学習のほかに、学校で行ったミニ水田、バケツでの稻の観察などの活動から、品種の違いや水田での生育の違いなど、米に対する様々な調べ学習を開拓した。
- インターネット等による調べ学習についても日常的に行えるようになっている。ただ、インターネット等で分からぬ部分については、電子メール等のメディアを利用し、実際の農家との交流を継続してきている。

(5) 活動計画（下表）

表1 活動計画

学びの姿	小単元名	時間	ねらい	活動内容	時数
ふれあう	田植えにトライ	11	いろいろな農法があることを知り、春の水田の豊かな環境にふれる	・田植えの準備をしよう ・田植えにでかけよう ・田植え新聞をつづろう ・学校にも田んぼをつづろう ・バケツに苗を植えよう ・調べたい課題を持つ	1 5 2 2 1
つかむ・追究する・表現する	ぐんぐん育て私たちの稻	20	他地域と情報交換したり、課題について調べたりすることを通して、水田の豊かな環境のよさに気づく	・南方町にメールを送ろう ・課題について調べる ・鳥から稻を守る方法を考え実行する ・他地域と情報交換する ・調べた課題をまとめよう ・調べたことを発表しよう	1 2 2 3 4 2
	収穫しよう	12	収穫の喜びを感じ、秋の水田の豊かな環境にふれる	・稻刈りの準備をしよう ・稻刈りに出かけよう ・稻刈り新聞をつづろう ・学校の田んぼの稻刈りをしよう ・収穫祭をしよう	1 5 2 1 3
行い広げる	発信 米博士から世界へ	7	自分たちの体験や調べたことを通じて考え、自分なりの行動を起こすことができる	・これからの農業や、環境について自分のできることを考えよう ・自分たちの体験や調べたことをホームページにして発信しよう	2 5

(6) マルチメディアを利用した授業の実際

ア) 日時 平成12年12月1日5校時

パネルディスカッション「21世紀の稻作」

イ) ねらい

これまでの体験や調べたことを通して、21世紀の稻作について、自分なりの考えをもつことができるようとする。

ウ) マルチメディアの利用

児童によるパネルディスカッション「21世紀の稻作」を行ったが、その際テレビ会議システム（ISDN利用による）を使用して、一年を通じてお世話になってきた南方町の阿部さんにも参加してもらった。

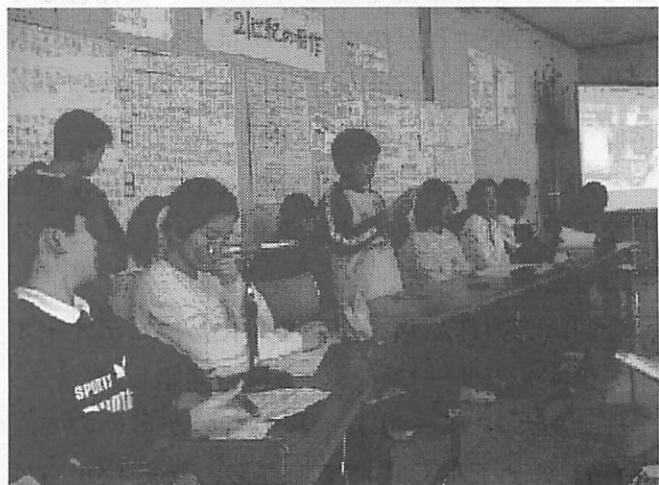


図2 パネルディスカッションの様子

児童の話題は「未来のアイガモ農法」「無農薬による稻作」など、これまで環境について学習

してきたことをもとに、児童なりに夢を膨らませたものになった。討論途中で阿部さんからのアドバイスもあり、建設的な話し合いをすることができた。

エ) 考察

テレビ会議システムについては、昨年度から何回か実施しているが、今回はパネルディスカッションで専門家の立場からアドバイスをもらうというスタンスで実施した。

一年を通じてお世話になった阿部さんのアドバイスは、児童にとって身近であり、また説得力のあるものであった。

インターネットやテレビ会議システムは、あくまでも体験活動を補うためのツールとしての位置づけである。

しかし、遠隔地にある実習田を常にリモートセンシングにより観察できたり、必要な場合には協力者である阿部さんと電子メール等でコミュニケーションを図れたりするなど、使い方によっては、これ程児童の学習を支援してくれるツールはほかにはないだろう。

■4 ビデオ・オン・デマンドの活用について

仙台市では、教員による視聴覚教材の自作が盛んである。仙台市視聴覚教材センターで保有している自作ビデオ作品のストックは120本余りにも及び、これらは複写サービスによって、希望する学校へ配布している。

ただテープ媒体による保管のため、劣化は免れなく、早期のデジタル化が求められていたところであった。

今回、この作品類をデジタル化し、ビデオ・オン・デマンドサーバーへの蓄積を開始した。

1作品あたり15~20分前後のものが多いので、mpeg1ファイル形式にて保存し、接続校からはいつでもダウンロードできるように整備している。

事業開始当初は、接続校で相互に利用できるよう自作のビデオ教材等を提供してもらうことを呼

びかけた。しかし、なかなか思うように集まらなかつたため、とにかく接続してすぐに利用できるコンテンツを蓄積することを優先させた。

■5 事業の考察

(1) ネットワーク活用について

接続している25校については、必ずしもインターネットやコンピュータの堪能な職員がいる学校ばかりとは限らないため、まず各学校で何ができるのか、どのような研究を目指すのか、十分に話し合いをもって長期的な展望に立って研究を進めてもらうようにした。

ある中学校では校内研修を中心に、各教員のリテラシー向上を図り、授業での活用が大幅に増えた。

高速の回線であるため、動画像の配信等が可能であるが、どのようなコンテンツを蓄積していくば、学校で利用してもらえるのかがは、今後の課題といえる。

(2) 共同学習、交流学習の展開

実践例で紹介した芦口小学校のほかに、仙台川プロジェクトで3校の交流を行った太白小学校、バリアフリー調査を行った東六番丁小学校、町名調査をした荒町小学校と、Webページ上の電子掲示板を利用した共同学習や交流学習に積極的に取り組んだ例が報告されている。

今年度は総合的な学習の時間の試行に伴い、インターネットや情報機器を調査や表現のために効果的に利用した学校が多かった。

(3) 技術的側面の課題

新しい接続方式を用いているため、従来では予測できなかった様々な問題も生じていて、何度もネットワーク全体のトラブルも発生した。ヘルプデスクとの連携により、迅速な対応を目指したが、それでも課題は多く残っている。

III 教員情報リテラシー向上プロジェクト事業

■ 1 事業の経緯

教員情報リテラシー向上プロジェクトは、ミレニアムプロジェクト（平成11年12月）の一環として、現在、全国の自治体で行われている平成13年度までにすべての教員がコンピュータを操作でき、そのうち最低半数はコンピュータを使って指導できることが目標とされ、平成12・13年度の2か年が事業期間となっている。

仙台市教育委員会ではこれを受け、平成12年3月から具体的な事業の検討に入った。

そこで、年3回、全市立学校の情報教育担当者連絡協議会（以下「協議会」）を開催し、各学校においては担当者を中心に、最低2回以上の校内情報教育研修会を実施するよう要請した。

名称を「平成12・13年度仙台市教員情報リテラシー向上プロジェクト事業」（以下「事業」）とし、実施に先立ち、平成12年4月の合同校長会と学校経営要録等説明会で、事業目的と概要を説明し、学校現場の理解を求めた。

なお、第1回の協議会は5月に実施した。

■ 2 事業の4つの方針

事業を立ち上げる際、学識経験者に助言をいただき、前述した情報関連事業と連携しながら、次の方針に基づいて事業に取り組んでいくことを確認した。

これからの教育情報ネットワークは、高度情報化社会に生きる、よりよい市民の育成を目指さして、運用がなされなければならない。

その方策の一つとして、毎年継続できる全市的な共同学習や交流学習の取組を企画し、市立学校教員、児童生徒がその企画にみんなで参加することで、実践を共有の財産にすること。二つ目として、その実践の過程で緊急な課題であるネットワーク社会における情報モラルが、自然に身に付いていくよう工夫すること。三つ目は、これら

の実践を小中高の段階で何度か繰り返していく中で、ITと共生しながら、高度情報化社会の中でよりよく生きていく力を、児童生徒に身に付けさせていくということ。

そして四つ目は、コンピュータを操作できる教員、コンピュータで指導可能な教員とは、単にそれらの技能を身につけた教員という意味ではなく、例えば、上述した共同学習に取り組みながら、ネット社会の仕組みやルールを児童生徒とともに実感し、教師自身がNPO活動も視野に入れた形で、IT社会の中でよりよく生きていくことができるよう、事業を推進するということである。

■ 3 情報教育担当者連絡協議会の設置

（1）設置理由

これまで教育センターでは、各教科・領域の研修会に最低一コマは情報教育に関連した研修会を取り入れてきた。またインターネット夜間開放講座や情報教育の専門研修にも多くの受講希望者があり、特にインターネット関連研修会の受講者数は年々増加し、その要求レベルも高くなっていた。

一方、各学校の担当者レベルでは、インターネット接続環境の改善と相まって、担当者のネットワークに関する知識や技能のスキルアップ、授業での有効活用の在り方、情報モラルの問題、さらに学校からの様々な要望・意見について協議する場の設定が求められていた。

そこで、全市的な取組として現場の教員と行政とが知恵を出し合って、情報教育を推進していく場として、年3回の協議会を設置した。

（2）協議会の目標

平成12年3月の事業計画策定の時点で、協議会の達成目標として次の点が話し合われた。

第一に、最初の事業年度である平成12年度内に、全市立学校の担当者196名（分校、分教室を

含む)と事務局との間で、電子メールによる事務連絡や日常的な情報交換ができるようになる。

すなわち、教育改革や教育の地方分権化が進むにつれ、教育委員会や学校現場の事務量が一段と増加する傾向にある。そこで、学校現場のニーズに迅速かつ細かく対応することがこれからの行政に求められる。一方、行政サイドの情報を的確に伝えることもまた、これからの教育行政には必要不可欠である。電子メールは Web ページとともに、学校現場と行政とを結ぶ有効な連絡手段となる。

また、現在は市立学校全体で約 30% の実施率であるが、総合的な学習の時間等で海外、他県、他市町村との情報交換手段として電子メールの活用が盛んになる。その際、電子メールの基本的な使い方や、利用上のマナー習得が必要となる。

各学校に校内 LAN が整備され、セキュリティ等の問題が解決された段階で、こうした事務連絡や公用文の送付等が電子メールを使って行われるようになる。その本格的な運用の前に、各学校の情報担当者に電子メールの実際の活用法や、運用上の問題点等について周知しておく必要がある。また、担当者が校内情報研修会等を通して、他の全教員にもこれらの点について研修を行う必要がある。

第二に、各学校で行われる研修会の成果や参考資料を協議会で担当者に提示したり、それらを Web コンテンツとして蓄積していく。

これは、単に情報公開の面だけではなく、仙台市の情報教育における共有財産として、情報担当者の創意工夫による研修資料や成果を共有し、活用していくことが大切だからである。

教育情報ネットワークの活用というと、リンクが中心という状況がないわけではない。しかし、自ら情報をネット上に発信する経験がなければ、その地域のネット文化は育ち得ない。

平成 12 年度は、事業の初年度ということもあって、センターの事業担当者が電子メールで送付さ

れてきた資料をサーバーにアップロードしているが、平成 13 度は担当者自らが行うことも計画している。

第三に、教育情報ネットワークの運用に関する諸問題について、協議会に参加した担当者全員に理解してもらうということである。

すなわち、最初に教育情報ネットワークの運営方針である「ネットワークポリシー」について、正しく理解してもらう必要がある。

仙台市立学校教員や児童生徒が利用している教育情報ネットワークは、一般プロバイダ（接続業者）による接続サービスとは似て異なるものである。一般ユーザーは、自分が加入しているプロバイダから、直接インターネットの世界へ入ることができる。その世界は現実の社会となんら変わりはない。一方、教育情報ネットワークは、教育利用を目的とし、公費で運営されている。各学校では仙台市教育情報ネットワークを経由して、様々なインターネット上の Web サイトに無料でアクセスできる。また、仙台市教育センターで発行している電子メールの利用も無料であるが、これらは公費で負担しているわけである。

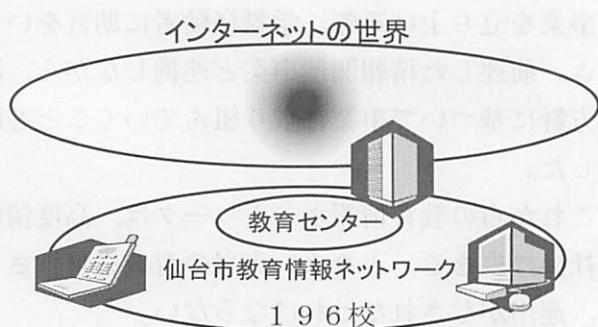


図 1 インターネットと教育情報ネットワーク

必然的に、そこには教育情報ネットワークとしての利用上のルールがある。こうしたルールを踏まえた上で、インターネットの教育利用をどのように進めていかなければならないか、実

践事例に基づき協議を進め、市立学校全教員、全児童生徒に周知されなければならない。

こうした違いについての自覚をしっかりと、学校教育の中での利用が進まなければ、学校教育における情報教育は、ネット犯罪の温床となりかねない。

(3) 協議会の内容

こうした啓発活動を行うために、協議会では担当者を経由して、各学校の全教員対象にその折々に重要な話題を掲載した「情報教育かわら版」や、「情報教育ハンドアウトⅠ・Ⅱ」を配布することにした。

また、第2回、3回ではそれぞれ適宜テーマを定めたパネルディスカッションを行った。現場の実践者をパネリストとし、学識経験者をコーディネータとして、校内情報教育研修会の進め方や、ネット社会における「共有」と「公開」の違い、インターネットの本質等、参加者にわかりやすい形の情報提供を行った。

各学校の情報化の実態は、Web上のアンケートフォームにより把握し、事業の成果について協議会の場で報告した。

■4 校内情報教育研修会

年3回の担当者協議会で得た様々なノウハウとともに、各学校では最低2回以上の校内研修会を実施してもらうことにした。研修内容は、1回目が操作技能に関するもの、2回目が授業で生かすためのものである。

研修会を年間2回実施するか、それ以上実施するかは、各学校の実状に応じて自由とし、内容についても、各学校の創意・工夫に任せることにした。

第1回担当者協議会では、研修事例として次のような研修内容を参加者に提示した。

【事例】

- ① ブラウザを起動し、検索エンジンを利用して文部省（現文部科学省）のwebページを開く。学習指導要領が掲載してあるページを開いて、担当教科の部分をコピーし、ブラウザを閉じる。

- ② ワープロソフトを起動し、先ほどのデータを貼り付ける。体裁を整え、文末に出典を明記し、印刷、保存する。

【解説】

デスクトップ上に表示されたオブジェクトは、ほとんどすべてがコピー＆ペーストができるという内容である。当然その過程では著作権の問題について意識させることができる。

また、国が今回のプロジェクトのために開発した研修用CD-ROMを積極的に活用することを勧めた。

■5 まとめ

紙面の関係上、ここでは事業のねらいを中心に述べた。なお、本事業の成果の詳細は、仙台市教育委員会情報教育研究推進委員会編「平成12年度ネットワークで広げよう情報教育2－情報教育実践事例集－」に掲載されているのでご一読願いたい。

電子メールやWebページによる学校事務の効率化については、教育開発研究所『教職研修10月号』(平成12年10月1日発行P72-75)に小論が掲載されている。

本事業は、国の施策として始まったが、その成否は、地方自治体の取組いかんということになる。

情報リテラシーの向上によって身に付く情報活用能力は、これから我々教員が取り組まなければならない新しい教育にとって、欠かすことができない資質と指導技術であるとともに、子どもたち自身が小中高の段階で、しっかりと身に付けていかなければならない資質もある。

IV 「教育情報衛星通信ネットワーク（エル・ネット）」の整備と今後の活用について

■ 1 「エル・ネット」構築の目的

文部省（現文部科学省）では平成11年7月から、文部省、国立教育会館、国立オリンピック記念青少年総合センター、国立科学博物館、各都道府県・指定都市の教育センター、社会教育施設、学校等を衛星回線で結び、教育プログラム、全国規模での教職員の研修プログラム、緊急性の高い教育課題への対応プログラム、学校週5日制の完全実施への対応プログラム等を相互に提供すること等により、教育の充実・教育の情報化を推進する目的として構築された。

■ 2 本センターの整備状況

本市においては、平成10年度に市内の教育関係者の資質向上を目的として、本センターにエル・ネット送受信装置が設置された。さらに、平成12年度、送信機能を有する局からの質問、意見交換等の双方向送受信機能の拡充を目指して機器の整備を行った。今回の整備により、下記のような機能の充実が図られた。

(1) 大研修室脇に操作卓を設置することによって、電波の状況（映像と音声）を確認しながら衛星通信を送受信できるようになった。そのため、他センターとの双方向の会議を円滑に行うことが可能となった。

(2) 大研修室のホワイトボード脇にパソコン映像をビデオプロジェクターに直接入力できるコネクターを設置することによって、各種の研修会や発表会におけるプレゼンテーションが楽になった。

(3) DVカメラの増設、ダウンコンバーターや親子画面表示装置の設置により、衛星通信番組の製作が容易になった。

(4) 大研修室、体育館及びスタジオから各研修室へのテレビの同時視聴が可能となった。

■ 3 活用状況

(1) 文部科学省等からの放送（双方向利用による会議等を含む）の受信

文部科学省等が行う研修講座や各種説明会等を地元において視聴できるので、時間的にも費用的にも効率的である。本年度配信されたものは、総て受信、特に次の内容は関係課との連携を図りながら有効に活用した。

- ・平成12年度衛星通信研修「新任小・中学校長研修講座」

平成12年6月15、16日受信

- ・平成12年度「小学校新教育課程説明会」

平成12年7月28日受信

- ・平成12年度「中学校新教育課程説明会」

平成12年8月2、3日受信

- ・平成12年度「高等学校新教育課程説明会」

平成12年8月4、7、14、15日受信

- ・平成12年度「文化庁日本語教育大会」

平成12年8月21日受信

その他、「こども放送局」の受信、教育行政関係の受信なども数回行っている。

(2) 都道府県・指定都市等教育研修センター等からの放送の受信

送信可能な教育センター等（V S A T 地球局）から、各地域における特性を生かしたアイディアあふれるプログラムや先進的な取組を視聴できる。本年度受信したものは下記のとおりである。

- ・岡山県教育センター「平成12年度教育相談研修（初級）」平成12年7月10日受信

- ・石川県教育センター「総合学習『河北潟を紹介しよう』」平成12年7月12日受信

- ・岡山県教育センター「平成12年度岡山県教育センター所員研究成果発表会」平成13年2月27日受信

(3) 本センターの取組

仙台市立学校への情報の提供、視聴室の確保、「e 1 - S T E P 」等の録画と貸し出し、及び主催事業「調査研究」の全国配信を行っている。

- ・仙台市立学校への年間配信予定表の配布。
- ・Webページでのエル・ネット概要、月別配信予定の提供を行う。
- ・文部科学省等から出された年間配信予定表とともに、エル・ネットを視聴できる研修室（主として第八研修室）の確保する。
- ・「e 1 - S T E P」（エル・ネットを活用した教員研修プログラム）、「エル・ネット『オープンカレッジ』」（エル・ネットを活用した大学開講講座）の録画と貸し出しを行う。
- ・センターの主催事業である「調査研究」の全国配信を行う。

■4 活用推進のための今後の取組（予定）

今後、エル・ネットの有効活用を図る意味から、次のような取組を進めていきたい。

（1）本センター主催の研修講座への位置づけ

本センター主催の研修講座の中に、配信された番組を可能な限り活用する予定である。そのためにも、文部科学省等から年間配信予定が早い時期に発表されることが望まれる。

（2）本センターからの発信

主催事業「調査研究」の全国配信だけでなく、センター主催の研修講座を配信することや各学校での特色ある教育活動を配信することによって、全国との双方向の意見の交換を進めていきたいと考えている。

教育情報衛星通信ネットワークシステムの整備

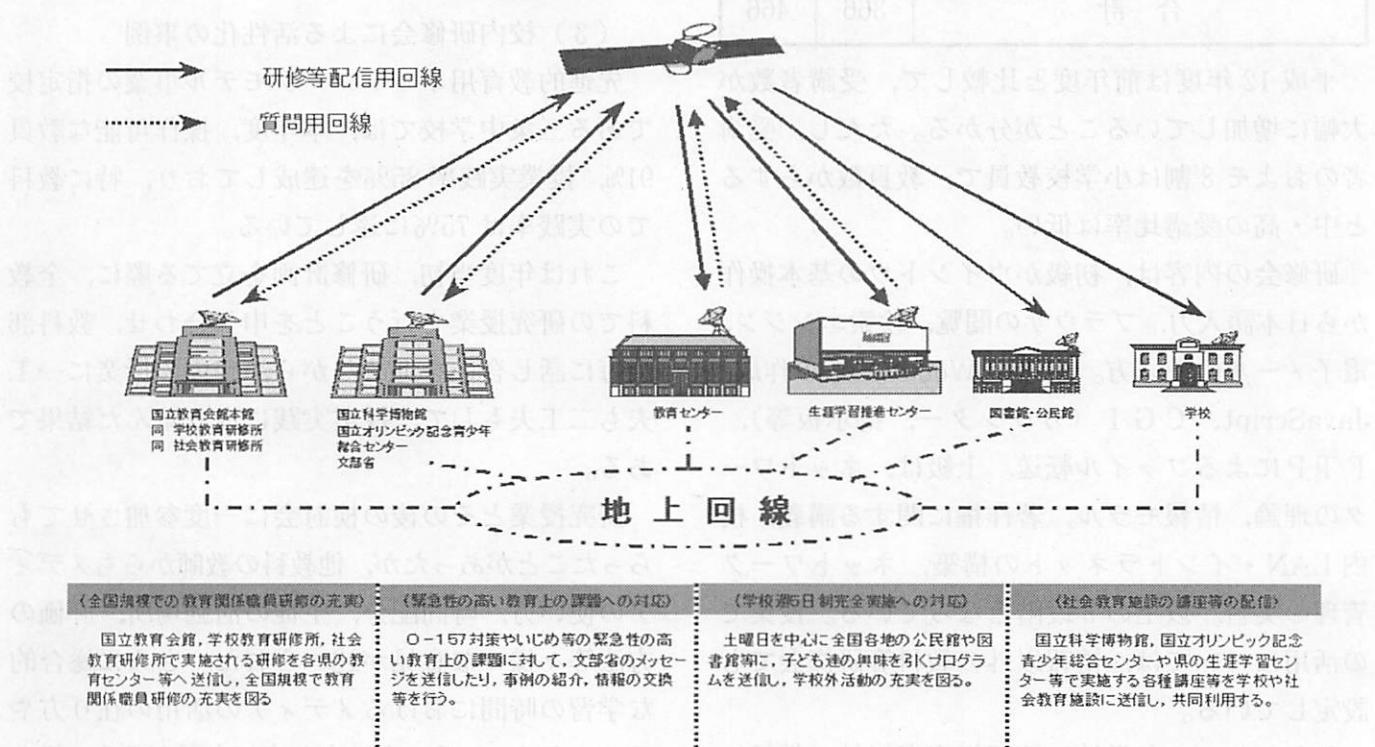


図1 エルネットの配信システム図

第3部 提 言

■ 1 校内研修会による情報教育の活性化

(1) 情報教育関連研修会の受講者数と内容

表1は、平成11年度と平成12年度における本センターの情報教育専門研修の中でインターネットに関する研修会の受講申込者数を比較したものである。

表1 情報関連専門研修受講申込者数比較 (人)

研修会名	ランク	H11	H12
情報教育入門	初級	47	93
インターネット入門	初級	79	142
インターネット活用	中級	78	110
情報教育担当者	上級	30	30
夜間開放講座	初・中級	132	91
合計		366	466

平成12年度は前年度と比較して、受講者数が大幅に増加していることが分かる。ただし、受講者のおよそ8割は小学校教員で、教員数からすると中・高の受講比率は低い。

研修会の内容は、初級がウインドウの基本操作から日本語入力、ブラウザの閲覧、検索エンジン、電子メールの使い方。中級がWebページの作成、JavaScript、CGI（カウンター、掲示板等）、FTPによるファイル転送。上級は、ネットワークの理論、情報モラル、著作権に関する講義、校内LAN・インターネットの構築、ネットワーク管理の実習。以上の3段階となっている。授業での活用については、情報以外の教科等研修会でも設定している。

したがって、各学校の情報担当者以外の教員については、小・中・高・養護学校とも、最低限、上記初級レベル研修会と、各教科での活用研修の受講が望まれる。

(2) 校内情報研修会の実態

今年度の仙台市教員情報リテラシー向上プロジェクト事業では、各学校が年2回以上の校内研修会

を行うことになっている。その研修内容を見ると、ほとんどの小中学校で上記センター研修会の初級レベルをクリアしており、約半数が中級レベルまで進んでいる。さらに、校内における情報教育担当者は、第1回、第2回担当者協議会での研修、本教育センター情報研修班指導主事、各学校情報アドバイザー、さらにネットワーク業務委託のヘルプディスク等の個別支援によってスキルがアップし、上級レベルの内容を校内研修会で実施している学校も多い。

研修回数については、小学校が5回以上実施しているところが多く、中学校は2回程度の学校が半数である。来年度は、各学校における操作可能率と、インターネットやコンピュータによる授業実践率を配慮した校内情報研修会の充実が図られなければならない。

(3) 校内研修会による活性化の事例

先進的教育用ネットワークモデル事業の指定校である三条中学校では、本年度、操作可能な教員91%、授業実践率85%を達成しており、特に教科での実践率は75%に達している。

これは年度当初、研修計画を立てる際に、全教科での研究授業を行うことを申し合わせ、教科部会毎に話し合いを進めながら、普段の授業に一工夫も二工夫もして、授業実践に取り組んだ結果である。

研究授業とその後の検討会に一度参加させもらったことがあったが、他教科の教師からもメディアの使い方、時間配分、生徒の活動場所、評価の方法等々様々な意見が述べられた。さらに総合的な学習の時間におけるメディアの活用の在り方やチームティーチングの在り方にも話が弾み、様々なアイディアが出されていた。自由な雰囲気の中で、活発な意見交換がなされ、全員が生き生きとして楽しそうであった。

授業をサポートする校内リーダーの存在と管理職の後押しが、教師一人一人の力を引き出し、活性化を生み出したのだといえよう。

(4) メディアを活用した授業は誰にでもできる
インターネットを活用した授業のある教師が行うとして、その研究授業を参観する教師について考えてみよう。どの学校でも一人一人の教師はすばらしい授業実践者である。コンピュータに詳しくなく、また専門が異なっていても、授業自体の評価はできる。それはどのようなメディアを使ったとしても、授業であることには変わりがないからである。

したがって、前述した事例のように、検討会では様々な意見やアイディアが生まれる。最初はTTで始めて、次からは一人でもできる。メディアを使った授業の工夫と実践とは、誰にでもできるのものである。

(5) 大変だがやりがいのある校内リーダー

情報教育の校内リーダーに求められる資質は簡単に言えば「面倒見の良さ」であろう。換言すれば、人間味あふれるマネジメント能力である。そうした人間関係の輪が少しずつ広がっていくと、一人一人の教師が情報教育に関心をもって、自立していくようになる。そこまでいくには、当然時間の問題や困難が付きものだが、その波及効果は情報教育に限らず、学校での教育全体の活性化にもつながるものと確信する。

■2 共同学習・交流学習で広がる可能性

(1) 学校インターネット事始め

ところで、我が国初の学校インターネット利用環境提供事業は、平成7年度～10年度の100校プロジェクト、新100校プロジェクト（以下、プロジェクト）である。宮城県では宮城教育大学附属小学校、仙台市立第一中学校、東北学院大学中学高等学校が指定を受け、実践研究に取り組んだ。

このプロジェクトを企画・運営した情報処理振興事業協会（以下、IPA）と財団法人コンピュータ教育開発センター（以下、CEC）は、プロジェクトの趣旨について、次のように述べている。

「このプロジェクトでは、ネットワークの先進的機能を先導的に導入することにより、学習活動がいっ

そう高度で能動的なものになるほか、国内外の学校・生徒との情報交換やデータベースなどの知的資源へのアクセス・活用が可能となり、創造力・思考力・表現力などの能力を抜本的に高めることができるとといった、従来の枠を越えた教育・学習の可能性を実証することをねらいとしています。」

ここには、これからのインターネットを活用した新しい授業が目指す原点ともいいうべき内容が述べられているので、ぜひ参考にしていただきたい。



図1 Eスクエア・プロジェクトのWebページ

(2) 100校プロジェクトの学校が目指したもの
当時のネットワーク環境は、回線速度アナログ28K～INS64で、Webサイトとメールサーバーを自校で運営し、メールアカウントが自由に発行できた。この環境の中で、多くの学校が考えたのは、決してネットサーフィンをしたり、子どもたちに調べ学習をさせたりすることではなく、電子メールや自校のWebサイトを通して、海外や他校と共同学習したり、交流学習を行うということであった。

具体例をあげると、平成7年度の実践研究では、次のような共同企画があった。

- ① 教育素材・教材の交換や地域情報の交換
「情報交換型利用企画」
- ② 共通の目的で参加者が共同・協調行動
「共同学習型利用企画」
- ③ 会議空間を設定、様々な問題を協議
「ネットワークカンファレンス型利用企画」
- ④ 障害による格差解消を目指す
「特殊教育共同利用企画」
- ⑤ ネットワーク上の仮想展示空間による
「ネットワークコンテスト」

等である。酸性雨調査やケナフ栽培の企画、海外の日本人学校との交流は、このプロジェクトから生まれた。

情報ネットワークを活用した双方向の学習タイプとして、参考にしていただきたい。

(3) 共同学習や交流学習のレディネス

ところでこうした共同企画を実践していくためには、教師のマネージメントが非常に重要である。また、児童生徒が共同企画に参加し、成果を上げるための前提条件が必要である。

海外との交流という新奇さだけで学習が成り立つはずはないし、ネットを活用する上でのマナーが身に付いていなければ、相手に対して迷惑をかけることにもなる。事前準備と授業設計、それを実現するための児童生徒の段階的なレディネスがあって、はじめて成果をあげられるのである。

(4) 情報活用の実践力の育成

小学校から発達段階に応じてリテラシーを身に付けさせ、自分の考えがはっきり持てるようになる中学、高校へとステップを踏んでいけば、これらの実践を通して身に付く児童生徒の情報活用の実践力は相当高度なものになる。

例えば市内の中学校には、情報教育はもちろん、教科や総合的な学習の時間等の3年間の積み重ねによって、海外との交流において自由に電子メールを英語でやりとりできる生徒たちがいる。「こ

うした子どもたちの姿を見ると、今までの苦労も報われる」と担当教師は述懐している。こうした成長の姿こそが教師にとって一番の生き甲斐であり、情報教育もまた、他の教育同様、目指すところは同じなのである。

■ 3 今後の教育情報ネットワークのあり方

これまで述べてきたとおり、仙台市教育センター情報研修班では、教育指導課情報教育班をはじめ、関係部局、関係諸機関と連携を図りながら、情報教育の推進に努めてきた。

ミレニアムプロジェクトの提言を受け、これから仙台市教育情報ネットワークの在り方を示すキーワードを三つあげる。

すなわち、「教育情報ネットワークとしてのポリシーの確立」「全市的な共同企画の継続的実践」「学校教育を支援する身近な教育情報ネットワーク」である。

これらは、「仙台まなびの杜21—仙台市教育ビジョン」の3つの柱、「まなぶ力」「まなぶ機会」「まなぶ資源」にも、深く関わるものといえよう。

おわりに、仙台市の情報教育が立ち上がった当初から今日に至るまで、様々なアドバイスをいただいてきた東北学院大学岩本正敏助教授、岩手県立大学鈴木克明教授をはじめ、宮城教育大学水谷好成助教授、鵜川義弘助教授、仙台電波工業高等専門学校脇山俊一郎助教授、宮城大学田代久美助手、情報教育研究推進委員会の委嘱委員の先生方から多大なご支援、ご助言をいただいている。ここに改めて感謝申し上げる次第である。

参考文献

「平成13年度学校教育 推進の指針と指導の重点」仙台市教育委員会 平成13年2月発行

抄 錄

総合的な学習の時間の推進に関する研究

(第3年次)

—小・中学校のカリキュラム作成の事例を通して—

キーワード 総合的な学習の時間、カリキュラム作成、カリキュラムの開発
 教育課程への位置付け、カリキュラム作成の方策
 実践事例

本研究は、総合的な学習の時間を推進するために3年間の継続研究として取り組んできた第3年次のものである。新教育課程移行期間を踏まえ、小・中学校における総合的な学習の時間のカリキュラム作成の在り方を、カリキュラムの開発や教育課程における位置付けの視点から検討し、カリキュラム作成上の課題解決のための具体的な方策を提言するとともに、小・中学校12校の実践事例を紹介した。

仙台市教育センター教育研究紀要第8号 平成13年3月

実態調査

「仙台市の子ども—2000」

—児童生徒実態調査—

キーワード 実態調査、仙台市の子ども、生活実態

本調査は、仙台市の小・中学生の生活実態や意識を探り、そのデータを提供することによって、本市の教育行政の推進に資することを目的として行った。仙台市内小学校14校444名、中学校14校463名、合計907名の児童生徒から回答を得ることができた。

その結果、仙台市の児童生徒の生活実態や意識等を探ることができ、素材としてのデータを提供することができた。

仙台市教育センター教育研究紀要第8号 平成13年3月

情報教育

情報教育の推進に関する研究 —ミレニアム・プロジェクトを受けて—

キーワード ミレニアム・プロジェクト, 教員情報リテラシー, IT社会
先進的教育用ネットワークモデル地域事業, エル・ネット, 情報活用能力
交流学習, 共同学習, 電子掲示板

児童生徒がよき市民の一人として、これからの中社会で生きていくためには、子供たち同様、教員もまた情報リテラシーを身につけなければならない。教育センターは、「ミレニアム・プロジェクト」を受け、平成11・12年度、5つの新規事業を立ち上げ、それぞれの連携を図りながらこの課題に取り組んできた。その実践の結果、これからの仙台市における情報教育の方向性を提言するとともに、その実践事例も紹介した。

仙台市教育センター教育研究紀要第8号 平成13年3月

教育研究紀要

『教育は いま』 第8号

発行日 平成13年3月31日

編集・発行 仙台市教育センター

所長 早坂 祥

所在地 〒983-0825 仙台市宮城野区鶴ヶ谷北1-19-1

TEL (022) 251-7441~3

FAX (022) 251-7486

Web ページ <http://www.sendai-c.ed.jp>

代表E-mail info@sendai-c.ed.jp

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています